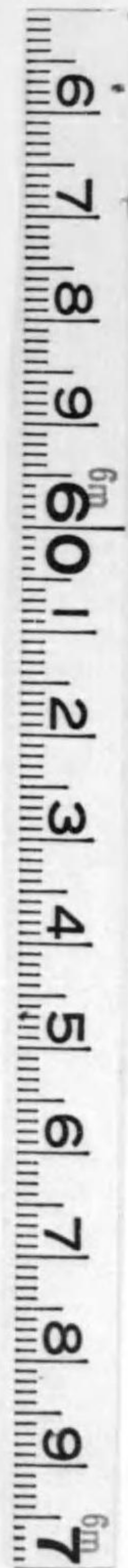


56

1421

事故本

ケルージ  
P.108-110, 115-116  
221-222, 239-240  
275-276, 271-280  
285-286, 375-376  
S. 60. 8. 14



始





2180-46



# 産婆學教科書

東京助醫女學校  
校長醫學士 佐久間兼信纂著

第一卷 豫備編



58-1424



はしがき

産婆學は醫學殊に産科學中の一部份  
 従つて其教科書を作るに當り人々其取るべき範圍を異  
 にするを以て、或る一の教科書丈けにて學習したるも  
 のは、其書物におき部分の政府試験問題に接したる時  
 に答ふる事が出来ない。然るに本書及獨習説明書は各  
 地方の最近試験問題を参照して政府試験に應じ得らる  
 様に便宜に編纂してある。尤も普通の試験答案集と  
 はしがき

大正  
 43. 10. 2  
 見換

大正  
 8. 11. 28  
 内交



は異り試験問題に出でざりし部分も産婆に必要と認めたる點は悉くこれを網羅し、而も産婆として常に心得可き肝要の範圍と信じたる部分は之を教科書中に載せ、主として受験の爲めに知るを便とする部分は獨習書中に加へ、以て兩者の區別を判然せしめたのである。之により讀者をして常に受験的學習のみに終らしめず、旁々以て産婆學の眞髓をも理解せしめ得ば幸である。

大正七年夏

佐久間兼信識

産婆學教科書第一卷(豫備編)目次

(洋數字は獨習説明書頁數)

緒論

第一章 産婆の職責……………1……………(2)  
 第二章 産婆學の内容……………1……………(4)

第一編 産婆に必要な數學

第一章 溫度……………4……………(6)  
 第二章 尺度……………6……………(13)  
 第三章 重量……………10……………(15)  
 第四章 液量……………11……………(19)  
 第五章 「プロセント」及「プロミルレ」……………11……………(20)

第二編 解剖學及生理學

甲部 人體外部の名稱

目次



第一章 頭首……………12…(27)

第二章 頸部……………16…(27)

第三章 軀幹……………16…(27)

第四章 四肢……………11…(27)

乙部 人體の諸組織

(甲) 硬組織

第一章 骨……………14…(32)

第一節 頭骨……………16…(32)

    頭蓋骨……………16…(32)

    顔面骨……………17…(32)

第二節 軀幹骨……………17…(32)

    脊柱……………18…(32)

    胸廓……………18…(32)

    骨盤……………18…(34)

一 骨盤の各骨……………18…(33)

    薦骨……………18…(34)

    尾椎骨……………18…(35)

    骶骨……………18…(35)

二 骨盤の關節及靱帶……………20…(34)

三 大骨盤と小骨盤……………21…(37)

    甲 大骨盤……………21…(38)

        大骨盤壁 大骨盤測定……………24…(39)

    乙 小骨盤……………24…(39)

        骨盤入口、骨盤洞、骨盤峽、骨盤出口、

        骨盤壁、骨盤傾斜、骨盤軸、骨盤男女の差異、

        骨盤内臓器……………24…(39)

第三節 四肢骨……………25…(43)

第二章 軟骨……………25…(44)

第三章 齒牙……………25…(44)

(乙) 軟組織

第一章 皮膚……………27…(48)

第二章 粘膜……………28…(49)



第三章 漿膜.....(49)

第四章 結締組織.....(49)

第五章 脂肪組織.....(50)

第六章 筋肉.....(50)

第七章 循環器.....(53)

第一節 血管系.....(53)

一 心臟 二 血管 三 血液 四 血液循環

五 心臟搏動及脈搏

第二節 淋巴管系.....(57)

一 淋巴管 二 淋巴液 三 淋巴腺

第八章 神經系.....(58)

第九章 內臟.....(64)

第一節 呼吸器.....(64)

第二節 消化器.....(67)

第三節 泌尿器.....(75)

第四節 生殖器.....(78)

男性生殖器.....(78)

女性生殖器.....(81)

甲 外生殖器.....(81)

一 乳房.....(81)

二 外陰部.....(82)

乙 內生殖器.....(84)

一 子宮.....(84)

二 輸卵管.....(88)

三 卵巢.....(89)

四 卵巢.....(89)

生殖器の生理.....(96)

第一 月經.....(96)

第二 排卵.....(106)

第三 受胎.....(108)

第五節 血管腺.....(112)

第三編 消毒法

第一章 細菌.....(119)

第二章 消毒の必要なる理由.....(120)

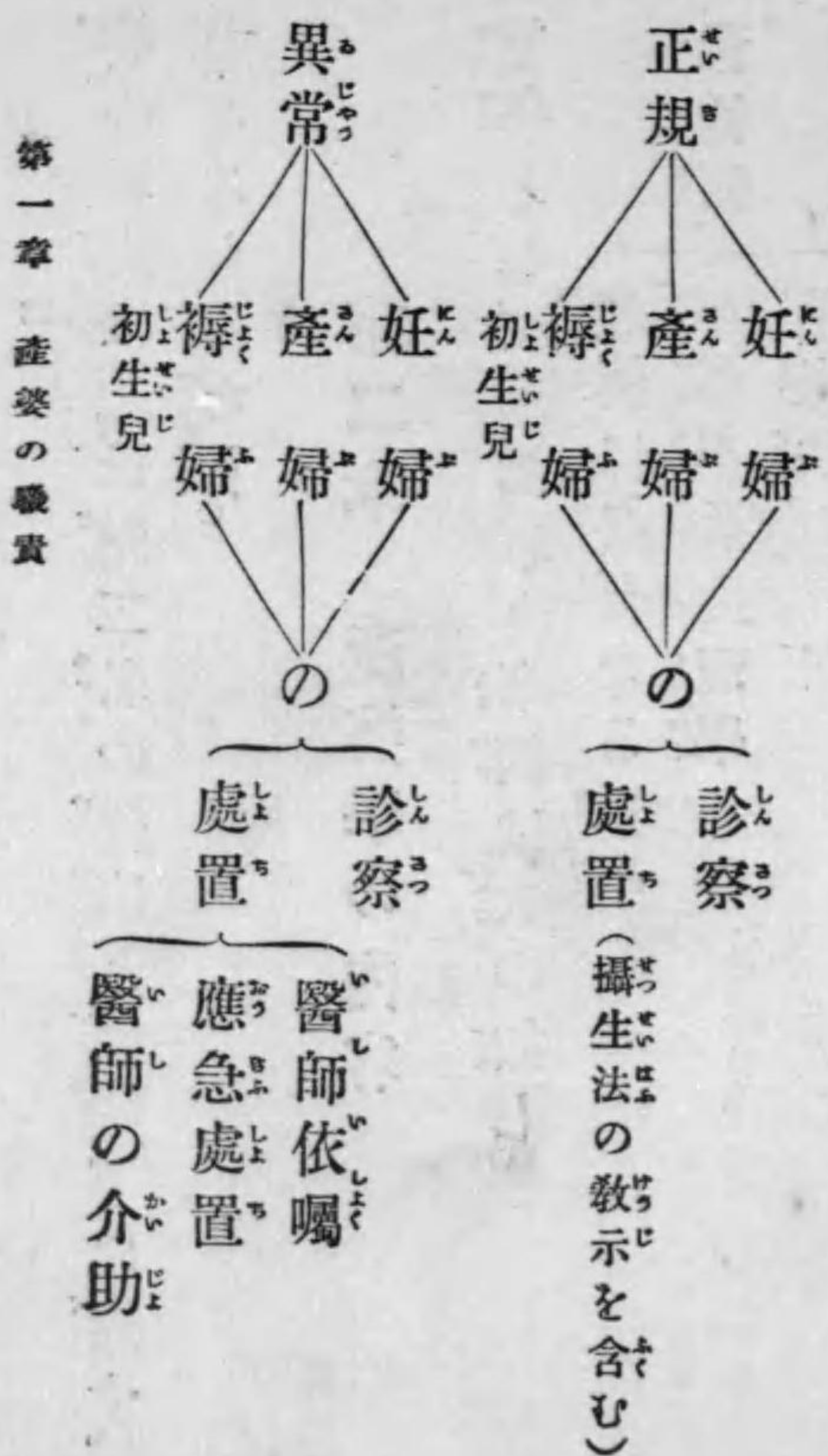


第三章 制腐法と防腐法	112 (121)
第四章 消毒法の種類	116 (122)
第五章 消毒薬	116 (123)
第一節 消毒薬の種類	116 (123)
第二節 消毒薬の用法	116 (125)
第六章 消毒の方法	110 (132)
第一節 手指及皮膚の消毒法	110 (132)
第二節 外陰部の消毒法	114 (135)
第三節 器械の消毒法	116 (139)
第四節 綿帯材料の消毒法	116 (143)
第五節 衣類の消毒法	117 (145)
課外講義 (獨習説明書)	
半陰陽	(91)
月經	(96)

# 緒論

## 第一章 産婆の職責

産婆の職責は次の如し。



第一章 産婆の職責



緒論  
 産婆の職責は『母兒二名の健康と生命』に關す、故に極めて重大なるものなり。

## 第二章 産婆學の内容

産婆學として學ぶ可き事柄は次の如し。

産婆に必要な數學

豫備編  
 解剖學及生理學

消毒法



異常  
 妊娠 産褥 分娩 産褥  
 の状態・診察・處置

但し、妊娠は妊婦に關し、分娩は産婦に關し、産褥は褥婦及初生兒の兩者に關す。

補足編

産婆に必要な看護法及介助法。  
 器械と繃帶の名稱及使用方法。  
 産婆に關する法令。  
 産婆の資格及心得。



# 豫備編

## 第壹編 産婆に必要なる數學

### 第一章 溫度

一、檢溫器の種類。  
溫度を計るには、檢溫器を用ふ。産婆の使用する檢溫器に次の三種あり。

#### 檢溫器

- (一) 體溫計……妊婦、産婦、褥婦、嬰兒等の體溫を計る。
- (二) 浴湯檢溫器……浴湯の溫度を計る。
- (三) 寒暖計……産室等の氣溫を計る。



第壹圖 浴湯檢溫器

二、檢溫器盛の種類。  
檢溫器を、其度盛の方法により、次の三種に分つ。

列氏(レオミュール氏)……(獨逸等にて俗間に用ふ)

攝氏(セルジウス氏)……(體溫を計るに用ふ。單に何度と云ふは攝氏と知るべし)

華氏(ファーレンハイト氏)……(我邦にて氣溫に用ふ。英・米にては體溫にも用ふ)

三、氷點と沸騰點。

氷點(水の氷結する溫度)三氏共同一  
列氏は 〇 度  
攝氏は 〇 度  
華氏は 三十二度  
とす。



沸騰點(水の沸騰する溫度)三氏共同一

列氏は 八〇度  
攝氏は 一〇〇度  
華氏は 二一二度  
とす。

氷點と沸騰點との間を

列氏は 八〇等分し  
攝氏は 一〇〇等分し  
華氏は 一八〇等分し  
其各を一度とす

即ち華氏沸騰點は氷點以上は一八〇度なれど、〇度以上は  
 $180 + 32 = 212$  一一二度となる。



第貳圖 三氏度目の檢溫器

#### 四、三氏檢溫器度數換算法。

三氏檢溫器の度數を換算するには、  
以上  $80 : 100 : 180$  即ち  $4 : 5 : 9$  の割合を以て比例  
を立つ可し。

表 一 第

列氏より	$列 \times \frac{5}{4} = 攝$	攝氏より	$攝 \times \frac{4}{5} = 列$
	$列 \times \frac{9}{4} + 32 = 華$		$攝 \times \frac{9}{5} + 32 = 華$
三氏檢溫器度數換算公式		華氏より	$(華 - 32) \times \frac{4}{9} = 列$
			$(華 - 32) \times \frac{5}{9} = 攝$

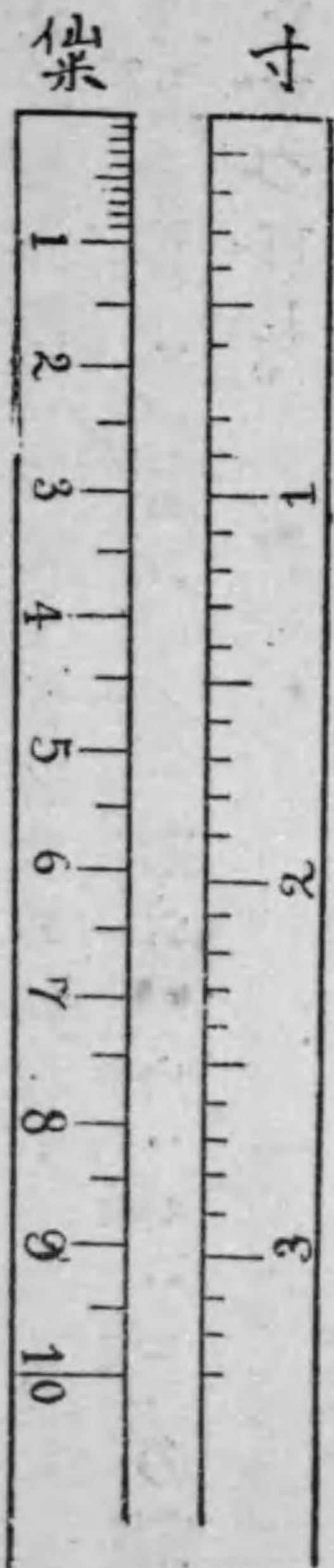
但し列氏又は攝氏より華氏を算出したる時は其數字は華氏



氷點以上の度数なるを以て、これに三十二度を加へて其○  
度以上の度数となす可し。  
又華氏より他の二氏を算出するには其比較に先き立ち、○  
度以上の數字を先づ氷點以上の數字に改むべし（即ち三十  
二度を減ずべし。）

### 第二章 尺度

本邦にては……曲尺  
萬國共通は……「メートル」を用ふ。



第參圖 曲尺及「メートル」尺

- ミリメートル(耗)(密米)……三厘三毛
- センチメートル(糧)(仙米)……三分三厘
- デシメートル(粉)……三寸三分
- メートル(米)……三尺三寸
- デカメートル(秆)……三丈三尺
- ヘクトメートル(稻)……三十三丈
- キロメートル(秆)(基米)……三百三十丈
- 一米||地球子午線の四千萬分の一

第ニ表

米 × 3.3 = 尺
$\frac{\text{尺}}{3.3} = \text{米}$



第三章 重量

本邦にては……貫匁  
萬國共通は……「グラム」を用ふ

- ミ リグラム(厘)(密瓦)……………〇、〇〇〇二六六餘
  - センチグラム(厘)(仙瓦)……………〇、〇〇二六六餘
  - デ シグラム(兪)……………〇、〇二六六餘
  - グラム(瓦)……………〇、二六六餘
  - デ カグラム(珎)……………二、六六餘
  - ヘクトグラム(匁)……………二六、六餘
  - キ ログラム(斤)(基瓦)……………二一六六、餘
- 一瓦 || 攝氏四度の蒸溜水一立方仙米の重量

表三第

算換の瓦と分

分 $\times \frac{3}{8} =$ 瓦
瓦 $\times \frac{8}{3} =$ 分

表四第

量薬用慣邦我

一 匁	一 匁	一 磅
三、五瓦	二、五瓦	四、五〇瓦 (百二十匁)

表五第

數滴の瓦一液薬

酒精類……………廿五滴	油類……………二十滴	水類……………十六滴
-------------	------------	------------

表六第

量 畧 大

一 食匙……………一五、〇	一 小兒匙……………八、〇	一 茶匙……………四、〇	一 刀尖……………二、〇	一 小刀尖……………一、〇
---------------	---------------	--------------	--------------	---------------



### 第四章 液量

我國にては……石斗・升・合・勺  
 萬國共通は……立又は立方仙米  
 一立 || 千立方仙米 || 五、五四四餘  
 を用ふ

### 第五章 「プロセント」と「プロミルレ」

(一) %とは、全量百に對し何程なるやを示す。

例。二% 石炭酸水は 石炭酸 二分  
 水 九八分

第七表

100 倍數	=	% 數
100 % 數	=	倍數
何れも常に 四を添ふ		

(二) %とは、全量千に對し何程なるやを示す。

例。一% 昇汞水は 昇汞 一分  
 水 九九九分



# 第貳編 解剖學及生理學

## 甲部 人體外部の名稱

### 第一章 頭首

甲、

頭蓋(頭部)  
(毛髮の生ずる處)

- 一 前頭
- 二 顛頂(巔頂)
- 三 後頭
- 四 顛顛

(額の毛生際より一手掌幅の間)

(頭蓋の中央、即前頭より後方一手掌幅)

(更に其後方骨の小突起迄、即毛髮の盡くる部の稍上部まで)

(頭蓋の兩側、耳の前上後方)

一 前額部(額)

二 眉間(眉の間)

三 額部(額骨の部)

四 頰部(頰の部)

五 顎部(嚙む時動く骨の部)

六 頤部(顎の先端)

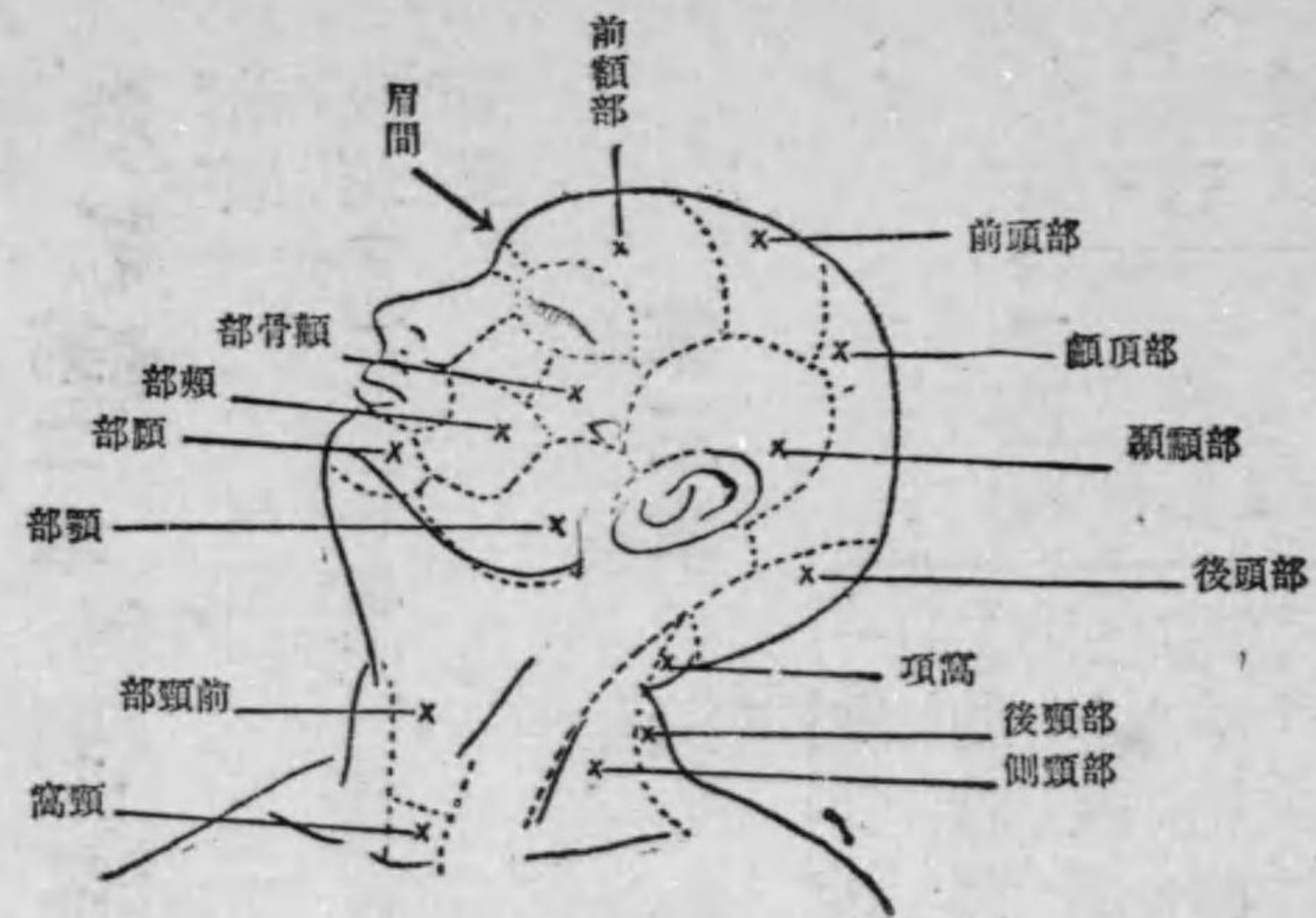
七 耳部

八 眼部

九 鼻部

十 口部

頸項及首頭 圖四第



乙、  
顔面



### 第二章 頸部 (頭首と軀幹との間)

- 前頸部 (附頸窩 (前頸下部の凹陥))
- 後頸部 (附頸窩 (後頸の上部毛髮ありて凹陥せる所))
- 側頸部

### 第三章 軀幹 (胴)

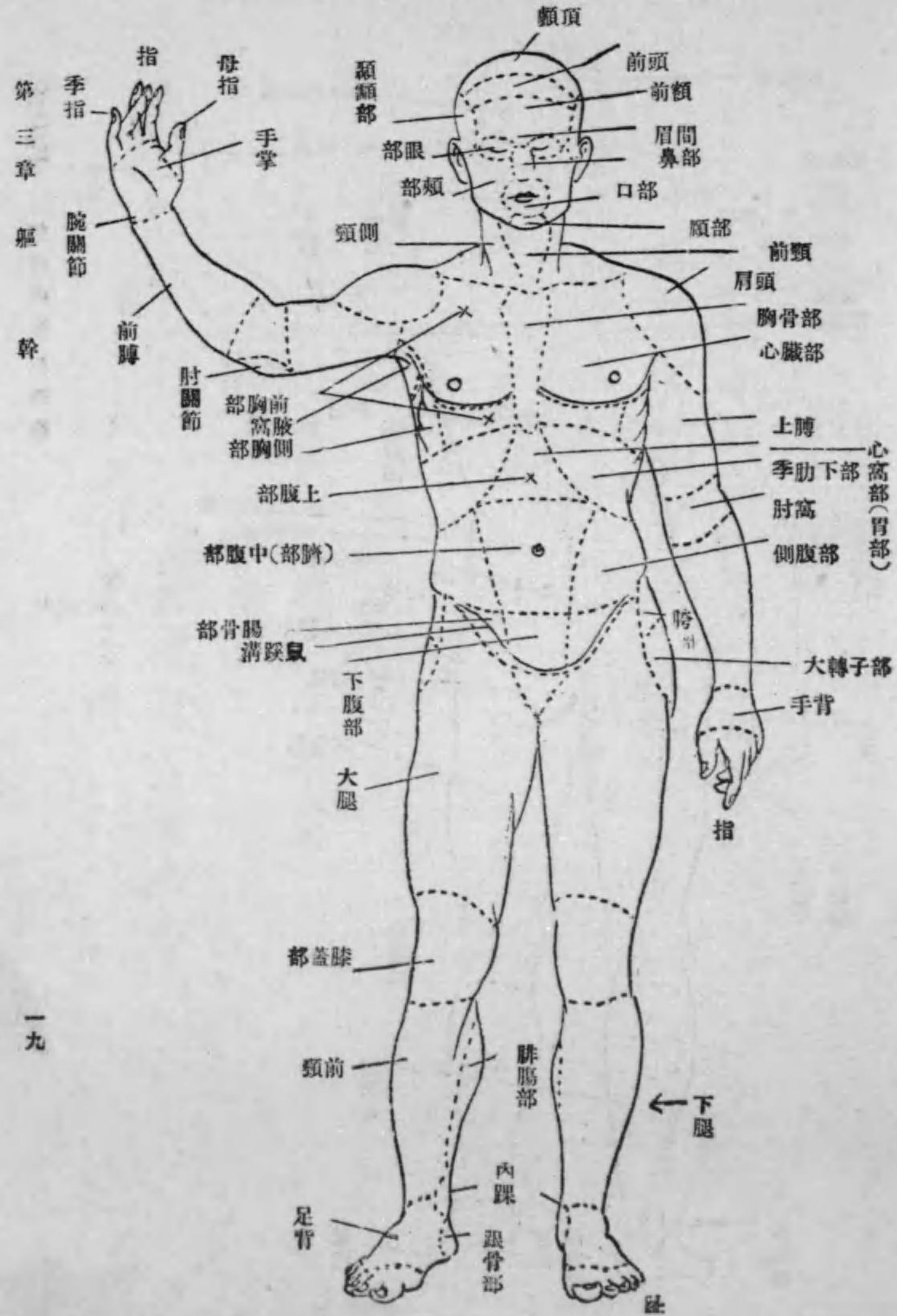
- (甲) 胸部
- 一 前胸 (胸)
    - (一) 胸骨部 (胸の中央にて頸窩と心窩との間の細長き部)
    - (二) 肋骨部 (胸骨部の兩側肋骨のある部)
    - (三) 心臟部 (左乳頭と胸骨部との間にて第三肋骨より第五肋骨迄)
    - (四) 季肋部 (肋骨部の最下部を云ふ)
    - (一) 脊柱部 (中央脊柱のある部)

- 二 背部
  - (一) 肩胛部 (脊柱部上方の兩側)
  - (二) 肩胛間部 (脊柱部と肩胛部との間)
  - (三) 肩胛上部 (肩胛部の上方)
  - (四) 肩胛下部 (肩胛部の下方)
- 三 側胸部 (脇)

- (乙) 腹部
- 一 腹部 (前腹)
    - (一) 上腹部 (上腹上部の三角形凹處を「心窩部」又は「胃部」と云ふ)
    - (二) 中腹部 又は 臍部 (臍の附近)
    - (三) 下腹部 又は 小腹部
    - (四) 季肋下部 (上腹の左右)
    - (五) 側腹部 (中腹の左右)
    - (六) 腸窩部 (下腹の左右) (附鼠蹊部 (腹部と大腿部との間))



第五圖 人體外部名稱 (前面)



二 腰部 (後面)

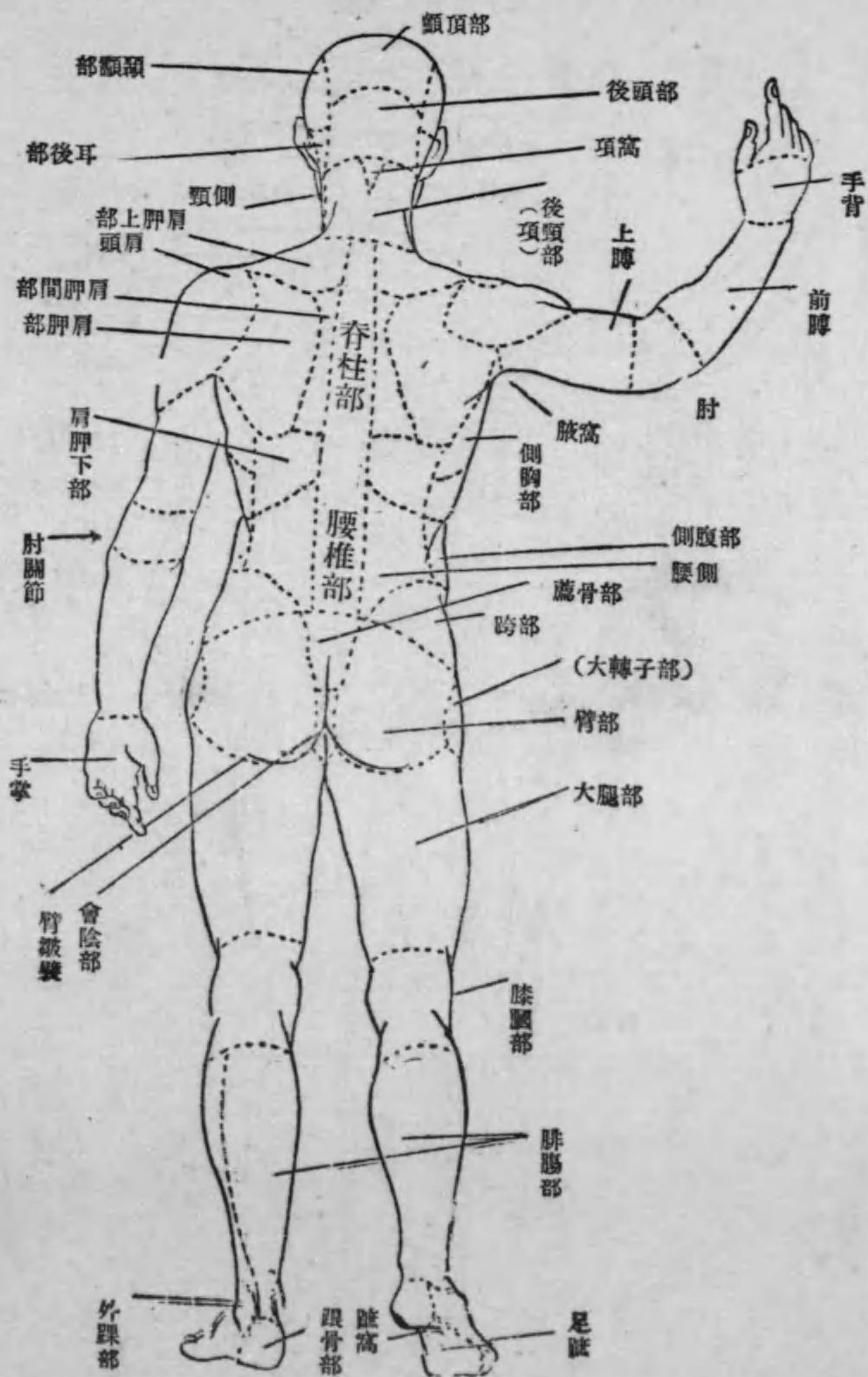
- |            |                 |              |                |           |            |           |
|------------|-----------------|--------------|----------------|-----------|------------|-----------|
| (七) 跨      | (六) 轉子部         | (五) 會陰部      | (四) 臀          | (三) 薦骨部   | (二) 腰側     | (一) 腰椎部   |
| 部 (轉子部の上方) | 部 (兩側にて骨の突隆する所) | 部 (肛門と陰部との間) | 部 (薦骨部の兩側多肉の部) | 部 (腰椎部下方) | 部 (腰椎部の兩側) | 部 (腰部の中央) |

腸窩部 (腹部の六)

骨盤部



(面背) 稱名の部外體人 圖六第

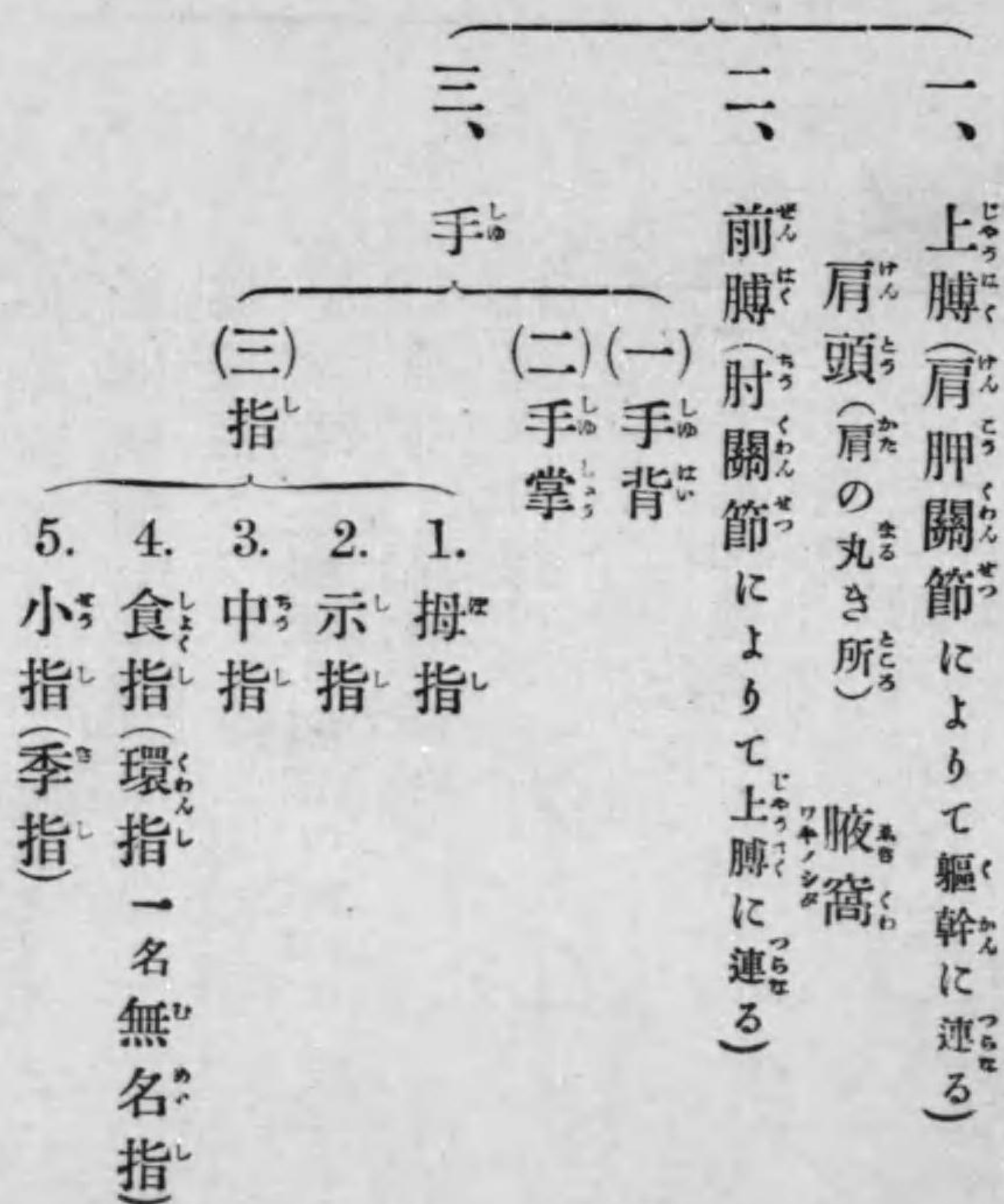


第四章 四肢

第四章 四肢

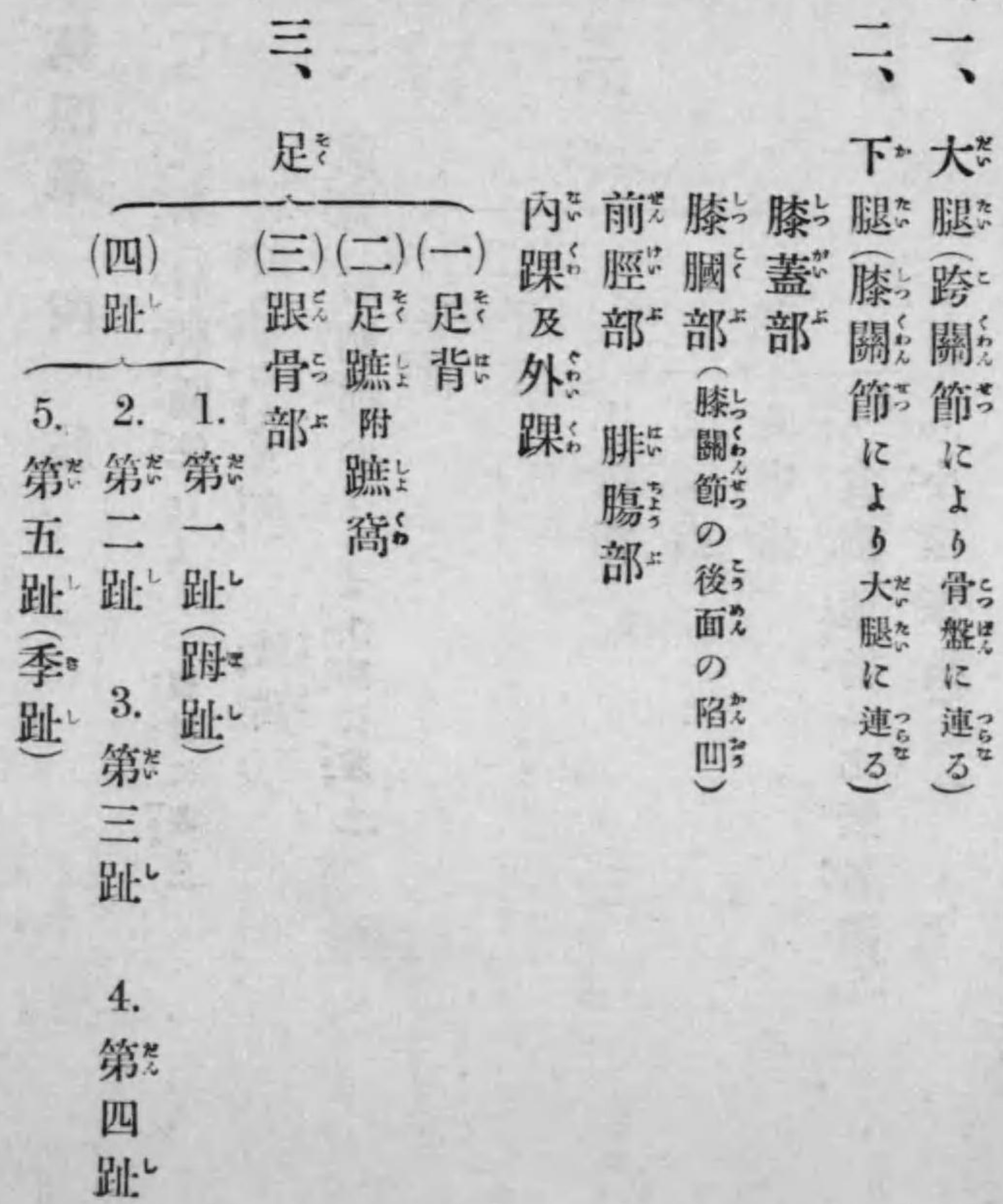
(甲)

上肢

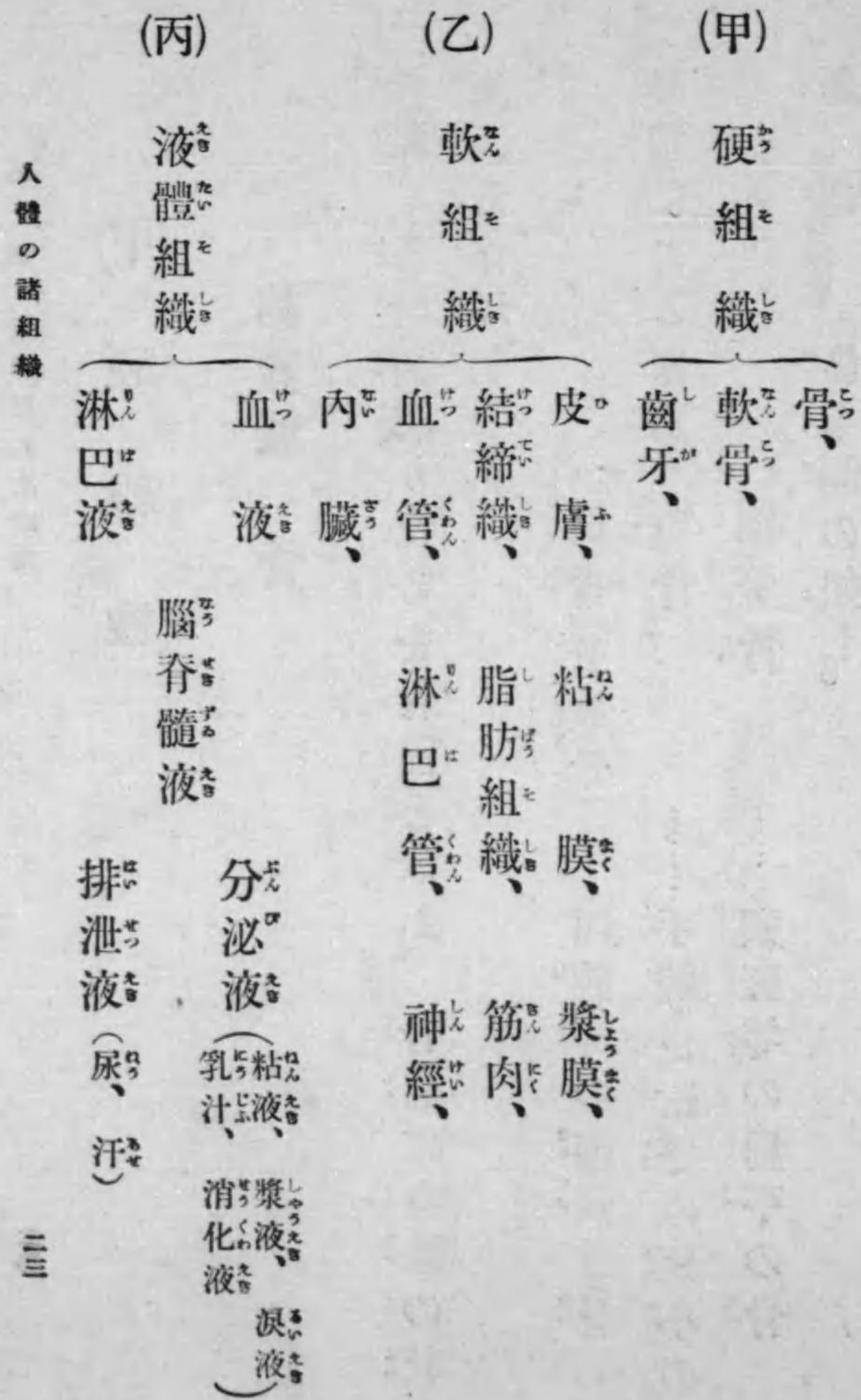




(乙) 下肢



乙部 人體の諸組織





(甲) 硬組織

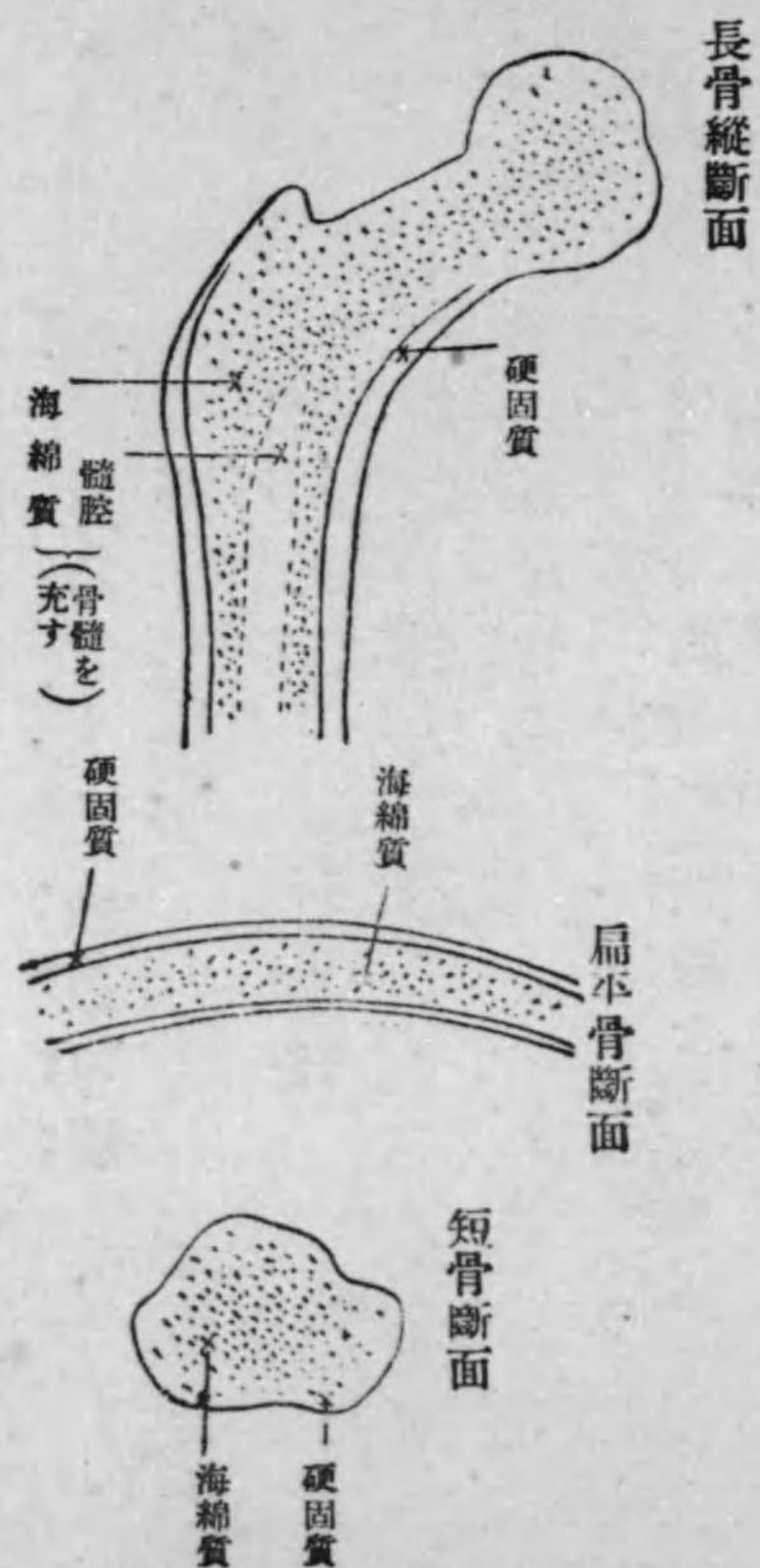
第壹章 骨

(一) 骨骼。各骨相聯りたるを骨骼と云ふ、骨骼は身體の軟部を支ふる作用をなす。

(二) 形状による區別  
長骨〔管狀骨〕……四肢等の細長き骨  
短骨……手腕・足跗等の短小の骨  
扁平骨……頭蓋等の扁平の骨

(三) 断面 第七圖の如し。

第七圖





第壹節 頭骨 22

(甲)

頭蓋骨 8

(六)	(五)	(四)	(三)	(二)	(一)
蝶骨	篩骨	顳骨	後頭骨	前頭骨	顳頂骨
1	1	2	1	1	2

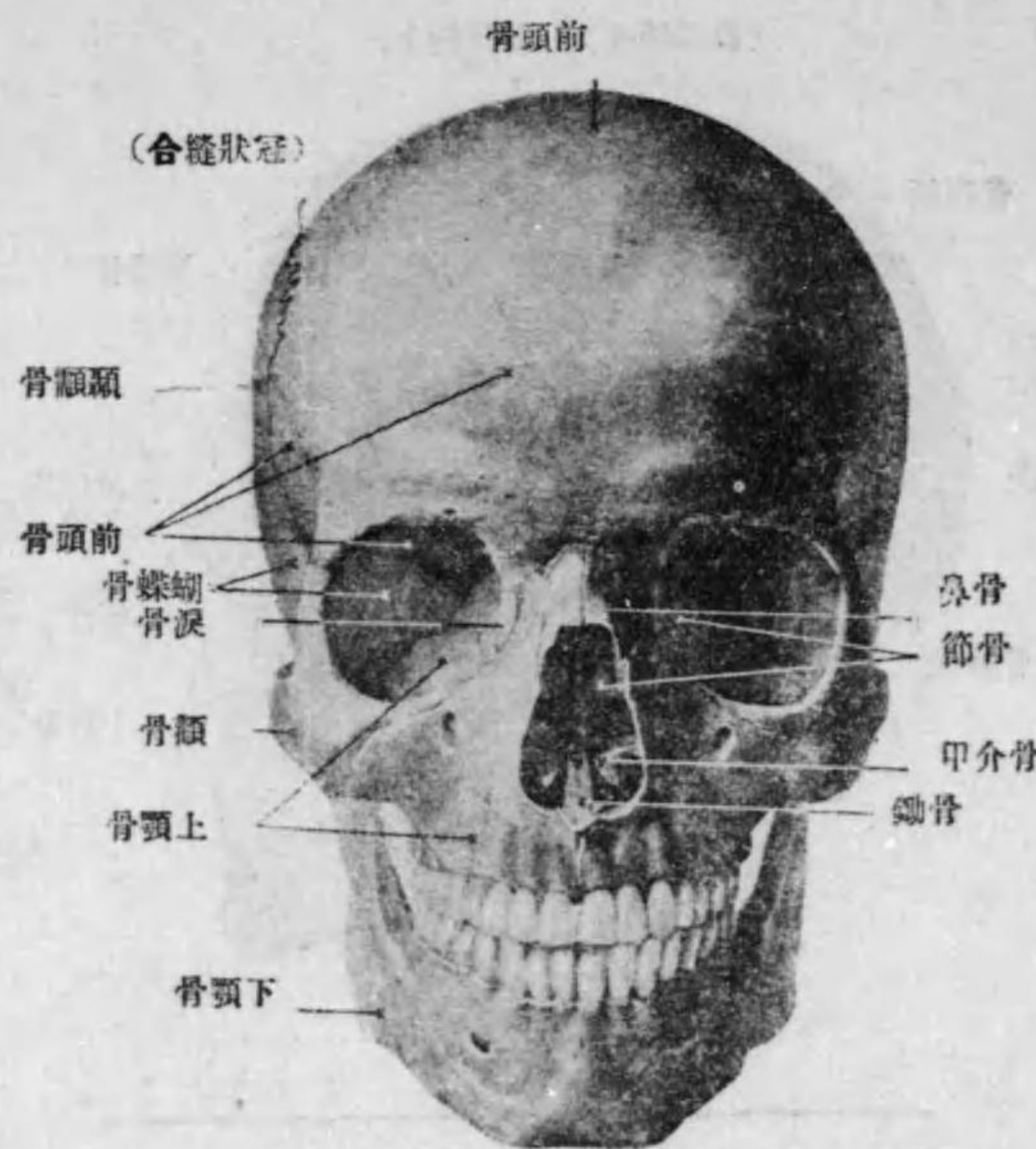
頭蓋底

頭蓋穹窿

附

- (1) 頭蓋腔(腦髓を容る處)
- (2) 大後頭孔(後頭骨下面にあり)
- (3) 頭蓋底等の無數の小孔(血管神經等を通ず)

第八圖 頭蓋骨(前面)



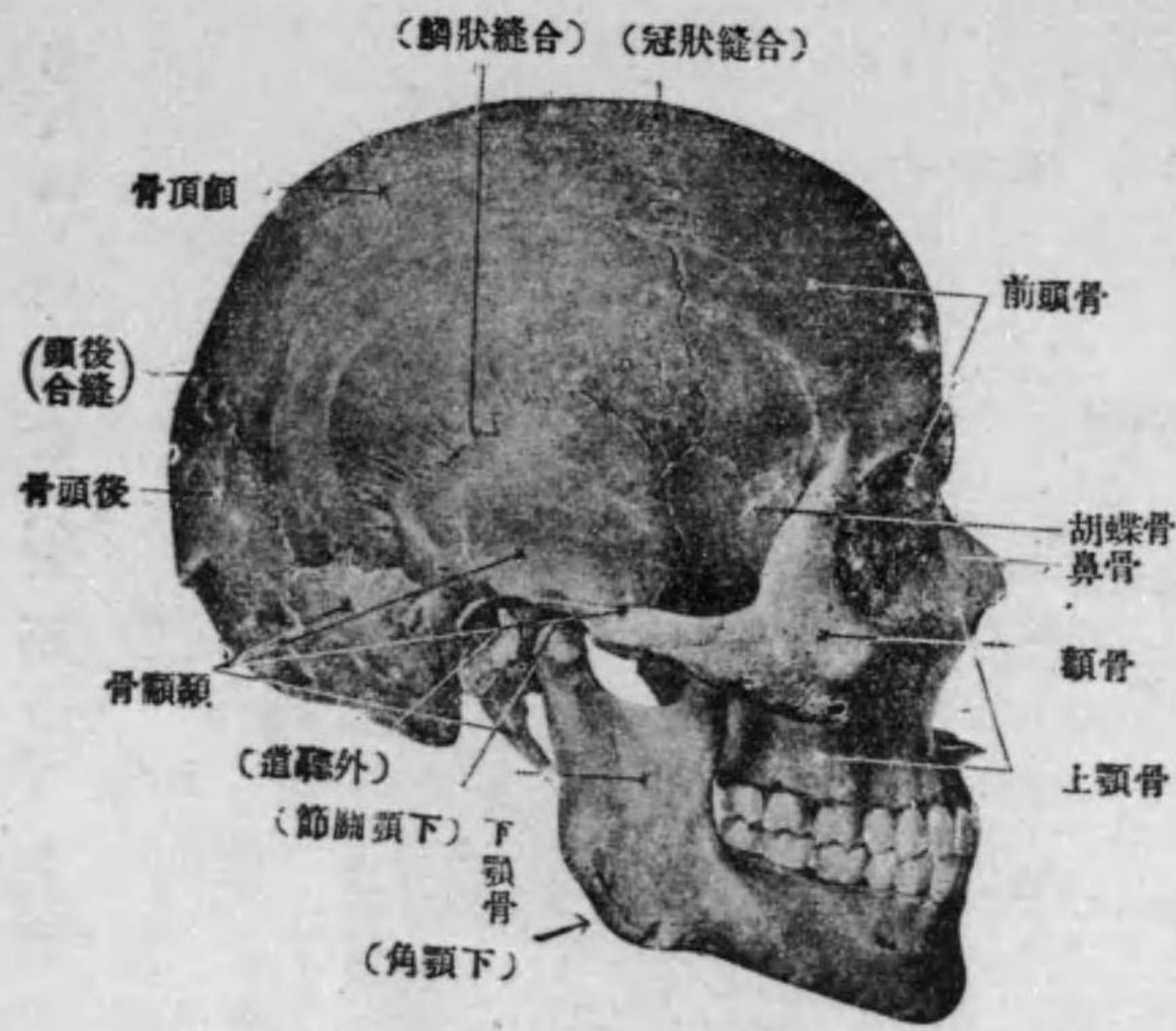
(乙) 顔面骨 14

(八)	(七)	(六)	(五)	(四)	(三)	(二)	(一)
鋤骨	口蓋骨	甲介骨	淚骨	鼻骨	下顎骨	上顎骨	顳骨
1	2	2	2	2	1	2	2

第一節 頭骨



第九圖 頭蓋骨(側面)

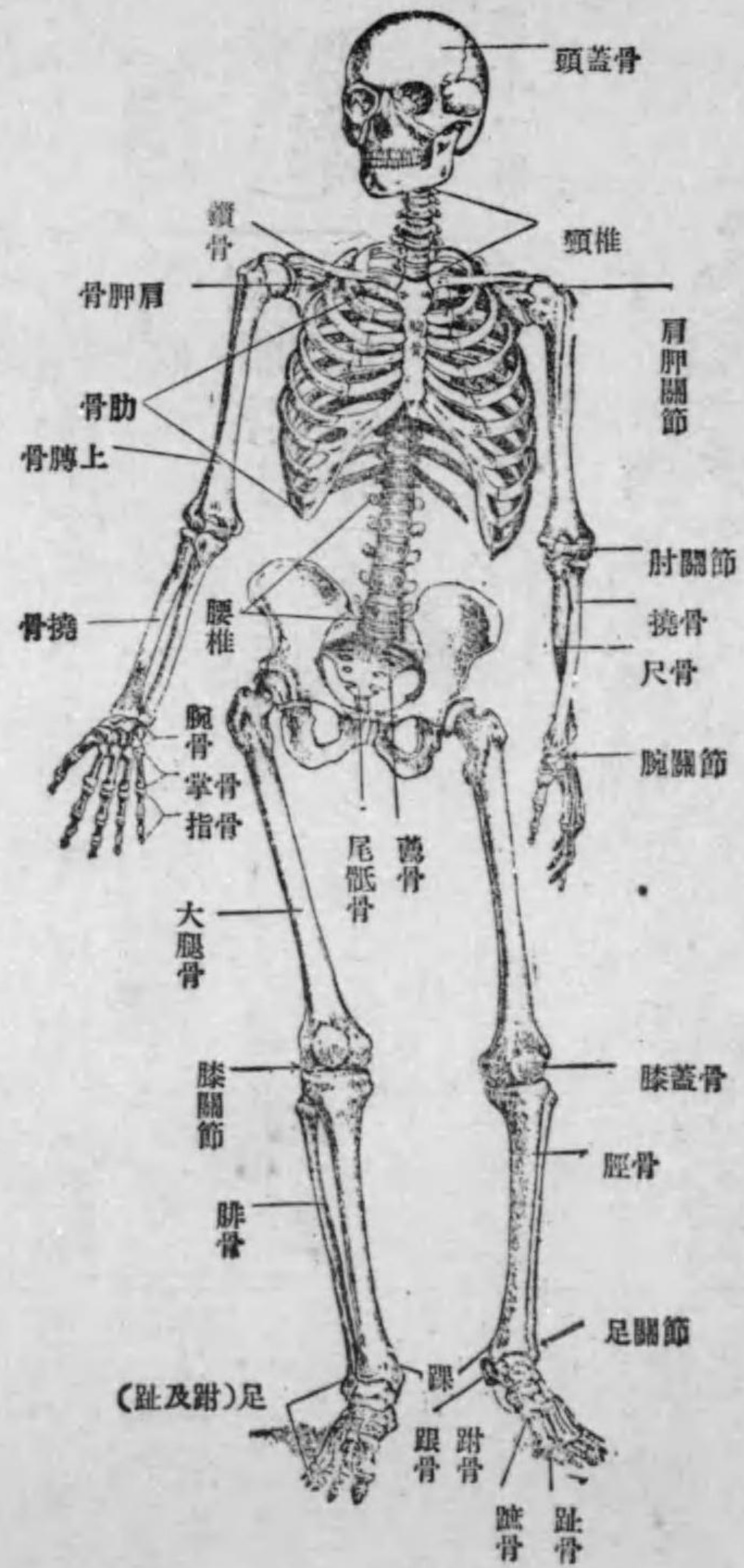


附

- (1) 齒槽突起 (上顎下顎の齒を生ずる部)
- (2) 上顎竇 (一名ハイモル氏竇)
- (3) 下顎關節
- (4) 眼窩 (眼球を容る所)
- (5) 鼻窩
- (6) 口腔

第十圖 骨 格(前面)

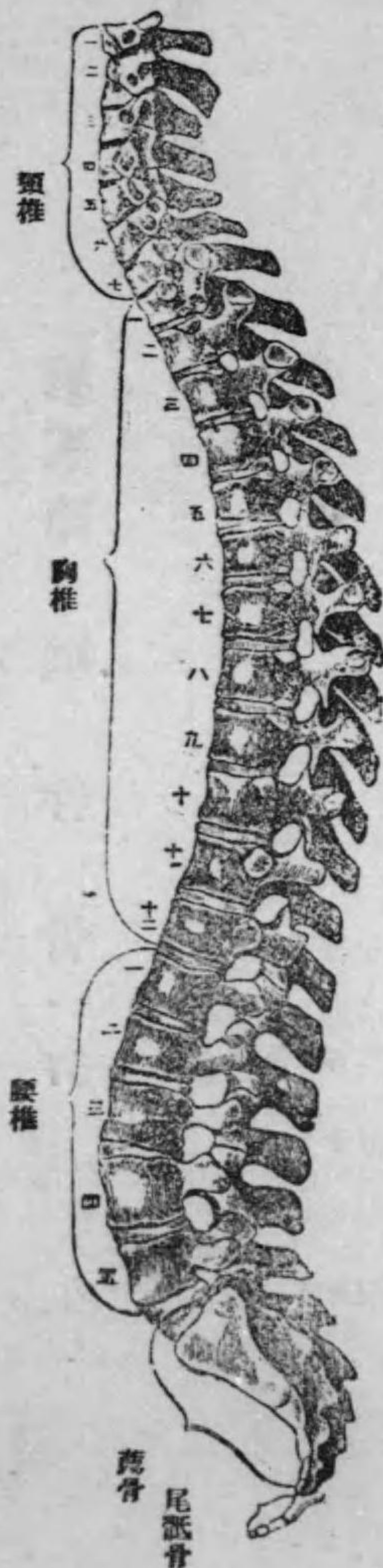
第貳節 軀 幹 骨 57





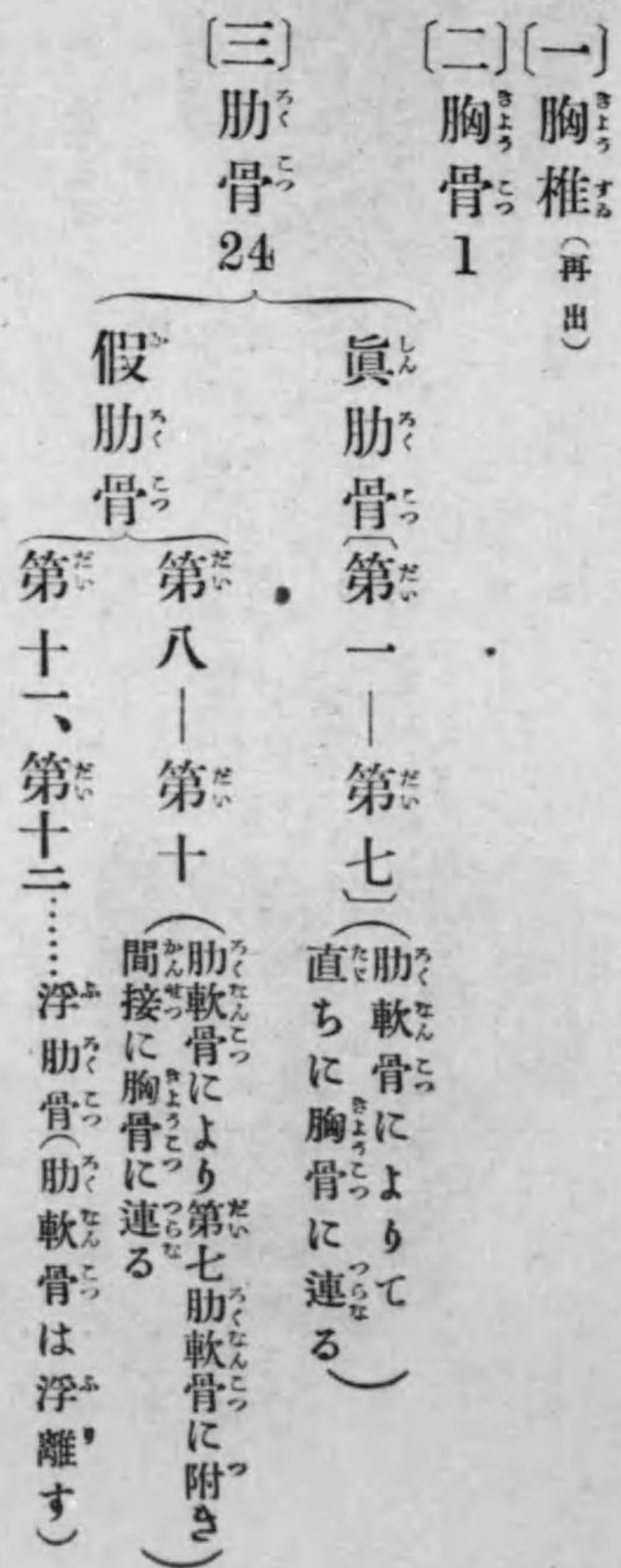


第十一圖 脊柱 (側面)



(乙)

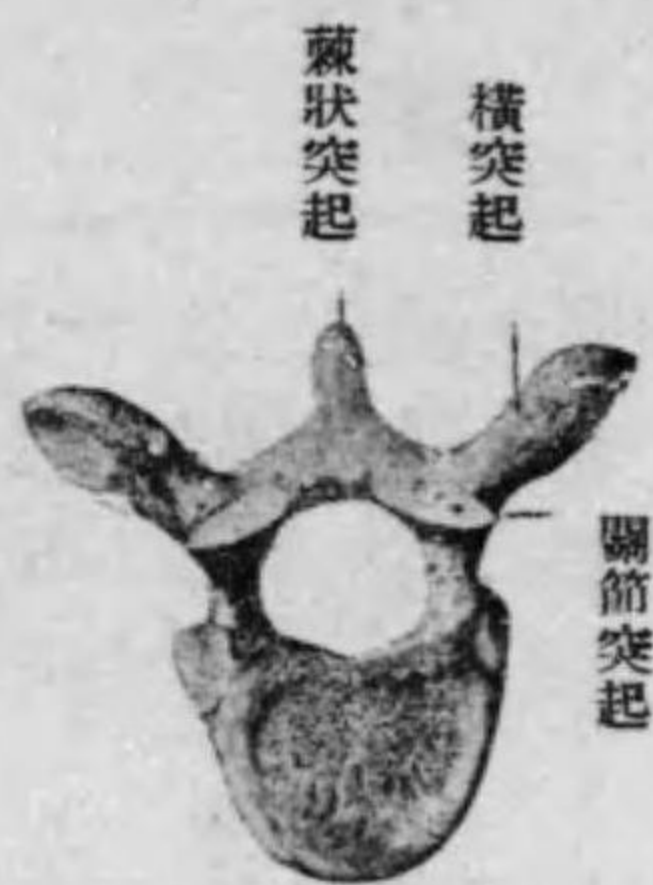
胸廓



圖二十第

(面上) 椎 胸

第貳編 軀幹骨



(面側) 椎 胸





(丙)

骨盤

- [一] 薦骨 (再出)
  - [二] 尾骶骨 (再出)
  - [三] 腸骨 2
  - [四] 坐骨 2
  - [五] 耻骨 2
- 髌骨 (無名骨)

(面前) 骨薦 圖三十第



(面後) 骨薦 圖四十第



一、骨盤の各骨

(一)

薦骨 形三角 (五骨の癒合)

第貳編 軀幹骨…骨盤

- (1) 上端。廣く、第五腰椎と關節を作る。其前方に突出する部分を薦骨岬と稱し、關節面の左右に翼の如く廣がれる部分を薦骨翼と云ふ。
- (2) 下端。狭く、尾骶骨と可動關節を作る、之を薦尾關節(薦骨尾骶骨關節)と云ふ。
- (3) 前面。平滑にして彎凹をなし、四本の横線と四對の孔ありて五個の脊椎骨の集合なるを示す。
- (4) 後面。凹凸不平にして彎隆し、中央に五個の



圖五十第

(面側) 骨薦



圖六十第

(面前) 骨骶尾



(5) 側面

棘状突起あり(其中の或るものは左右に分裂す)  
上方に耳状粗造の關節面ありて、腸骨の同状の面と連りて不動なる薦腸關節を作る。

(二)

尾骶骨(尾閼骨)

(四骨の癒合)

上方は薦骨の下端と薦尾關節を作る。下方に至るに従ひて細くなる。

(三)

髌骨

(無名骨)

(1)

腸骨

(甲) 髌骨より上方の廣き部分

(乙) 腸骨翼(上方の薄き部分)

腸、坐、耻の三骨の癒合にして、其癒合部の外面の凹陥を髌臼と云ひ、こゝに大腿骨の骨頭を容れ跨關節を作る。

(1) 腸骨櫛……腸骨翼の上縁

(2) 腸骨前上棘……腸骨櫛前縁の突起

(3) 腸骨後上棘……腸骨櫛後縁の突起

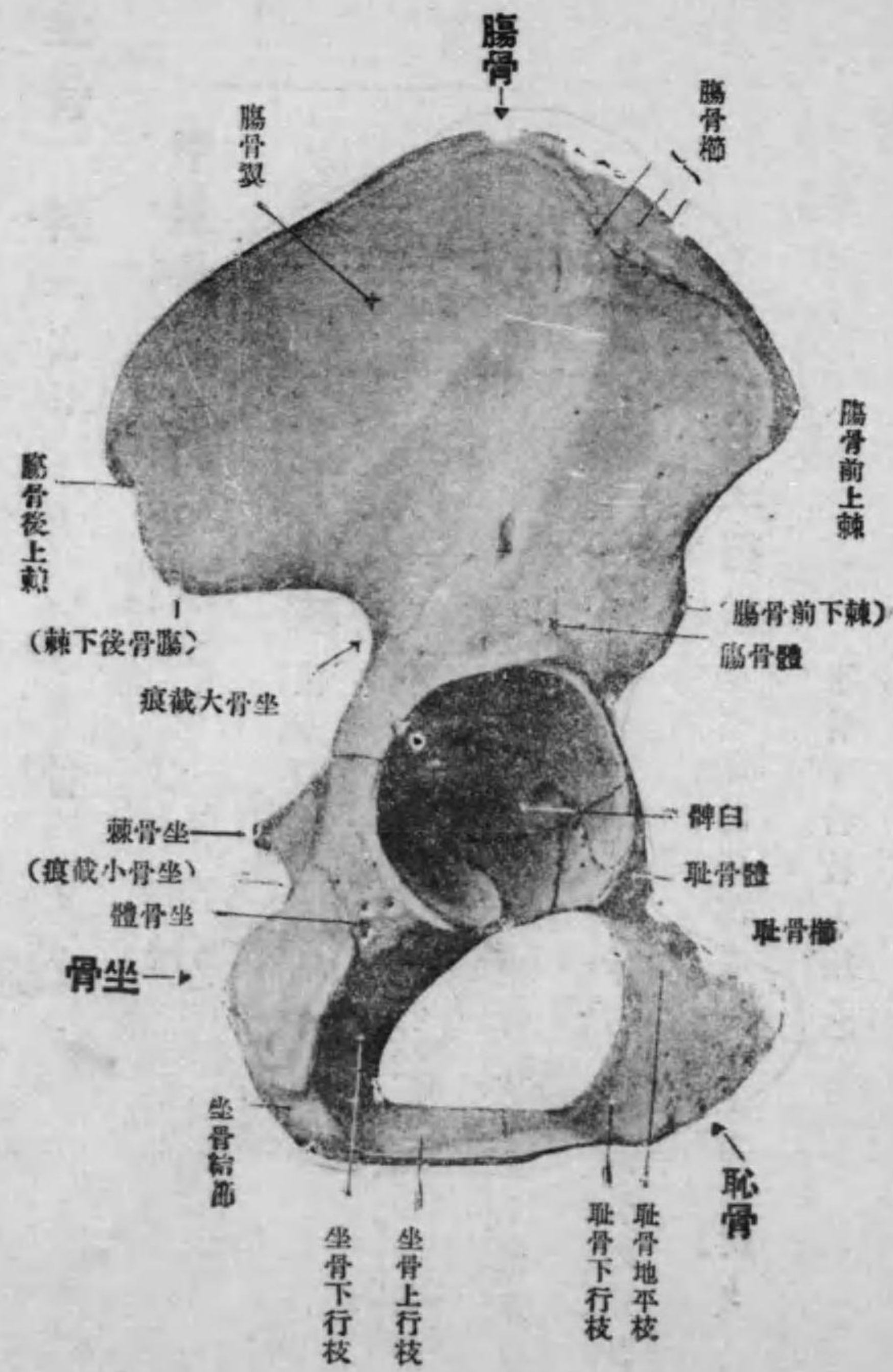
(4) 腸骨弓状線(無名線)……腸骨内面にて腸骨體と翼との間の弓状線

(5) 薦腸關節……腸骨弓状線の後方にある粗造の耳状面と薦骨の耳状面との間



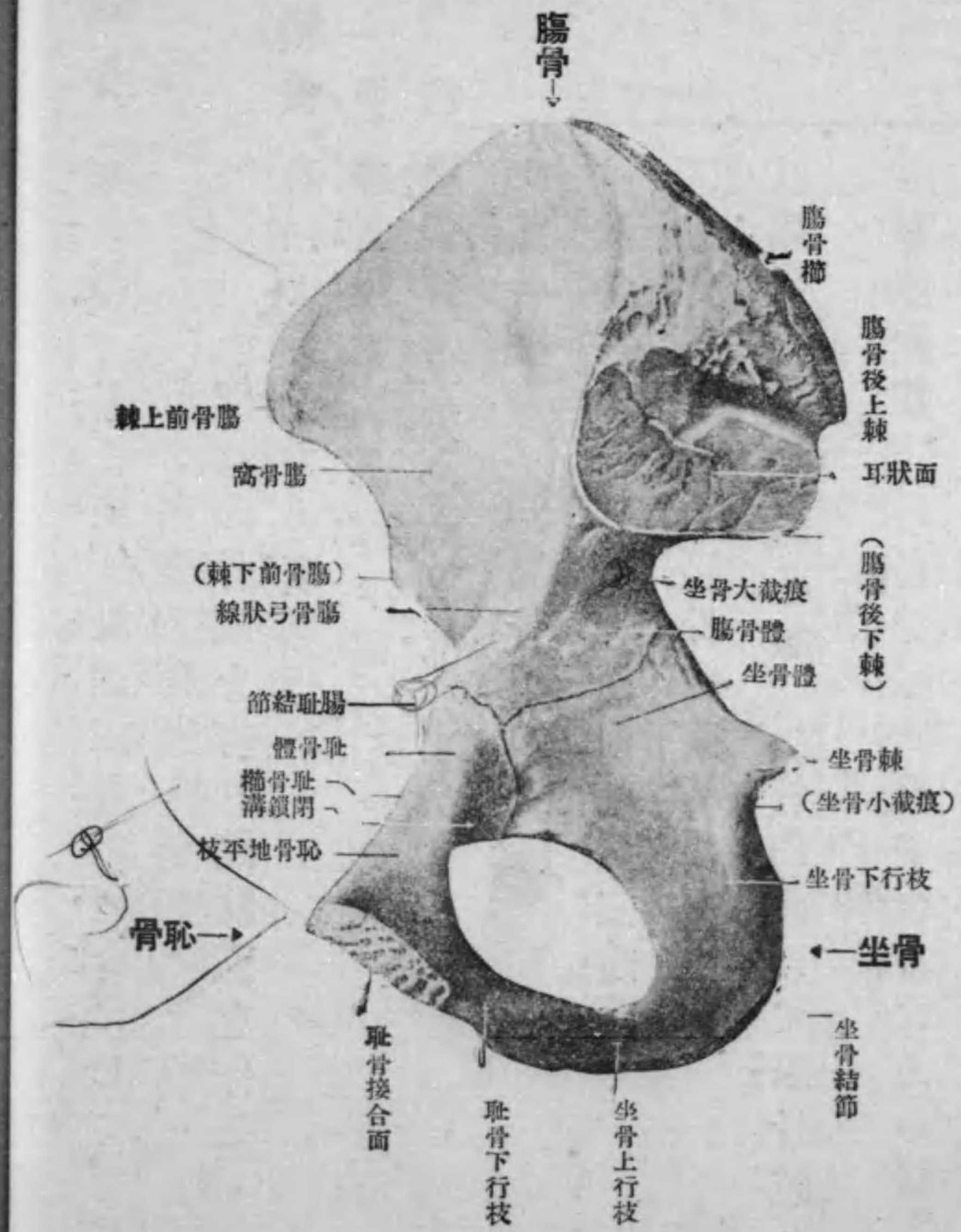
第 八 十 圖 右 髖 骨 (外 面)

第 貳 編 軀 幹 骨 ... 骨 盤



第 七 十 圖 右 髖 骨 (內 面)

第 貳 編 解 剖 學 及 生 理 學





(2) 坐骨 髌臼より下方の厚き骨

(甲) 坐骨體(髌臼に接する太き部分)

(イ) 下行枝(後方の枝)

(1) 坐骨 棘(下行枝後縁の棘状の突起)

(2) 坐骨大截痕(坐骨棘より上後方の彎入)

(2) 坐骨結節(下行枝下端骨の厚き部分)

(ロ) 上行枝(坐骨結節の部より前上方に昇り、耻骨下行枝と連る)

(乙) 坐骨枝

(3) 耻骨 髌臼より前方の骨、三骨中最小。

(甲) 耻骨體(髌臼に接する太き部分)

(イ) 地平枝(前方地平の枝)

(1) 耻骨 櫛(地平枝の鋭き上縁)

(2) 腸耻結節(耻骨櫛の後方、腸骨弓状線と相接する部の小隆起)

(3) 耻骨接合(耻骨軟骨接合(左右地平枝の前方)にて接合する。關節間に軟骨を挟み、關節間に軟骨を挟み、坐骨)

(ロ) 下行枝(耻骨接合の部より下方に向外方に向ひ、坐骨上行枝に連る)

(1) 耻骨 弓(左右下行枝間の角、男子は鋭角)

(2) 耻骨 頂(女子は直角又は鈍角)

(3) 閉鎖孔(耻骨と坐骨との間の角の丸さ)

三角の孔、生體にては閉鎖す、上縁に淺き閉鎖溝あり)



### 二、骨盤の關節及靱帶

(面後) 帶靱の盤骨 圖九十第



- (一) 薦尾關節……………可動
- (二) 薦腸關節……………不動
- (三) 耻骨接合(耻骨軟骨接合)……………不動
- (一) 薦坐結節靱帶……………軟骨及靱帶により固く結合す
- (二) 薦坐棘靱帶……………薦骨と坐骨結節との間に張る
- (三) 薦骨と坐骨棘との間に張る

### 三、大骨盤と小骨盤

#### (甲) 大骨盤

薦骨 弓 恥骨 恥骨接合上縁

岬 線 榘

が集まりてなせる上を大骨盤と云ふ

一の輪即終線より下を小骨盤と云ふ

#### (一) 大骨盤の壁

後壁……………第四、第五腰椎

側壁……………腸骨翼

前壁……………前腹壁

皮膚 脂肪 筋 膜 及 筋 肉



### (二) 大骨盤の測定

目的

小骨盤の廣狹は、分娩の難易に大なる關係を有するが故に、其廣狹を測定することは極めて必要なるも、生體にてこれを測定し難きを以て、大骨盤を測定して小骨盤の大小を推知するものなり。

徑線

1 外結合線(外直徑線) 19

第五腰椎棘狀突起尖端より耻骨接合上縁まで

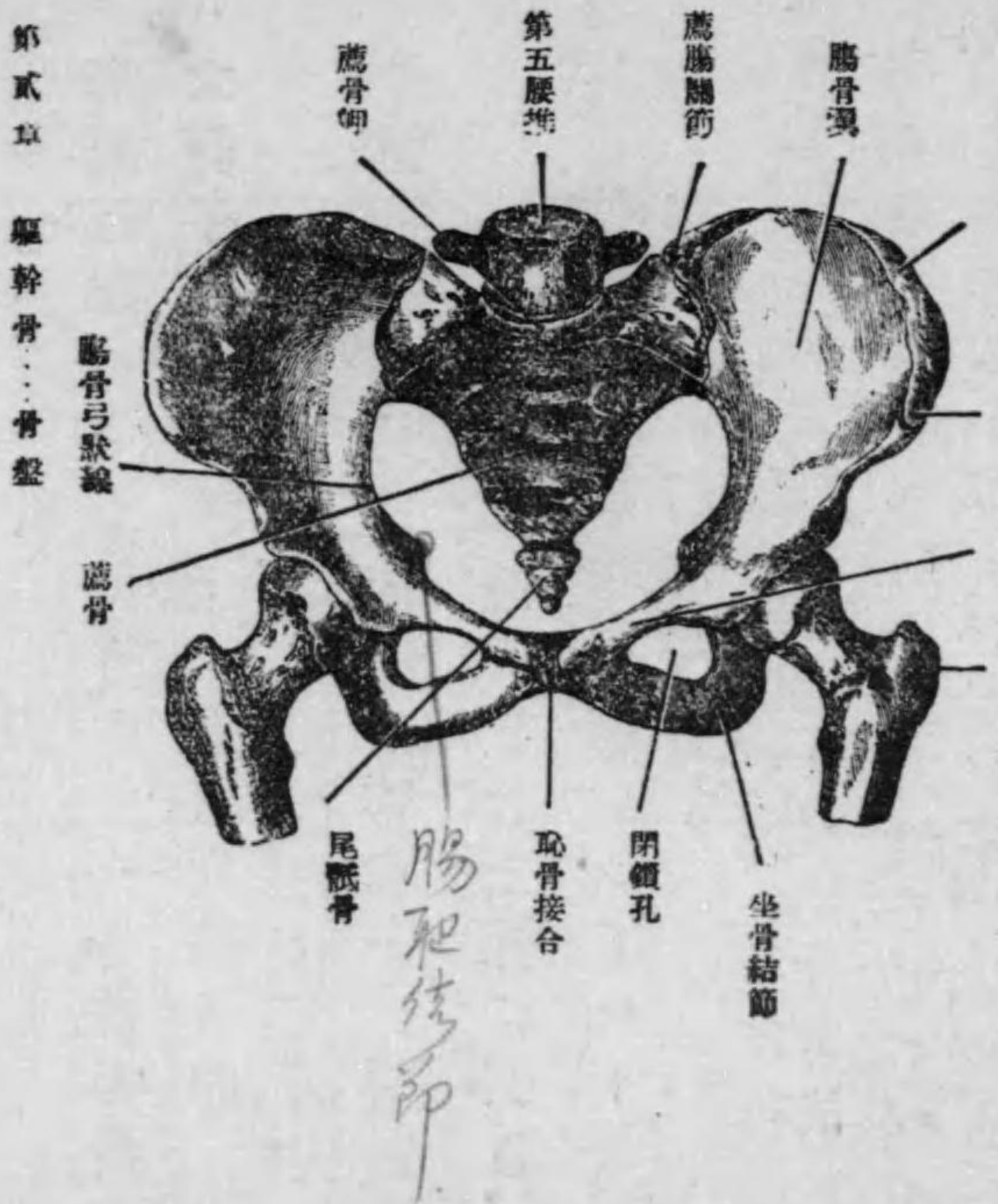
2 斜徑線 20

第一(右)斜徑線……右の後上棘より左の前上棘まで

3 棘間距離 23  
第二(左)斜徑線……左の後上棘より右の前上棘まで  
左右前上棘の間

腸骨 腸骨前上棘 耻骨地平枝 大腸骨大轉子

第廿圖 骨盤(上前面より見る)



第貳章 軀幹骨…骨盤



4 櫛間距離 26 …… 左右腸骨櫛の最大距離

5 大轉子間距離 29 …… 左右大轉子間

6 骨盤周圍 75-80 …… 第五腰椎棘狀突起尖端より始まり、  
兩側は大轉子と腸骨櫛との間を經、  
耻骨接合上縁に至る、

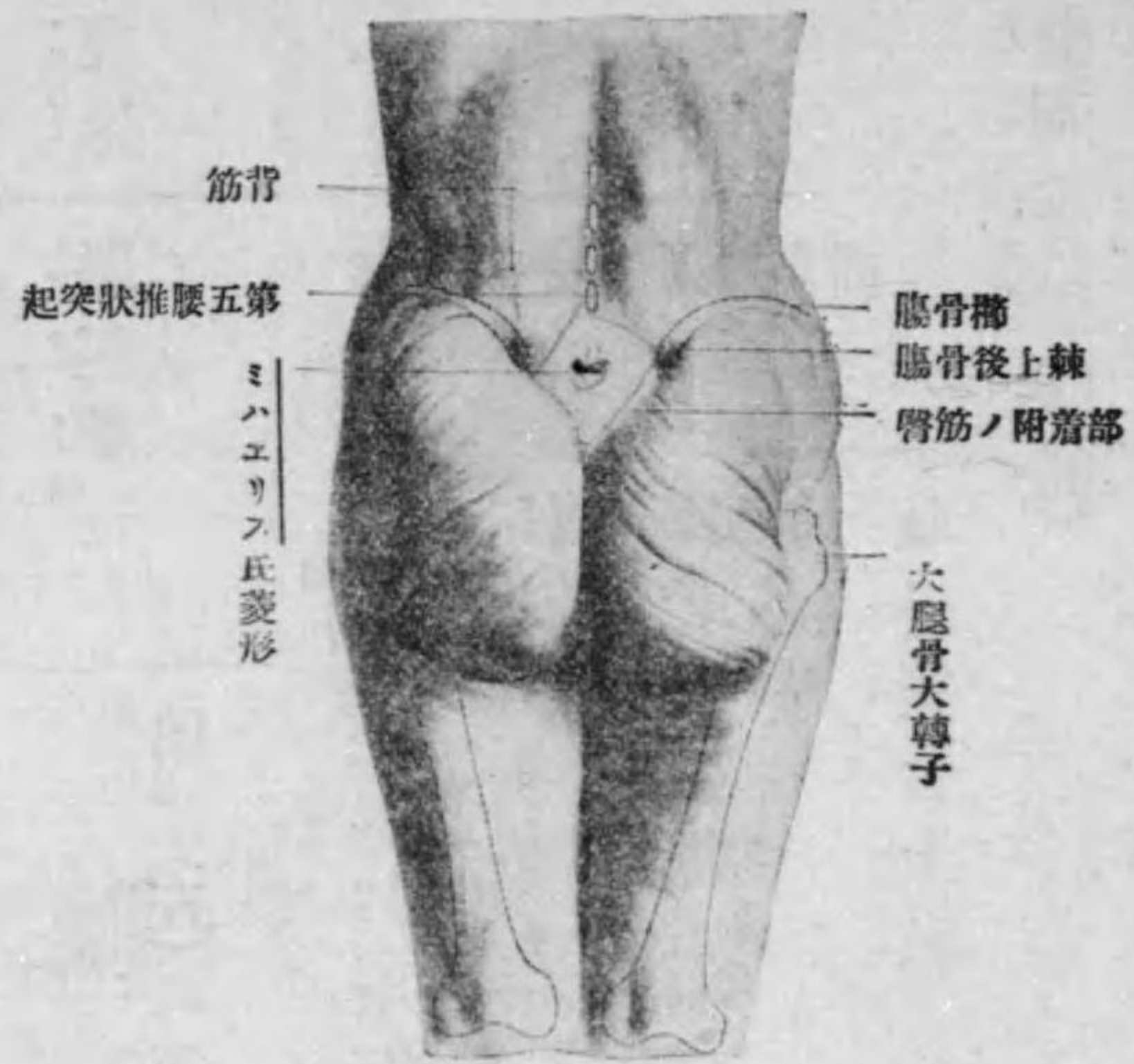
測定器具。骨盤周圍は「卷尺」(即バンドマース)を用ひ、其他は

骨盤計を用ひて測る。

●第五腰椎の棘狀突起の先端を見出す方法

先づ婦人の左右臀部間の上方に於てミハエリス氏菱形を見出し、其の左右の角の附近に於て腸骨後上棘を發見し、これを結びつけたる線の中央の附近に於て、薦骨の第一假棘狀突起を見出し、其の直上に於てこれよりも尙著しき突起

形菱氏スリエハミ 圖一十二第



り小骨盤全部の形と廣さとを推定す。

第貳章 軀幹骨 骨盤

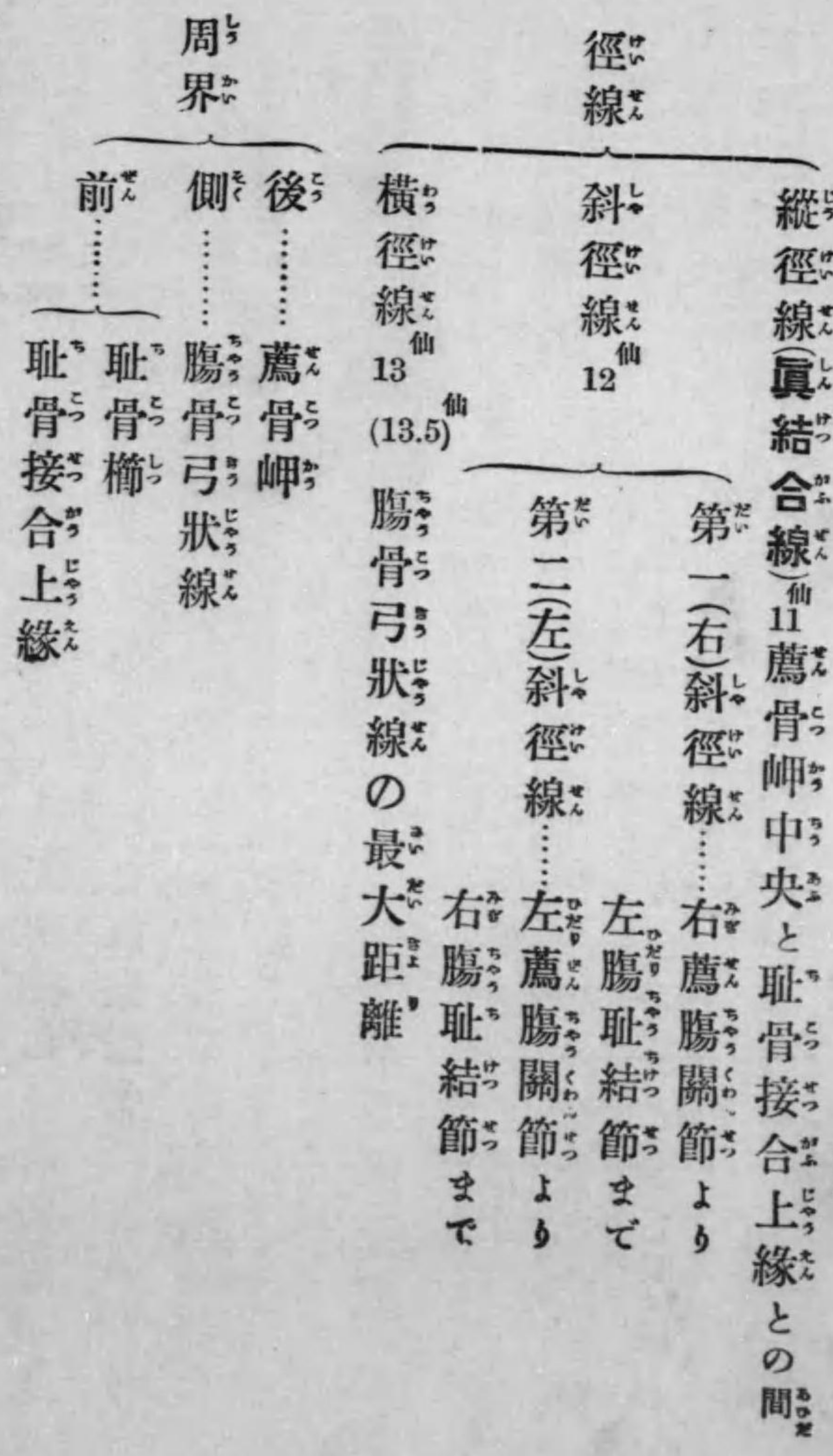
を見出したらばこれ即ち求むるところの第五腰椎の棘狀突起なり、これは通常、ミハエリス氏菱形の上角の部にあり。

(乙) 小骨盤(骨盤)

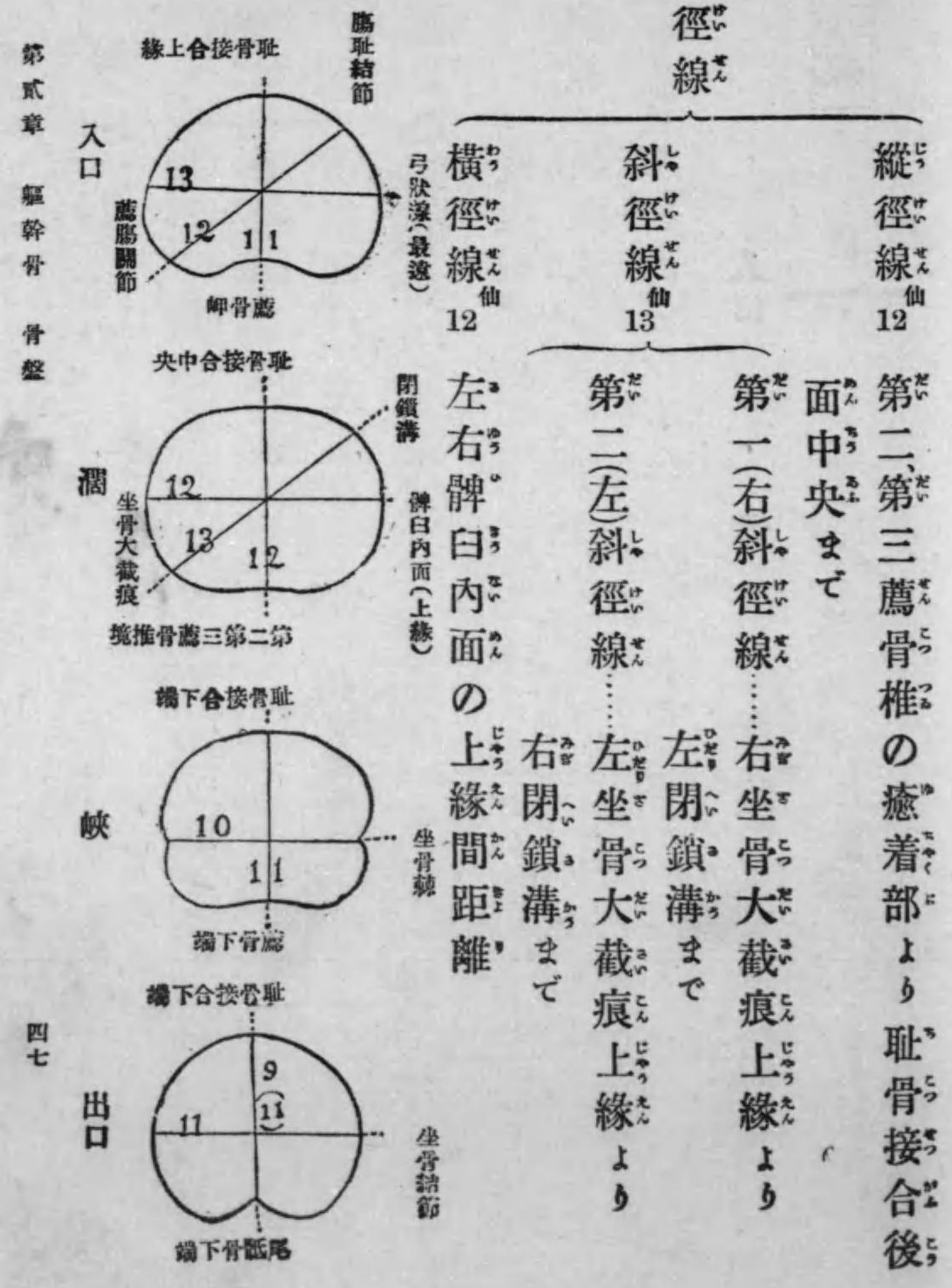
(一) 骨盤入口(骨盤上口) 葵の葉の形をなす、此入口の形と廣さによ



(二) 骨盤潤(骨盤廣部)



圖二十二第  
面各の腔盤骨小



第貳章 軀幹骨 骨盤



(三) 骨盤峽(骨盤狹部)

徑線

縱徑線<sup>仙</sup>11 薦骨下端より耻骨弓頂まで  
斜徑線(軟部故測り難し)  
横徑線<sup>仙</sup>10 (10.5) 左右坐骨棘の間の距離

(四) 骨盤出口(骨盤下口)

徑線

縱徑線<sup>仙</sup>9 (分娩時<sup>仙</sup>11) 尾骶骨下端より耻骨弓頂まで  
斜徑線(軟部故測り難し)  
横徑線<sup>仙</sup>11 左右坐骨結節間の距離

最長徑線



(五) 骨盤壁

前壁(高さ<sup>仙</sup>3.5) (耻骨接合の上縁と下縁との間の高さ)  
耻骨及軟骨より成る  
側壁(高さ<sup>仙</sup>9.5) (弓狀線と坐骨結節の間の高さ)  
腸骨體  
坐骨  
薦坐結節靱帶  
薦坐棘靱帶  
後壁(高さ<sup>仙</sup>12.5) (薦骨岬と尾閶骨尖端の間の高さ)  
薦骨及尾閶骨より成る

より成る

(六) 骨盤傾斜の角度

直立位に於て眞結合線と水平線との間になす角度を云ふ  
……六十度

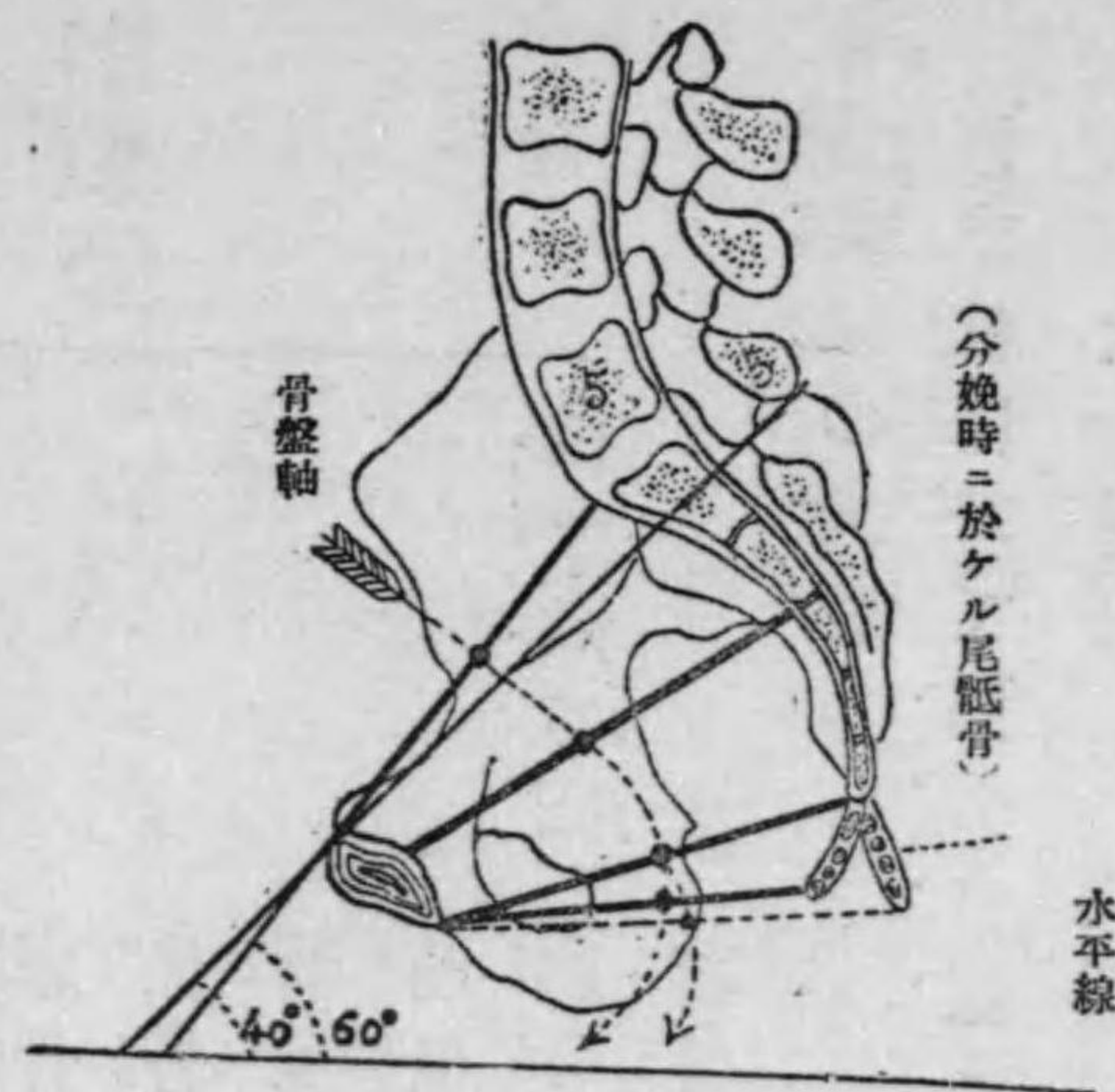


表 八 第

	(全輪)	(左右)	(後)	(前)	(上下)	
女	骨盤全輪は低くして幅廣し。	左右腓臼は著しく相距る。	薦骨廣く短く、尾骶骨と共に後方へ引退す。	耻骨弓は直角又は鈍角なり。	入口廣く、骨盤腔の下方も割合に廣潤なり。	女子
男	然らず。	然らず。	然らず。	銳角(七十一—七十五度)。	入口女子よりも狭く、下方は漏斗状に狭し。	男子

第貳節 軀幹骨…骨盤

斜傾及軸盤骨 圖三十二第



第貳節 解剖學及生理學

水平線

(八) 男女骨盤の差異

挿入するにも此線に沿ふべし。

(七) 骨盤軸(骨盤誘導線)

生體にては外結合線と水平線との間になす角度を測る……四十度

入口、潤、峽、出口、の縦徑線の中央を通過せる曲線にして、分娩時に胎兒の通過する方向を示すものなり、骨盤腔内に手指又は器械を



盤骨子女 圖四廿第 (面上)



盤骨子男 圖五廿第 (面上)



盤骨子女 圖六廿第 (面前)



盤骨子男 圖七廿第 (面前)



(九) 骨盤内の臓器

泌尿器…尿道、膀胱、輸尿管  
生殖器…陰、子宮、輸卵管、卵巢  
消化器…直腸

第三節 四肢の骨

(甲) 上肢骨 32 × 2 = 64

(一) 鎖骨 1 …… 横に S 字形に曲る  
(二) 肩胛骨 1 …… 三角形の骨、胸廓背面上部にあり  
(三) 上膊骨 1 …… 長大なる管状骨なり

(四) 前膊骨 2 ……  
撓骨 (拇指側) 1 上端丸く下端廣し  
尺骨 (小指側) 1 上端太く下端細し

(五) 手骨 27 ……  
腕骨 (手根骨) 8 不正形の短骨  
掌骨 5 小なる管状骨  
指骨 14 第三節 (拇指は第二節) を爪節と云ふ

圖八十二第

右肩胛骨 (後面) 肩峰突起



(乙) 下肢骨 30 × 2 = 60

(一) 大腿骨 1 …… 最大なる管状骨なり  
(二) 膝蓋骨 1 …… 其形栗の如し

第參節 四肢の骨



(三) 下腿骨 2 ……

脛骨(蹠趾側) 1 太し  
腓骨(小趾側) 1 細し

(四) 足骨 26 ……

跗骨 7 跟骨は跗骨中最大にして踵にあり  
蹠骨 5 手の掌骨に相當す  
趾骨 14 第三節蹠趾は第二節を瓜節と云ふ

### 第二章 軟骨

軟骨は半透明帶青白色にして、彈力あり、軟骨膜にて被はる。

軟骨の主な用途  
一 骨の間の摩擦を防ぐ 例へば髌臼と大腿骨頭の間  
二 兩骨を聯絡せしむ 例へば耻骨接合に於る兩耻骨の間  
三 體の一部を支ふ 例へば鼻梁、耳殼

附 關節(骨の結合)

#### 一、不動關節

骨縫合。 鋸齒狀の骨縁互に直接結合す。

例。頭蓋骨

軟骨接合。 軟骨を挟みて不動に接合す。

例。耻骨軟骨接合

#### 二、可動關節…關節。 二骨又は數骨互に相聯りて運動す。

例。下顎關節

四肢の諸關節

### 第三章 齒牙

(一) 名稱 第二十九圖の如し。

第貳章 軟骨 第參章 齒牙





(二) 縱斷面 第三十圖の如し。



(三) 乳齒發生の順序

小小白齒	小白齒	小犬切切	大白齒
1	3	4	3
5	5	3	5

(四) 乳齒の數にて乳兒の月數を知る法

齒數 + 6 = 月數  
例へば乳齒二本生ぜる兒は 2 + 6 = 8 即八ヶ月位の乳兒と知るべし

(乙) 軟組織

第壹章 皮膚

(一) 皮膚の構造。皮膚は表皮と真皮との二層よりなり、「皮下結締織」により下層と附着す。

イ、表皮は極めて薄き層にして、血管又は神経を有せず。

汗排泄管及毛髮之を貫通す。

ロ、真皮 上皮との境に乳頭(乳嘴)あり、真皮中には左の

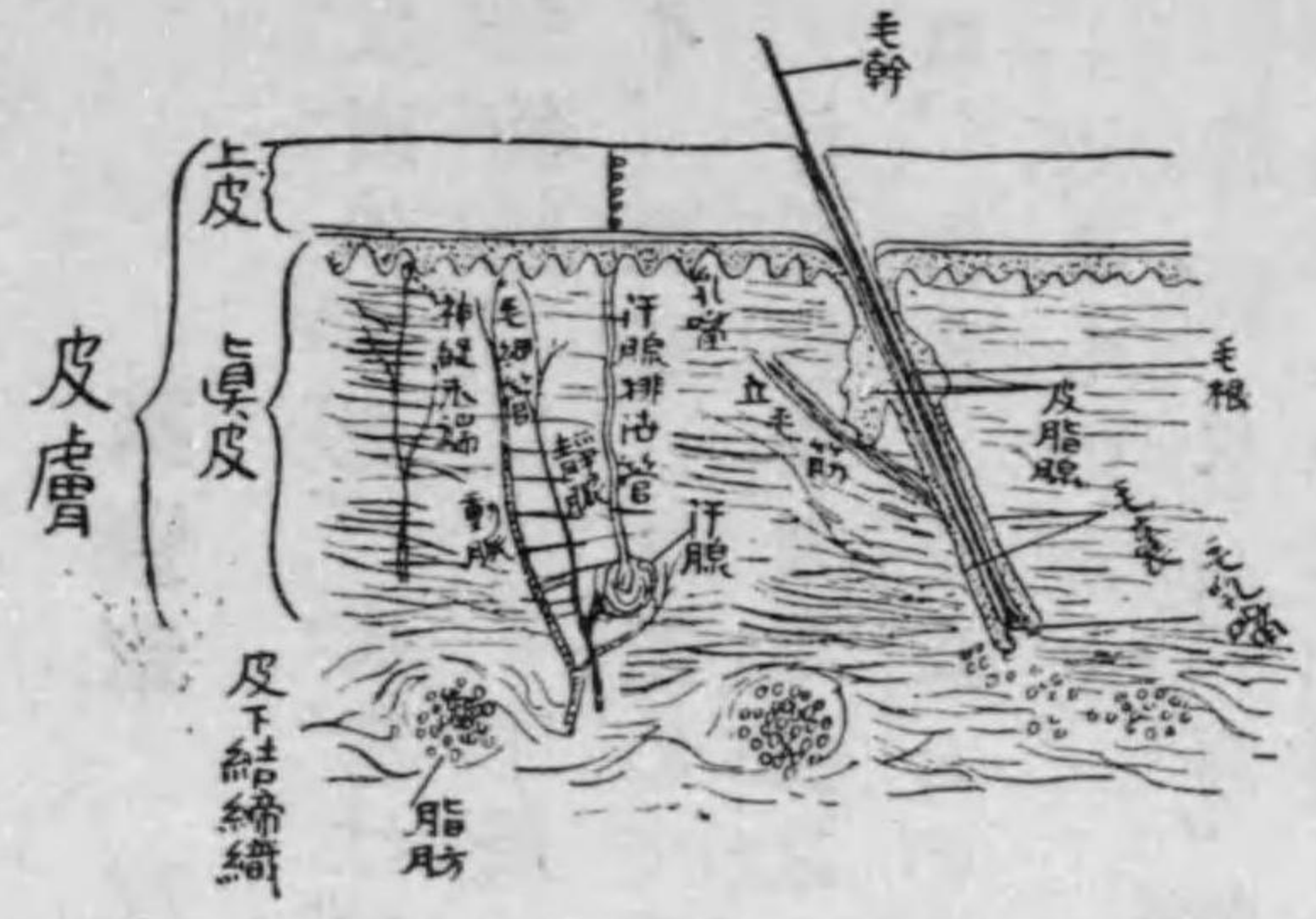
如きものあり。

神経及觸器。動靜脈管及毛細管。皮脂腺、毛囊及毛乳嘴

汗腺及其排泄管。毛根及立毛筋。



第三十一圖 皮膚縱斷面



第貳章 粘 膜

(二) 皮膚の主作用

- 一、身體外面を保護し、
二、觸覺を司り、
三、體温を調節し
身體老廢物を
四、排泄し、
五、呼吸作用を營む。

粘膜は身體外方に開ける孔口又は腔の表面を被ふ膜にして、通常鮮紅色にして、表面に粘液を出し其面粘滑なり。

第參章 漿 膜(漿液膜)

體外に通ぜざる腔の内面を被へる膜にして、表面に漿液を出し其面を滑にし、其腔内にある臓器の運動によりて起る摩擦を減せしむ。

例。胸腔の中を被ふを肋膜(胸膜)、腹腔内を被ふを腹膜と稱す。

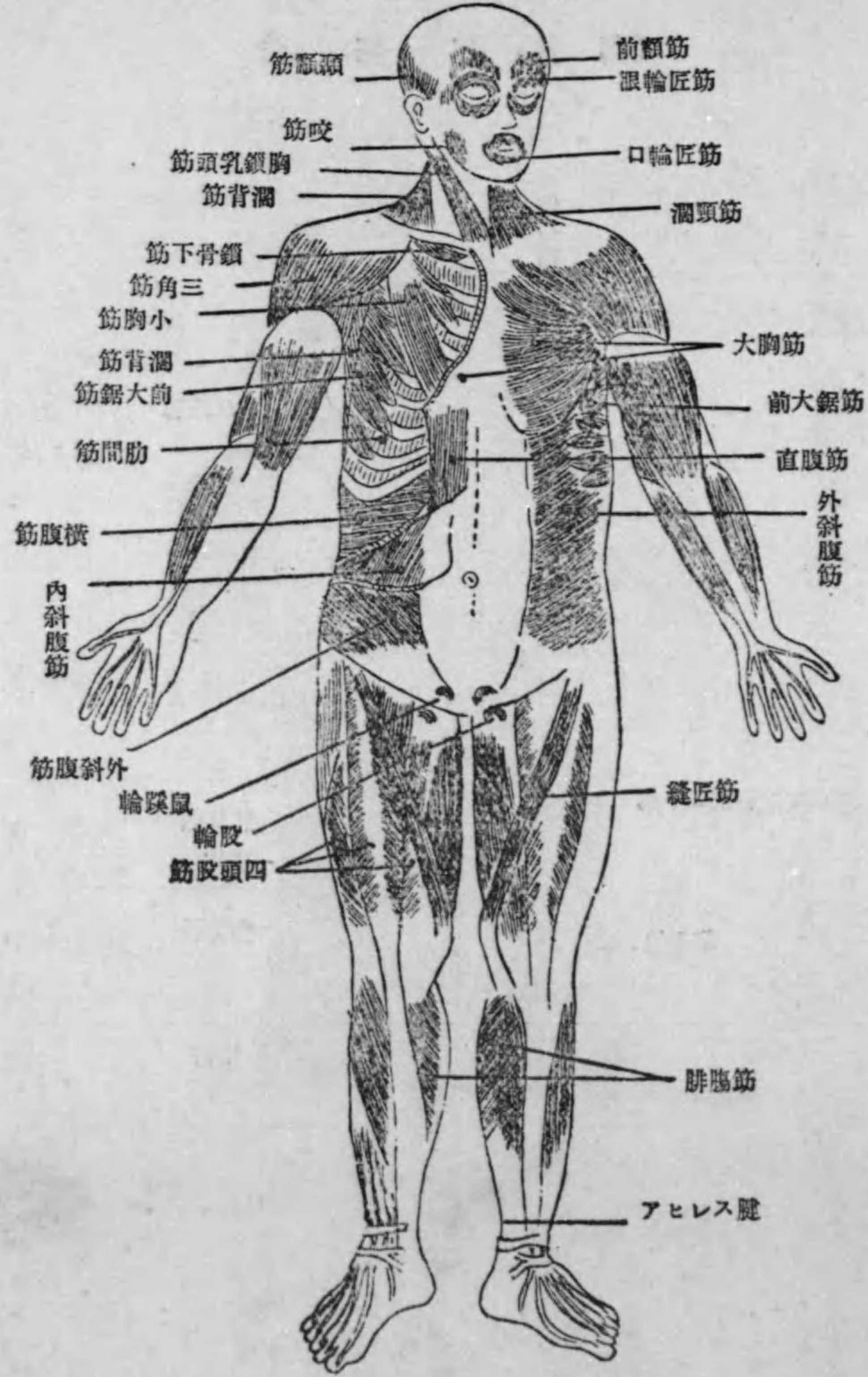
第四章 結 締 織

諸組織又は臓器を連絡し、若しくは腔所を充填するものなり。

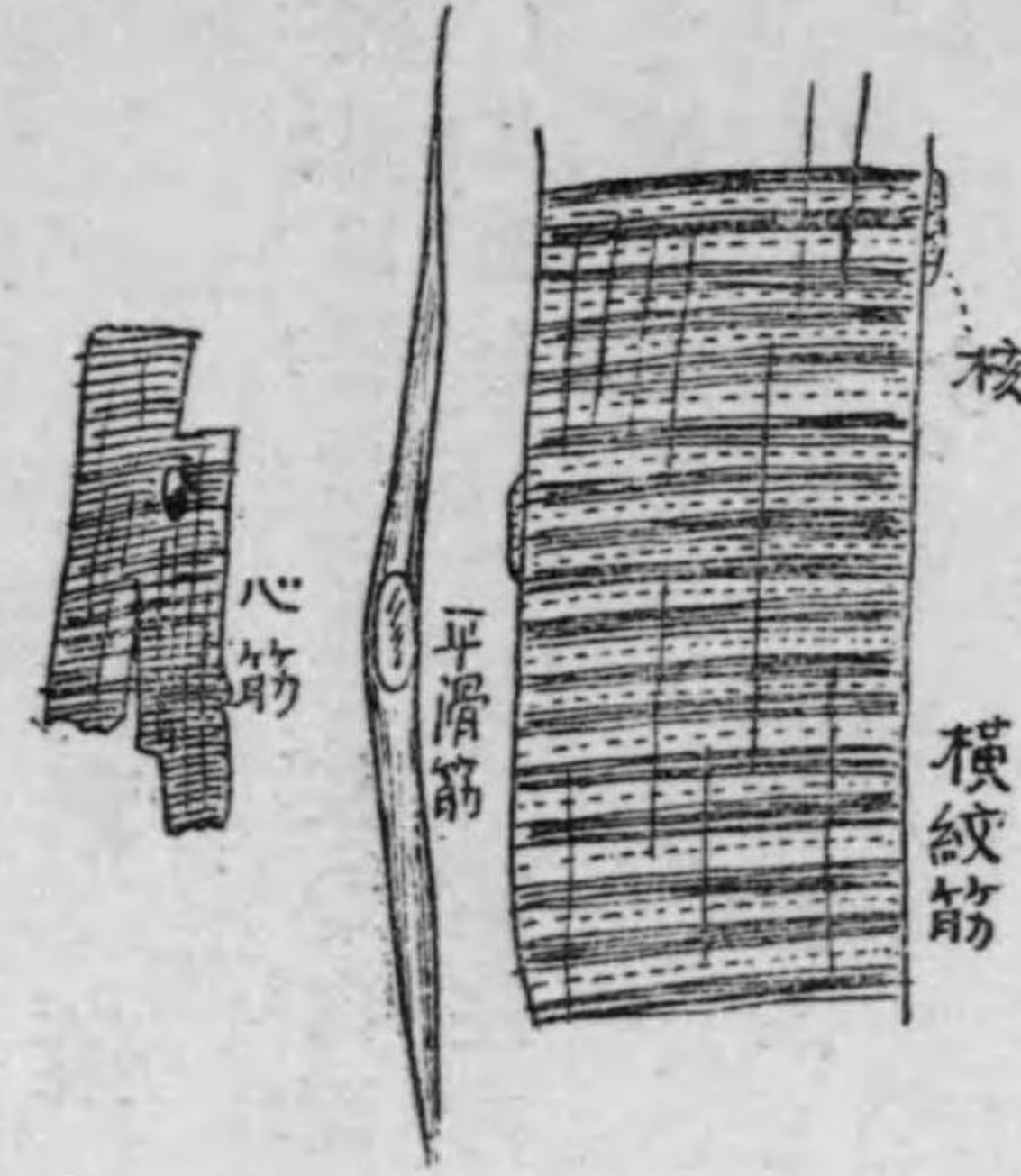


（面前）筋骨ルナ主 圖三十三第

第五章 脂肪組織 第六章 筋肉



第六章 筋肉



第三十二圖 筋肉の種類 (顯微鏡にて廣大)

結締織には

粗にして軟きあり(例へば皮下結締織)  
密にして硬きあり(例へば靱帶・腱)

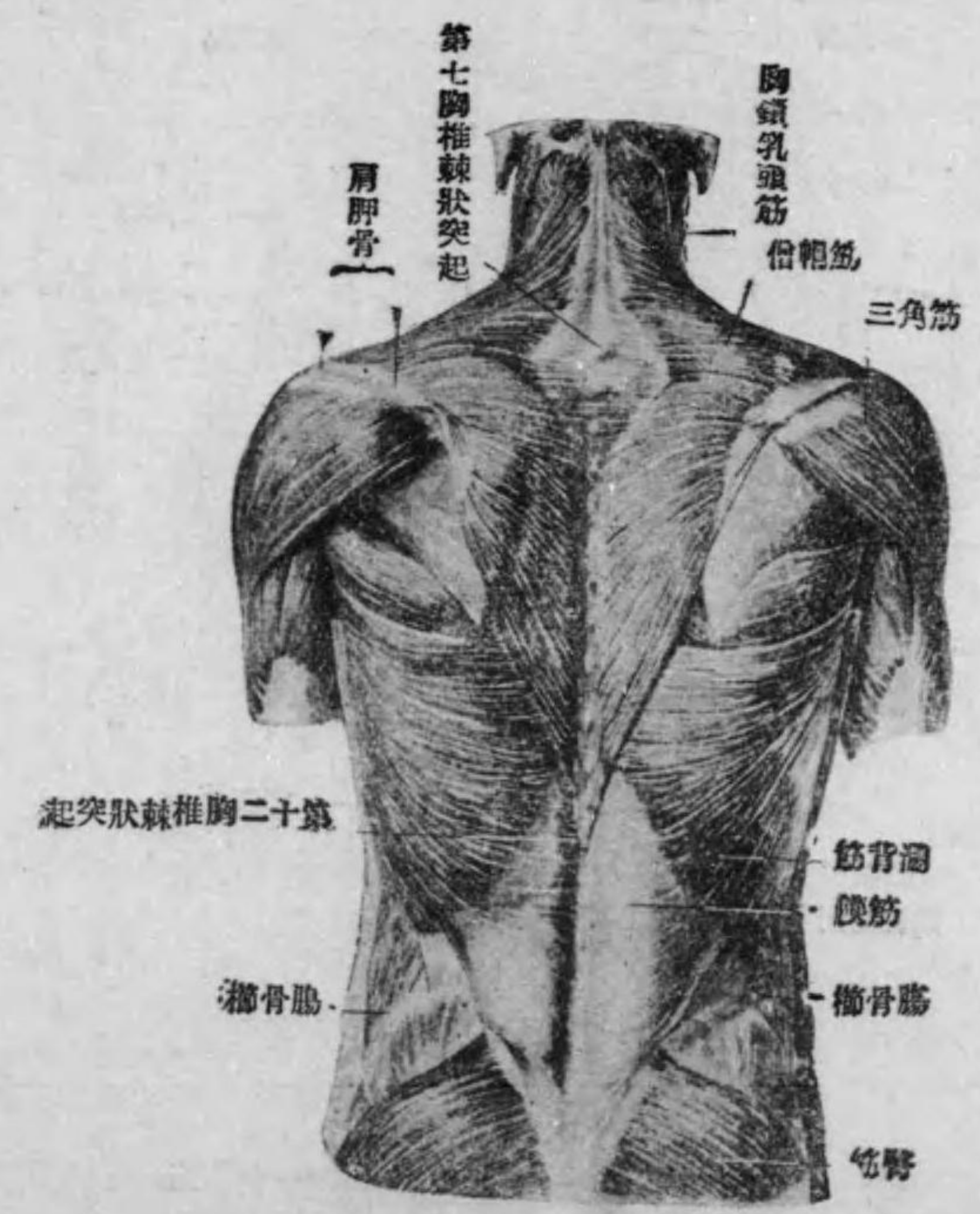
第貳編 解剖學及生理學

第五章 脂肪組織

粗なる結締織の間に無数の脂肪細胞が集まりたるものにして、皮下其他諸臓器の周圍等にあり



圖五十三第 (面背) 筋 骨



(一)

筋肉の種類

横紋筋(骨骼筋)  
滑平筋(平滑筋)

通常骨と骨との間に附着し其收缩により骨の運動を起す  
子宮・腔・胃・腸・血管等の壁を構成し其運動を營む  
心臓の壁を構成し其運動を營む

随意筋  
不随意筋

(二)

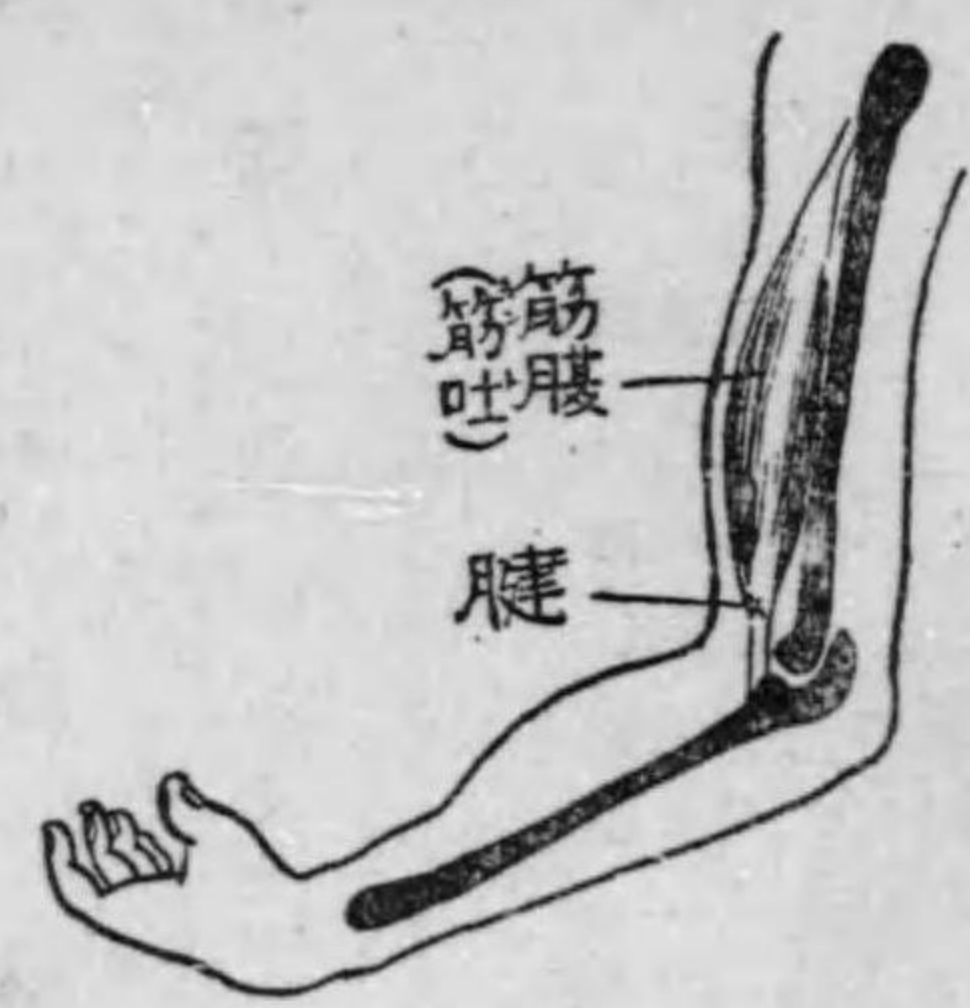
骨骼筋の各部

第三十五圖の如し。

(三)

主なる骨骼筋の名稱 第三十三及三十四圖の如し。

筋 骨 圖五十三第



第六章筋肉 第七章循環器

第七章 循環器

第一節 血管系

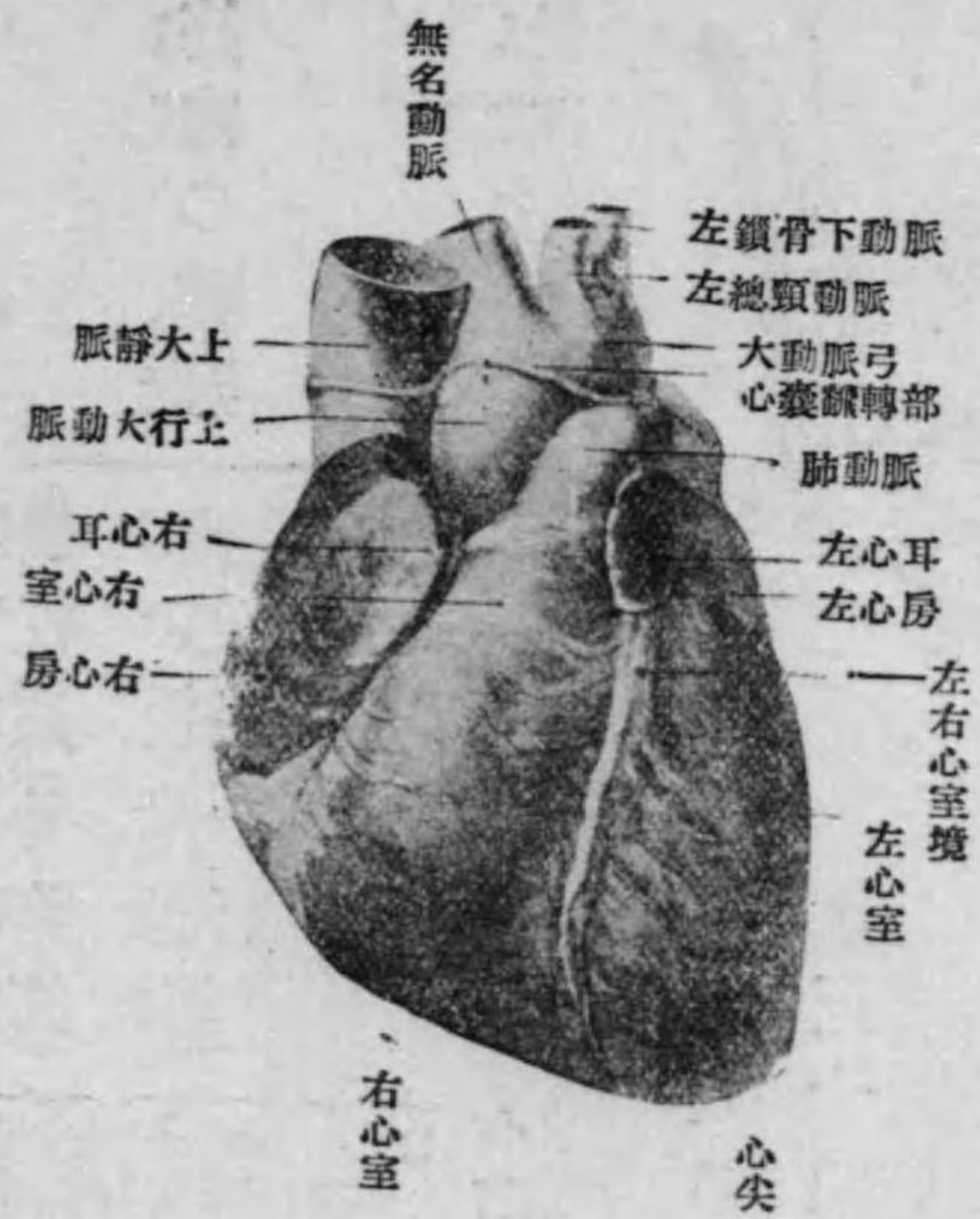


# 一、心臟

(内臓の中へ入れても可なり)

(一)位置 胸腔の下部に於て、中央より左方に偏し、左右の肺の間に位す。

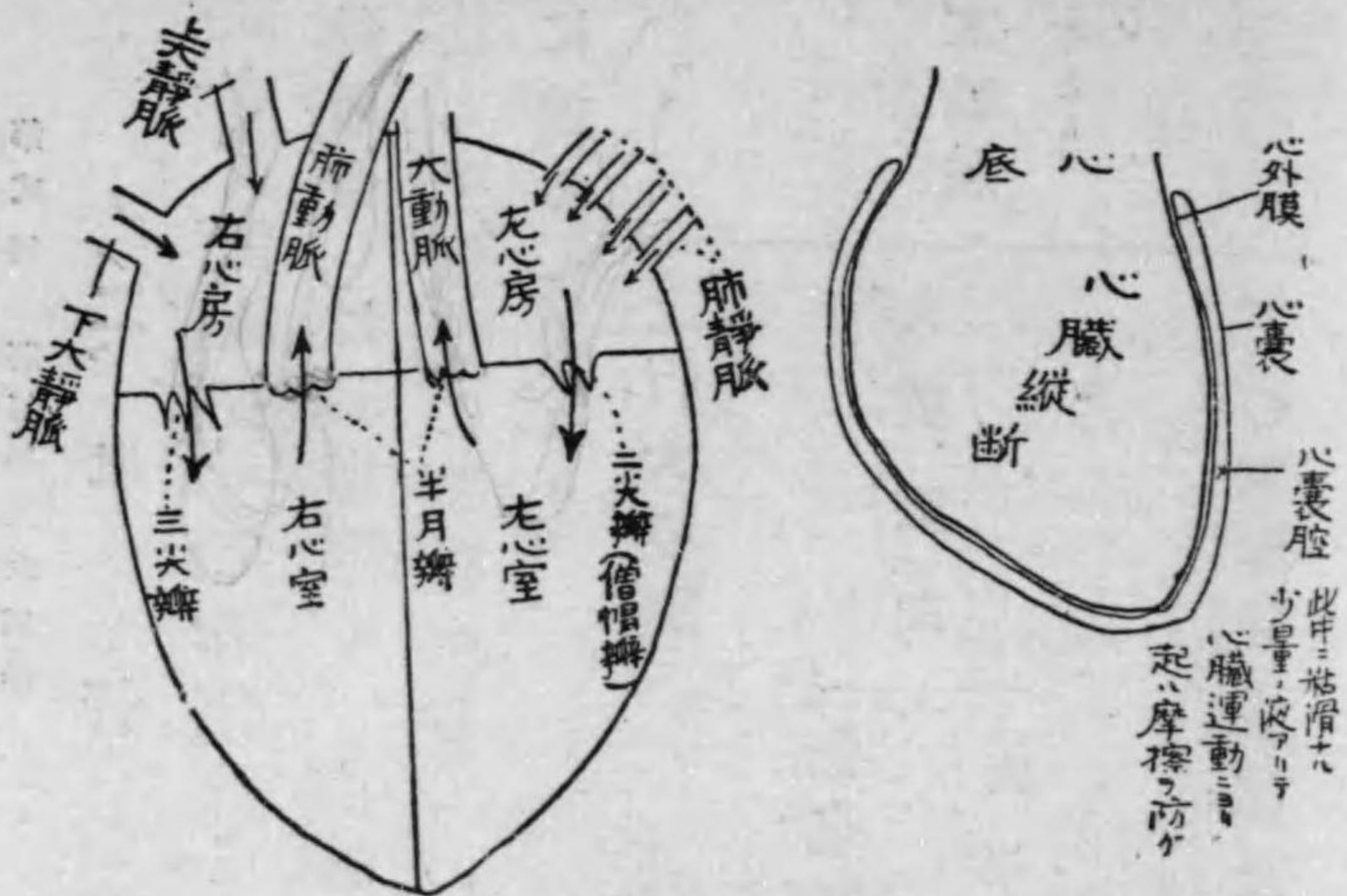
(面前) 心臟 圖六十三第



## (二)形状

圓錐體をなし、其基底は右上方に向ひ第三肋軟骨の高さに於て胸骨の後に在り、此部に大血管出入す。圓錐の尖端を心

腔内臓心圖八十三第 囊心圖七十三第



## (三)大小

尖と云ひ左下方に向ひ、左乳頭より少し内方に於て第五肋骨と第六肋骨との間に位す。其人の手拳大。

## (四)心囊

心臟を包む囊にして漿膜の一種なり。故に其内面粘滑なり。心囊のつゞきの漿膜にして、心臟を直接に被ふ部を云ふ。

## (五)心外膜

第卅八圖の如し。



二、血管

動脈管、靜脈管、毛細管の三あり。  
 一動脈管は其壁厚く。心臟より起り漸次分岐し全身諸部に達し毛細管に移行するものにして。動脈血を心臟より全身に送るものなり。

△大動脈  
 (左室より出づ)

上行大動脈

大動脈弓

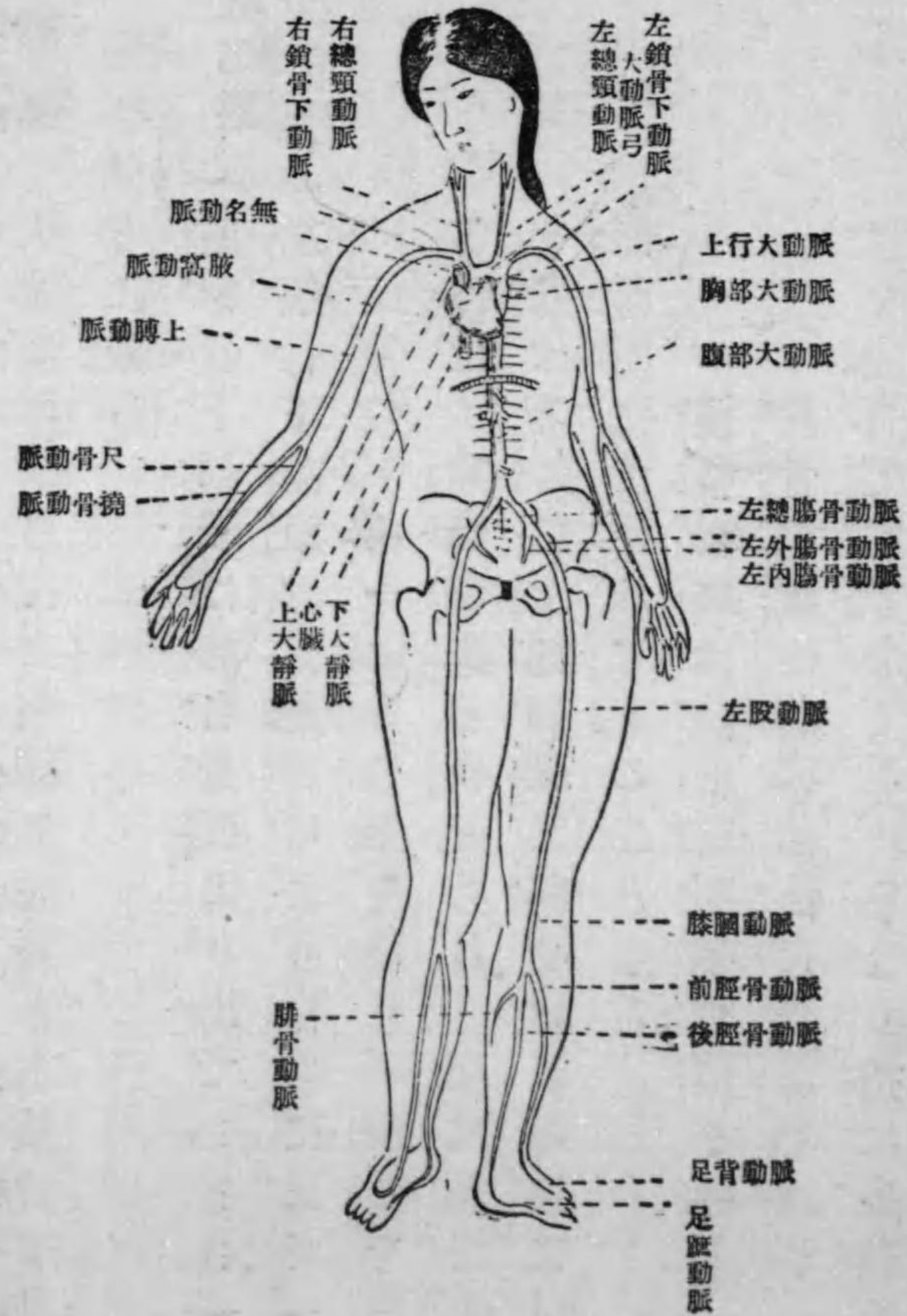
無名動脈

(直接に)

下行大動脈(胸部及腹部大動脈)

- 右總頸動脈を出す。
- 右鎖骨下動脈を出す。
- 左總頸動脈を出す。
- 左鎖骨下動脈を出す。
- 右總腸骨動脈。
- 左總腸骨動脈。

脈動るな要主 圖九十三第





△無名動脈

大動脈弓より出で、右總頸動脈と右鎖骨下動脈

六八

とに分る。

△鎖骨下動脈

右鎖骨下動脈は無名動脈より出で………  
左鎖骨下動脈は大動脈弓より直ちに出で  
鎖骨の下第一肋骨の上を通じ、腋窩を通ず  
る部にて腋窩動脈と稱せられ、更に進で上膊  
を通ずる時に上膊動脈と稱せられ、遂に肘關  
節前面にて分れて次の二となる。

- (一) 撓骨動脈は前膊前面撓骨側を通じ
  - (二) 尺骨動脈は前膊前面尺骨側を通じ
- にて相合し弓状をなし、之より指に多數の小枝を出す。

△總頸動脈

右總頸動脈は無名動脈より出で  
左總頸動脈は大動脈弓より直に出で  
何れも頸

の兩側を通じ分れて  
内頸動脈  
外頸動脈  
となり共に頭

部を養ふ。

△總腸骨動脈

下行大動脈の末端は、第四腰椎下縁にて分れ  
て左右の總腸骨動脈となる。左右共に薦腸關  
節の前にて更に分れて  
内腸骨動脈(下腹動脈)  
外腸骨動脈

となる。

(一) 内腸骨動脈 骨盤内に多くの枝を出す、就中子宮動脈

(下腹動脈) は必要なるものなり。



(二) 外腸骨動脈

耻骨の上を過ぎて股動脈となり、大腿の内側を下りて大腿下部に至るに従ひ漸次に後方へ廻り、膝關に至り膝關動脈となり直ちに前脛骨動脈、後脛骨動脈に分る。

(一) 前脛骨動脈

は脛骨前面を下り足脊に至り足脊動脈となり。

(二) 後脛骨動脈

は脛骨後面を下り足蹠に至り足蹠動脈となる。

後脛骨動脈の上部より腓骨動脈を出し腓骨後面を下る。

二 靜脈管

動脈管に比すれば其壁薄く、其内面に數多の靜脈

瓣を有し血液の逆流を防ぐ。全身諸部の毛細管より起り、漸次集まりて太くなるものにして。靜脈血を心臟に向て還流せしむるものなり。

主なる靜脈管は又同じ名の動脈管と並行し、通常は一本の動脈に對し二本の靜脈を伴ふも、皮下靜脈管は動脈に關係なく獨行し皮膚の表面より青筋として認め得。

三 毛細管

は動脈管と靜脈管との間に介在せる極めて細き管にして。全身殆ど至る處に存在し、顯微鏡にて初めて之れを認め得。此毛細管の膜壁は極めて薄く動脈血中の營養素を滲出せしめ其部分の組織細胞を養ひ、組織中の老廢物の一部を收受して靜脈管に送る、其他毛細管壁を通じ酸素若くは炭酸を出入し得。



表九第

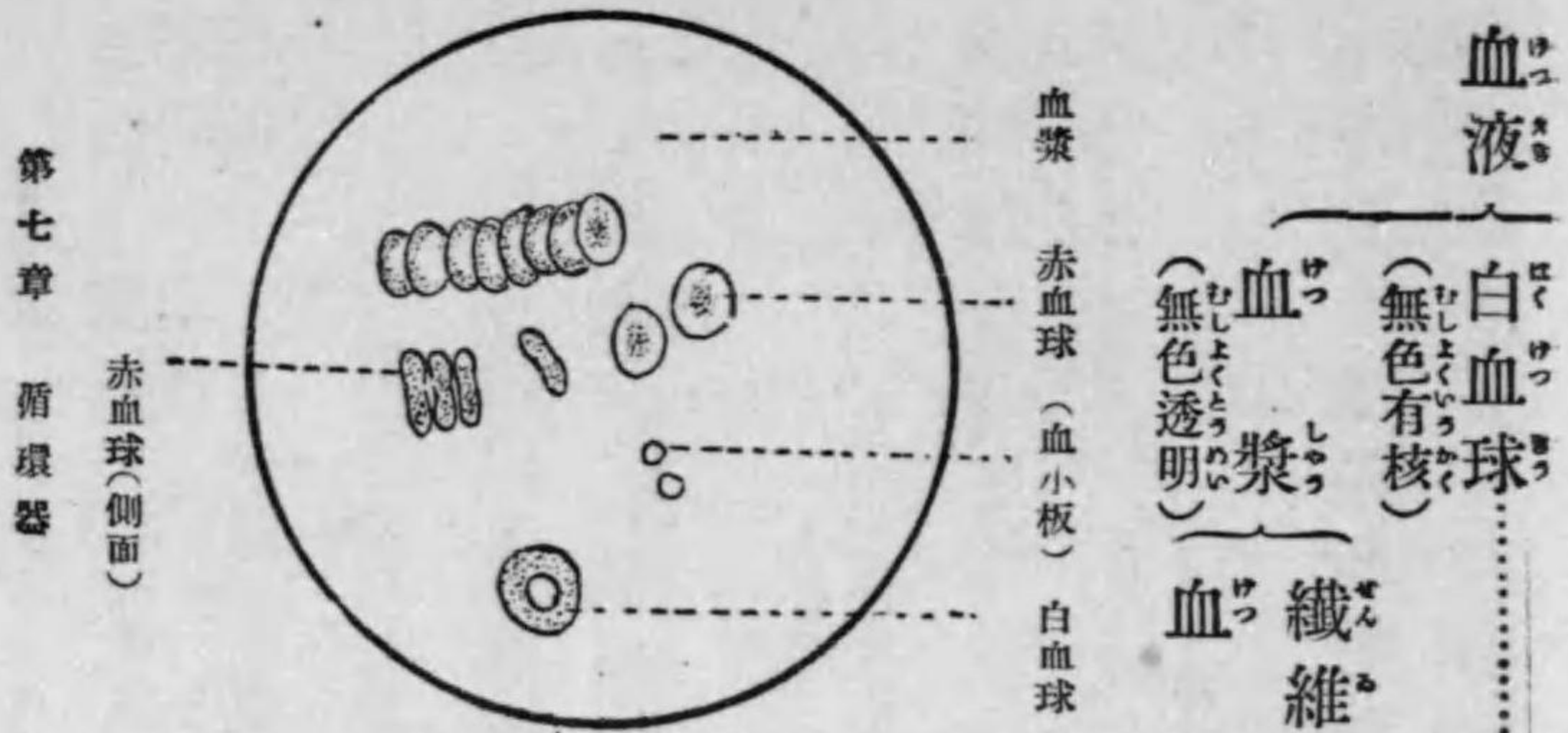
3	2	1	
通常動脈血を送る	心臓より起り 毛細管へ移行	壁厚	動脈管
通常静脈血を運ぶ	毛細管より起り 心臓へ還流	壁薄 静脈瓣あり	静脈管
營養素・老廢物の出受 酸素・炭酸の出受	全身殆ど到る處に存在	壁極めて薄	毛細管

三、血液

(一) 血液の成分

赤血球 (淡黄色なるも集まりて赤色に見ゆ)

(〇〇六) 液血 圖十四第



第七章 循環器

圖一十四第 餅血と清血



血液は血管内にありては、血漿中に多數の赤血球と少數の白血球とが浮遊するものなれども。血管外に出る時は、赤血球、白血球及び纖維素(血漿中より出づ)が共に凝結して血餅(凝血)となり別に透明の液を生ず之を血清と稱す。



(二) 血液の二種

動脈血 鮮紅色にして酸素に富み動脈管を流る  
静脈血 暗赤色にして炭酸に富み静脈管を流る  
(但し肺循環及臍帶循環は例外とす。)

四、血液循環

大循環(全身循環)

左心室より一本の大動脈として起り、



第一 第四十二圖 血液循環環

心室より一本の肺動脈として起り、肺にて毛細管となり四本の肺静脈として左心房に還る。

全身に分布して毛細管を経て静脈管となり遂に上下の二大静脈として、右心房に還る。  
二 小循環(肺循環) 右

五、心臓搏動及脈搏

(一) 心臓は身體諸部より血液を受け又身體諸部へ血液を送るために絶えず運動す、此運動を搏動と云ふ此搏動の際聞ゆる音を心音と稱す。

(二) 脈搏は心臓搏動毎に傳はる動脈管の波動なり。故に脈搏数は心臓搏動數に等しく、平均一分間に七十二なり(即ち六十乃至八十にして女子は男子より僅かに多し)  
(血液が身體を循環する時間は凡そ二十六回の搏動の時間に等し)

第二節 淋巴管系

一、淋巴管(水脈管)

淋巴管とは淋巴液を導く細き管にして血管の如く全身各處に分布し、組織間の淋巴液を集めて漸次に太くなり遂に静脈管



内に注ぐ。(胸腔の後部にある太き淋巴管を胸管と稱す、之れは左鎖骨下靜脈に注ぐ)

### 二、淋巴液

淋巴液は無色透明の水様液にして、全身の諸組織に分布せられたる血液の一部分が毛細管壁より組織の間に滲出して變化したるものが即ち淋巴液なり、此の淋巴液の一部は直ちに再び毛細管の血液の中に滲入すれども、他の部分は淋巴管内に入り此管内を流る。腸壁に於ける淋巴液は、食物より吸収したる多量の營養物を含むを以て、乳汁様の白色液となる、此淋巴液を一名乳糜液と稱し、此乳糜液を導く管を乳糜管と云ふ、乳糜管は遂に他の淋巴管の如く胸管に達す。

### 三、淋巴腺

淋巴腺は淋巴管の途中諸所に介在し、淋巴液中の夾雜物を抑留す。恰も下水道に於ける水溜の如し。

例鼠蹊腺、腋窩腺、頸腺、等

## 第八章 神経系

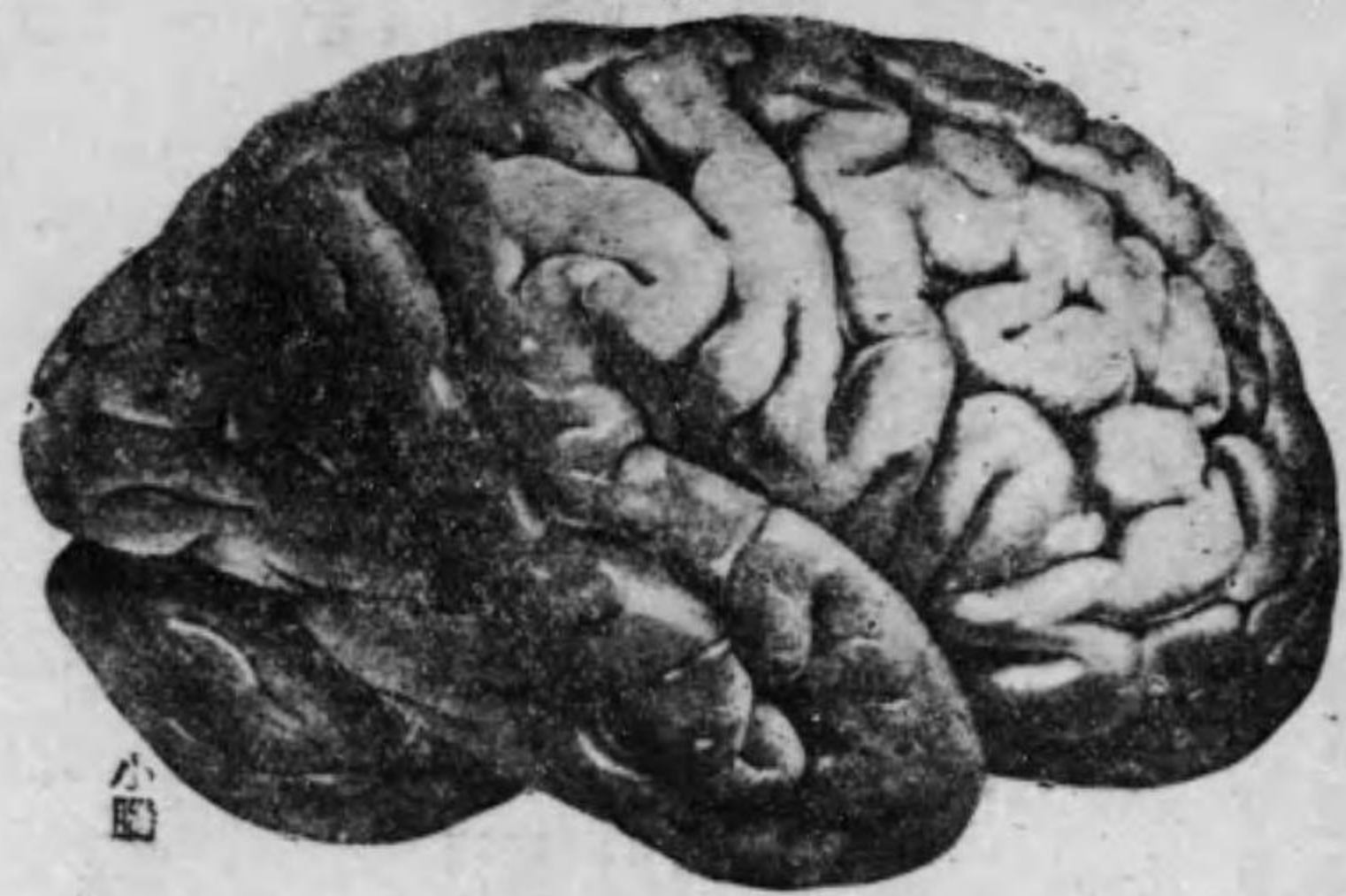
### 一、腦髓

腦髓は頭蓋腔にあり。大脳、小脳、及延髓の三に分つ。

### 二、脊髓

脊髓は延髓の續きにして脊柱管内にあり。

圖三十四第 (面側右) 腦 大





### 三、神經

神經は白色の纖維なり。

腦神經(十二對)は腦底より出で、頭蓋底の裂孔を通じ  
 脊髄神經(卅一對)は脊髄より出で、脊柱の椎間孔を通じ  
 普く全身(毛髮、表皮、爪を除く)に分布す。  
 知覺神經(求心性)は知覺(痛痒、寒熱、硬軟、粗密等)を感ず。  
 運動神經(遠心性)は筋肉の運動を起す。

圖四十四第 (兩背) 髓脊



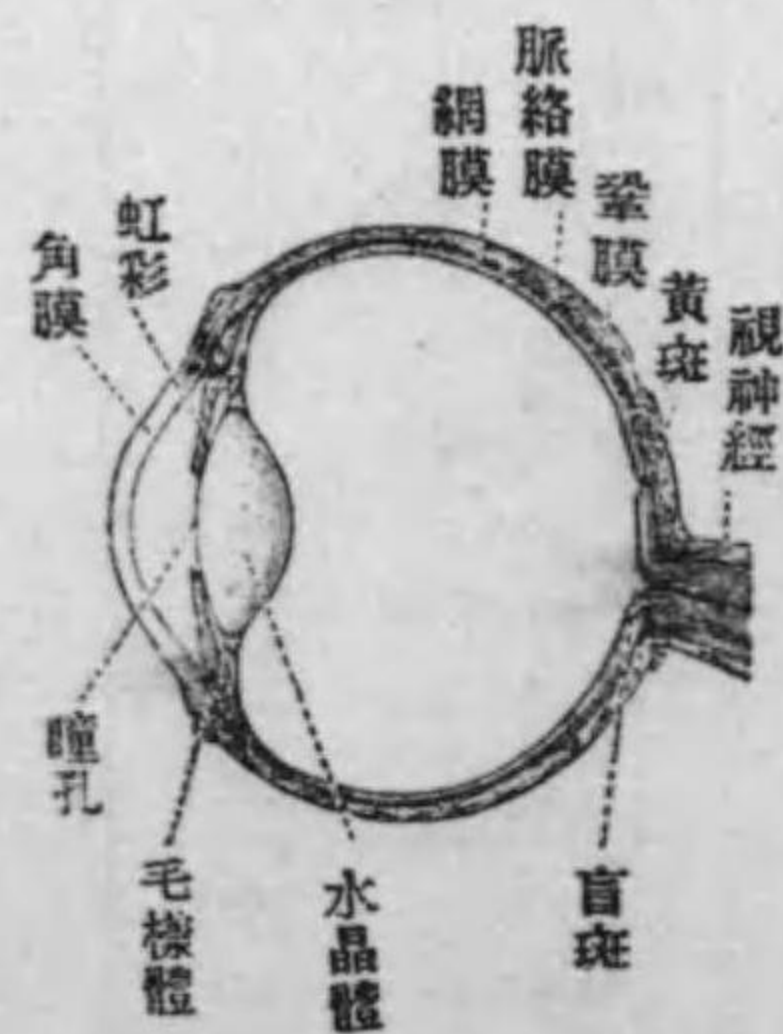
### 四、五官器

- (一) 視官は眼球中にあり視覺を司る。
- (二) 聽官は内耳中にあり聽覺を司る。
- (三) 嗅官は鼻粘膜にあり嗅覺を司る。
- (四) 味官は舌の乳頭中にあり味覺(甘、酸、辛、苦、鹹等)を司る。
- (五) 觸官は皮膚の乳頭にあり知覺(痛痒、寒熱、硬軟、粗密等)を司る。

造構器聽



斷縱球眼





第九章 內臟

第十表

體腔及內臟			
頭蓋腔	脊柱管	胸腔	腹腔
腦髓	脊髓	大動脈、大靜脈、心臟、氣管、氣管枝、肺	胃、腸、肝、膽囊、脾、副腎、腎、輸尿管
		食道、胸腺	膀胱、尿道
		骨盤腔 (女子)	直腸
		陰、子宮、輸卵管、卵巢	

第一節 呼吸器

一 鼻腔

吸氣を温め、毛によりて塵埃を去る。鼻腔上部の粘膜は嗅覺を司る。

二 口腔

鼻腔より空氣の通じ得ざる時に空氣の通路となる。

三 咽頭

口腔より食道に通ずる管即ち消化管と鼻腔より氣管に至る道即ち氣道との交叉點なり。

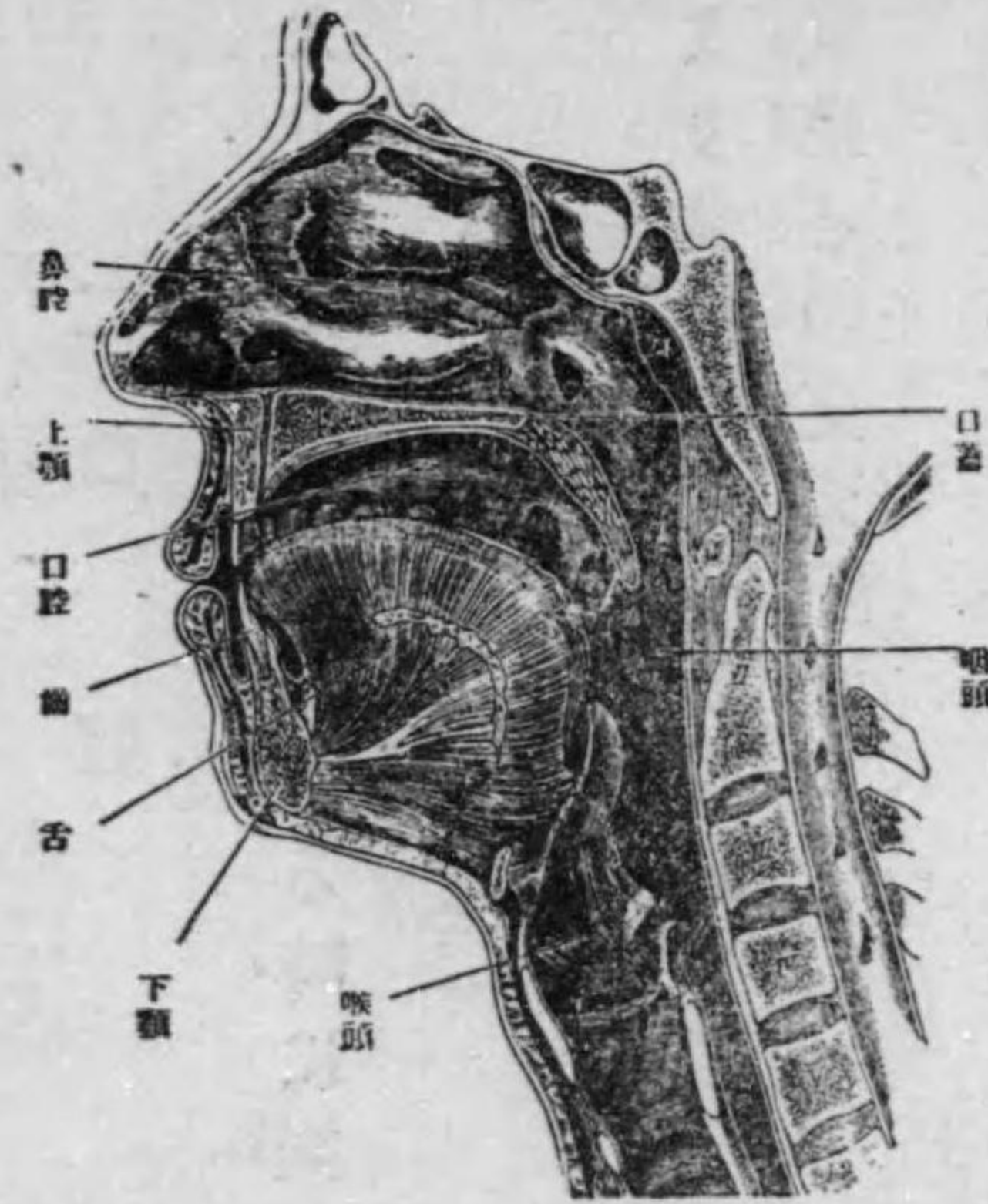
四 喉頭

喉頭は前頸部の中央に位する短かき管にして、數箇の軟骨よ



りなる。其の管中に左右より聲帶張りて其の振動によりて音を發す。

圖五十四第 (斷狀矢) 部半下首頭



喉頭の上口の前方には會厭軟骨と稱する瓣状のものありて食物を嚥下する際に後へ屈折して上口を蓋ひ食物の喉頭に入るを防ぐ。

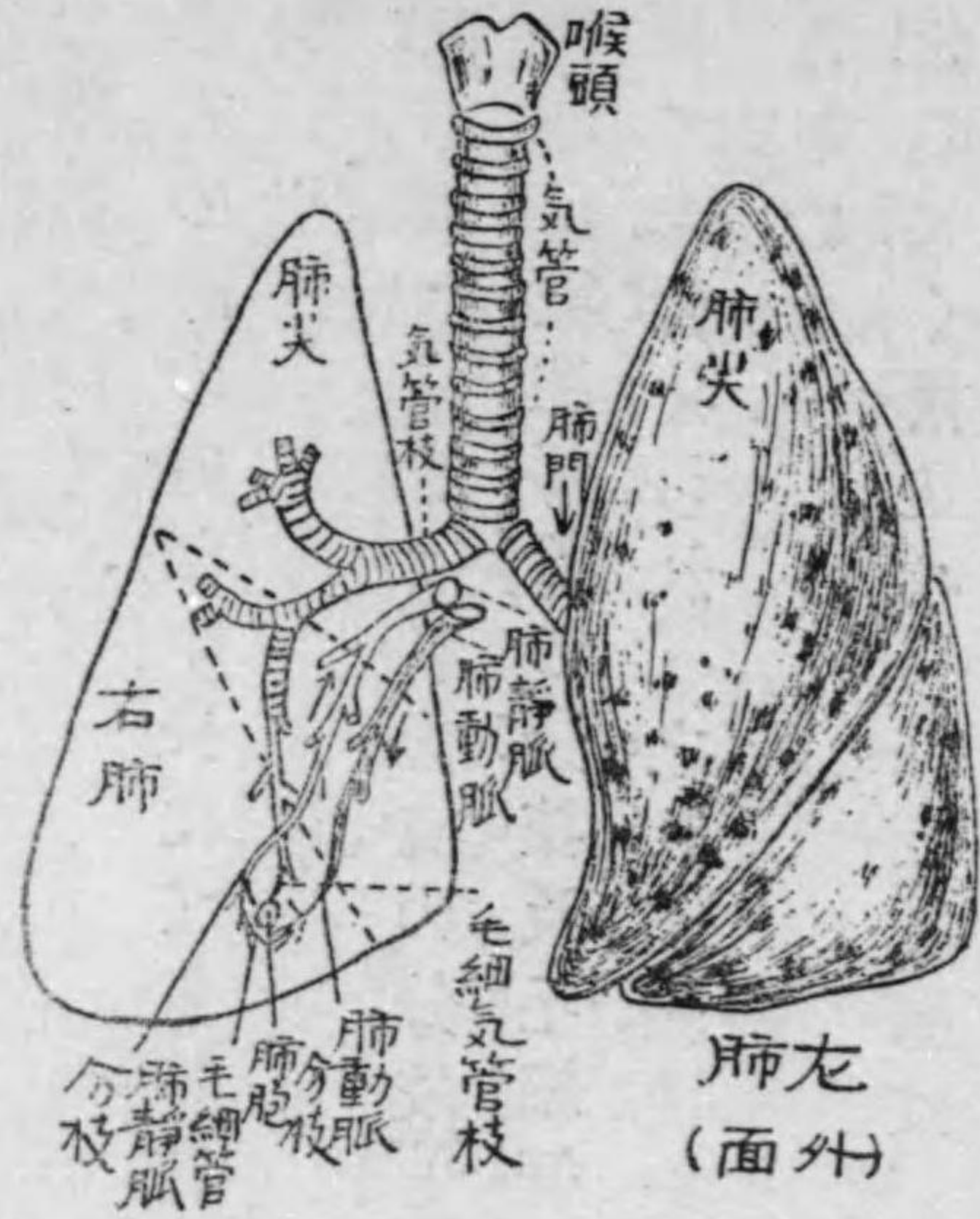
五 氣 管

氣管は喉頭の下に接続し、食道の前を下降し、先づ左右の氣管枝に別る。(肺の中に入りて後は更に多數の細き枝に別れ遂に毛

細氣管枝となる

六 肺 臟

圖六十四第 (部要) 器吸呼



第一節 呼吸器

(一) 肺臟は胸腔内臓の左右に位し、右肺は三葉、左肺は二葉に別る。左右いづれも上端は尖りて之れを肺尖と稱す。

(二) 肺の外面は肋膜(胸膜)を以て被はる、肋膜は此の外に胸壁の内



(三) (四)

面を被ふものあり、この兩者の間は滑かにして呼吸の際の摩擦を防ぐ。

左右の肺の内側中央にて氣管枝及血管の通ずる場所を肺門と稱す。

肺の構造。肺は「氣管枝の分枝」と「其の末端にある肺胞」及「血管(肺動脈肺靜脈)の分枝及毛細管」との三種が結締織によりて結合せられ、之れが表面を肺肋膜によりて包まれたるものなり。

此の如く構造せられたる肺は、肉眼上海綿様にして弾力を有す、此の弾力は結締織中に弾力纖維多きが故なり。

呼吸器の生理

(一) 呼吸器は呼吸及音聲を司る。

イ、外呼吸(又は呼吸)とは肺殊に肺胞内の空氣と其周囲の毛

細管内の血液との間に行はるゝ瓦斯交換をいふ。これにより空氣中の酸素を血液中に吸収し、血液中の炭酸

を空氣中に排出す。

ロ、内呼吸とは全身毛細管内血液と組織との間に行はるゝ瓦斯交換を稱す。之により血液中の酸素を各組織に與

へ之を營養し、其新陳代謝の結果生じたる炭酸を血液

(二)

呼吸運動 肺胞内の空氣と外圍の空氣と交換せんが爲めに肺を縮小又は擴張せしむる運動を云ふ。此運動は呼吸



筋により起る。呼吸筋とは胸廓の骨に附着せる種々の筋肉の外に横隔膜及腹筋を云ふ。

(三)

呼吸數は次の如し。	一分間	三〇—四〇
一年未滿	一分間	一六—二〇(平均一八)
大人	一分間	

### 第二節 消化器

消化管(口腔、咽頭、食道、胃、腸)と腺(唾腺、脾臓、肝臓)とより成る

#### 一 口腔

口腔の上壁を口蓋と稱す、其の前方大部分は硬くして

第四十七圖 口腔



之を硬口蓋と稱し、其後方は軟かにして軟口蓋と稱す、其後

端中央に懸壺垂あり、其の基底の部分より左右に弓状に走る線あり、之を口蓋弓と稱す、之れに前後の二あり、前後口蓋弓の間にはさまる腺を扁桃腺といふ。

表面粘膜を以つて被はる、こ

舌の粘膜には無数の乳頭存在す、舌は細かき筋肉より成り、舌の粘膜には普通の知覺神經の外に乳頭内に味官を有す。

#### 二、咽頭

咽頭は氣道と消化管との交叉點なり。



### 三、食道

食道は咽頭と胃との間にありて、氣管の後方を下降し、横隔膜を貫きて腹腔に入るや直ちに胃に連る。

### 四、胃

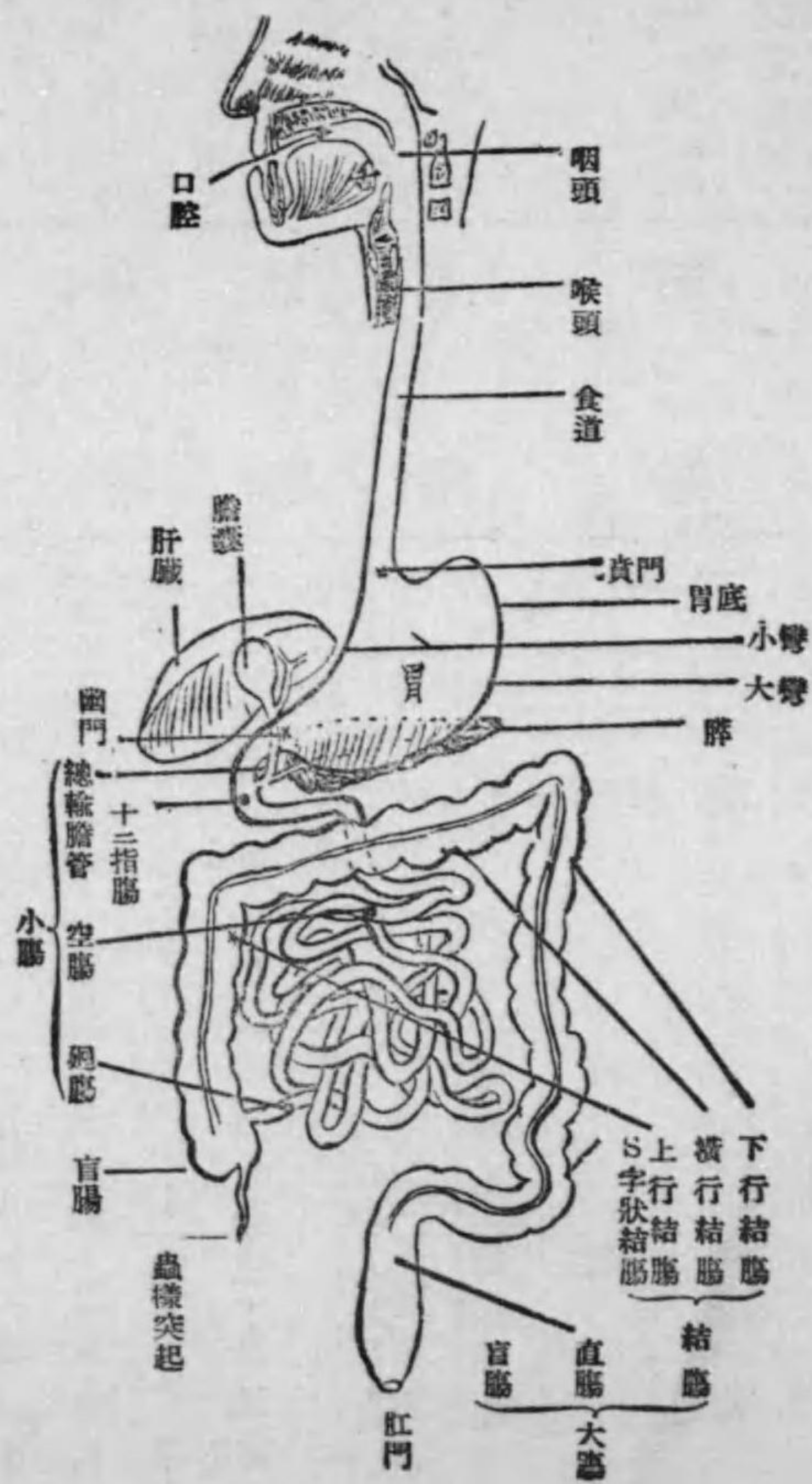
(一)位置 胃は大なる筋質の囊にして、腹腔の上部に於て左方に偏在す。

(二)區別 噴門 幽門 胃底 小彎 大彎 の區別あり。  
(三)構造 胃壁は漿膜 筋層 粘膜 の三層より成る。粘膜には無数の腺あり之を胃腺と稱す。胃腺よりは透明なる胃液を分泌す。

### 五 腸

(一)位置 腸は腹腔の大部分を占むる長き管にして、大人の腸は身長しんちやうの四倍半なり。

圖略器化消 圖八十四第

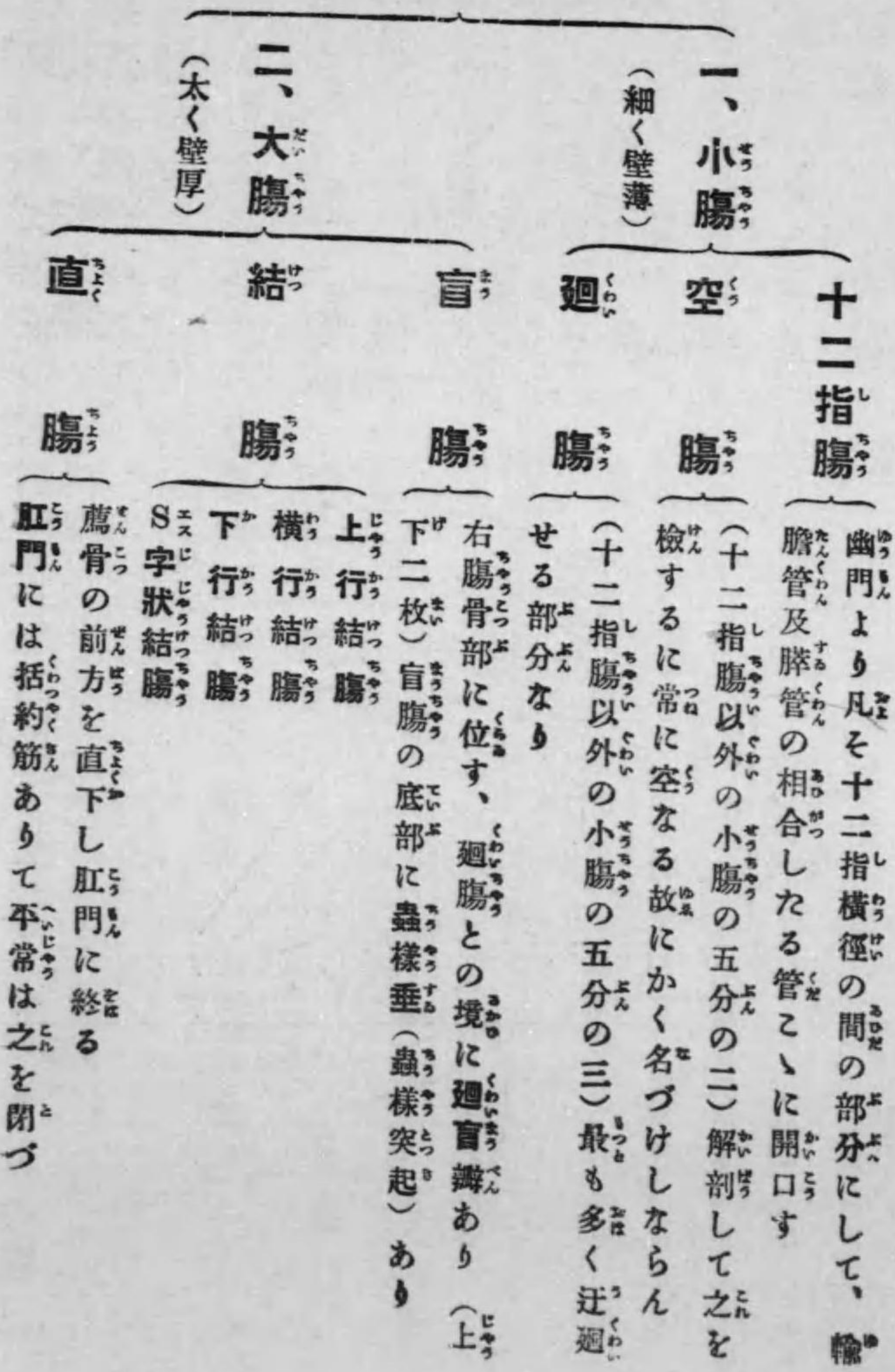


### (二)區別

第二節 消化器

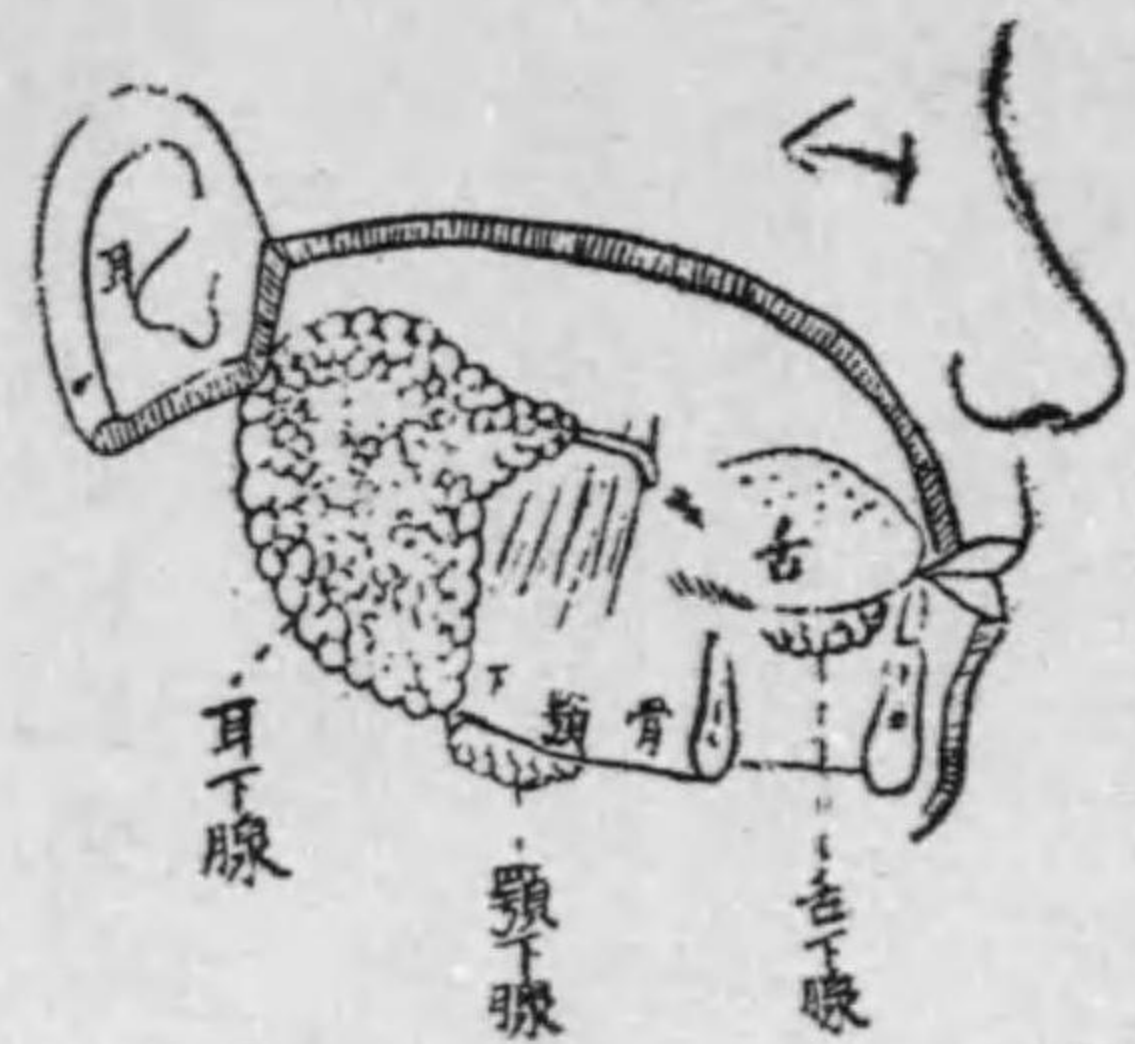


腸



(三)

腺 唾 圖九十四第



第二節 消化器

構造 腸壁は漿膜、筋層、粘膜の三より成り、粘膜には無数の腺あり之を腸腺と云ひ腸液を分泌す。腸の粘膜には皺襞多くして吸収の面甚大なり、殊に小腸には表面に更に絨毛を有し其吸収の面を愈々大とす。

一 唾腺 (唾液腺)

唾腺とは唾液を分泌する所の腺にして、大なる唾腺は左右に三對あり。

- (一) 耳下腺 耳の下前方にあり
- (二) 顎下腺 下顎骨の下にあり
- (三) 舌下腺 舌の下部、口腔粘



第貳編 解剖學及生理學  
膜の直下に位す。

## 二 肝 臟

- (一) 上腹の右側、横隔膜の直下に在り、楔状をなす。  
(二) 上面は圓形に隆起し恰も横隔膜の穹窿に適合す、下面は少しく陷凹す。  
(三) 肝臟は大なる右葉と小なる左葉との二より成り、其兩葉内部に於て分泌せられたる胆汁は、輸膽管により膽嚢に導かれ、更に總輸膽管により十二指腸の後壁に膵管と共に開口す。

## 三 膵 臟

- (一) 胃の後方に横はれる長大なる腺にして、右端は太く左端は細し。  
(二) 分泌したる膵液は膵管によりて導かれ總輸膽管と合同して十二指腸の後壁に開口す。

## 消化器の生理

生活作用により失はれたる人體の成分は、血液中の營養分により補はれざるべからず、此の營養分は飲食物より來る、而して其の飲食物が血液の中に入る前には、必ず消化せられざるべからず。

其食物の主成分は



(一) 蛋白質  
 (二) 脂肪  
 (三) 碳水化合物  
 (四) 鹽類  
 (五) 水類  
 (有機物)  
 (無機物)

にして、之れ等の食物は之れを

(一) 消化器の運動により細小にし且つ運搬し。  
 (二) 消化液の作用により吸収し易き状態に變じ。  
 (三) 消化管の吸収力によりて吸収するものなり。

一 消化器の運動

一 咀嚼運動により食物を細挫す。  
 二 嚥下運動により食物を胃に向つて下降せしむ。  
 三 胃の運動により食物を胃液とよく混和し粥の如き物とな

四 腸の運動は上方より下方に向つて蠕動の如く運動す、之れを蠕動と云ふ、之により食物の消化及吸収を助け且つ食物及其残渣(糞便)を輸送す。

二 消化液の作用

消化液の主なるものは、一唾液、二胃液、三脾液、四胆汁、五腸液なり。

一 唾液 唾液腺より分泌せらるゝ透明の液、弱「アルカリ」性。

効用 (一) 食物中の澱粉質を葡萄糖に變化す。  
 (二) 既に咀嚼せられたる食物を一塊となし、其表面を



二胃液

(三) 包み之を粘滑ならしむ。  
常に口腔内を濕潤ならしめ舌の運動に便にす。  
胃粘膜の胃腺より分泌せらるゝ無色透明の液にして  
酸性反應を呈す。

主成分は「ペプシン」、鹽酸なり。

効用

「ペプシン」は、酸性の液の中に於て、食物中の蛋白質を「ペプトン」等に變化す。

三唾液

唾液より分泌せらるゝ唾液の如きものにして、之れも亦「アルカリ」性なり。

澱粉質を葡萄糖に變化す。

蛋白質を消化す。

脂肪を變化す。

効用

(一)(二)(三)

四胆汁

肝臓内にて分泌せらるゝ黄褐色苦味の液にして、「アルカリ」性を呈す。總輸膽管を通じ十二指腸に注ぐ。

効用

一、胆汁の脂肪消化を助く。  
二、腸内過度の腐敗を防ぐ。  
三、腸粘膜を刺戟して分泌を促し、蠕動を亢む。

五腸液

腸粘膜の腸腺より分泌せる「アルカリ」性の液なり。

効用

一、澱粉を砂糖に變化す。  
二、腸液中の粘液によりて糞便の形成を助け、且つ其通過を容易ならしむ。

三 消化器の吸收作用

口腔、咽頭、食道に於ては吸收作用なし。



- 一 胃の吸収 胃壁の血管中に吸収せらる。
- 二 小腸の吸収 十二指腸及空腸に於て吸収最も著し。
- 三 大腸の吸収 大腸に於ても亦盛に吸収作用あり。

○凡て腸の吸収の路に二あり。

(一) 脂肪は主として乳糜管に入り腸間膜の淋巴管を経て胸管に合し左鎖骨下静脈に注ぎ血液と混じ全身諸組織を養ふ。

(二) 脂肪以外のものは腸壁の血管に吸収せられ、腸間膜静脈及門脈を経て肝臓に入る。

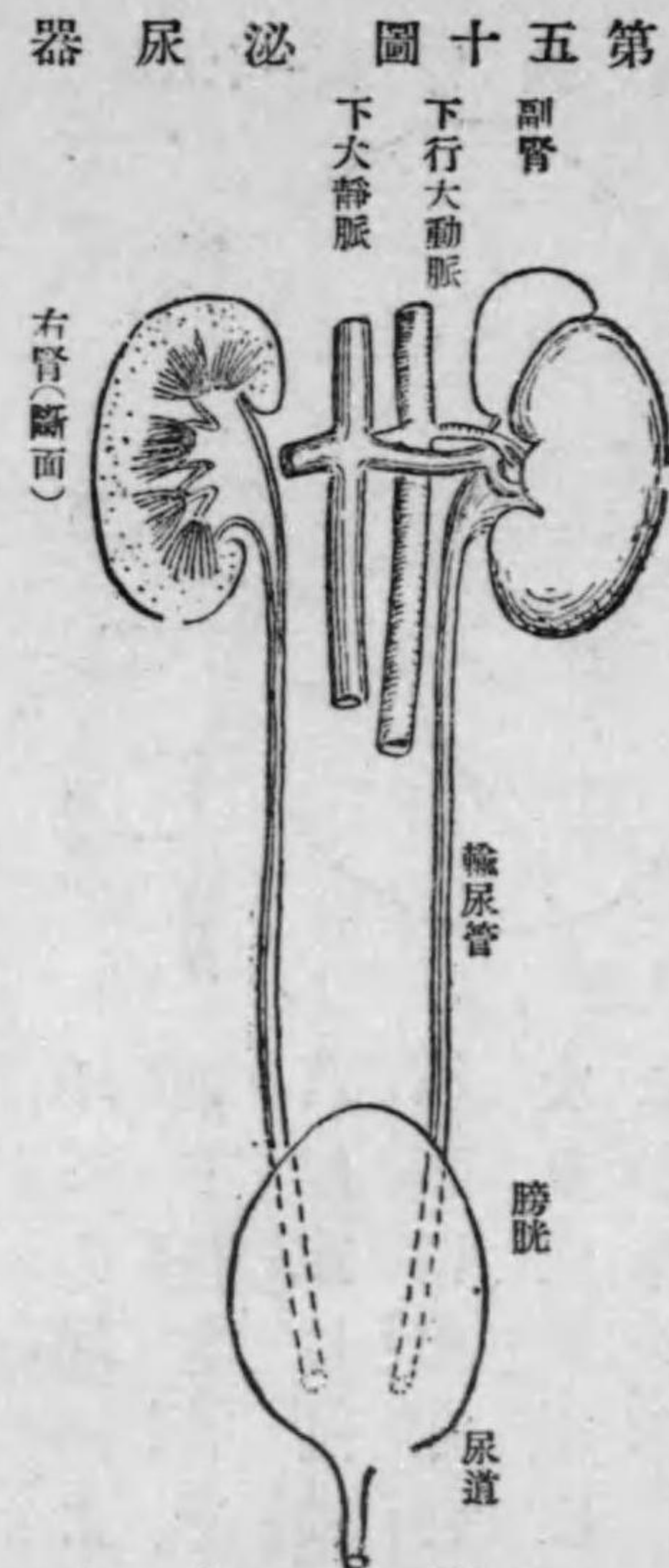
### 第三節 泌尿器

#### 一 腎臓

(一) 位置 腹腔上部脊柱の左右に一個づゝ存在す。

(二) 形状 陰元豆の如く、其の凹みたる側は内方に向ひ腎門と稱す。

(三) 構造 腎門より腎動脈が入り腎静脈及輸尿管出づ、此輸尿管の初めに腎盂あり。



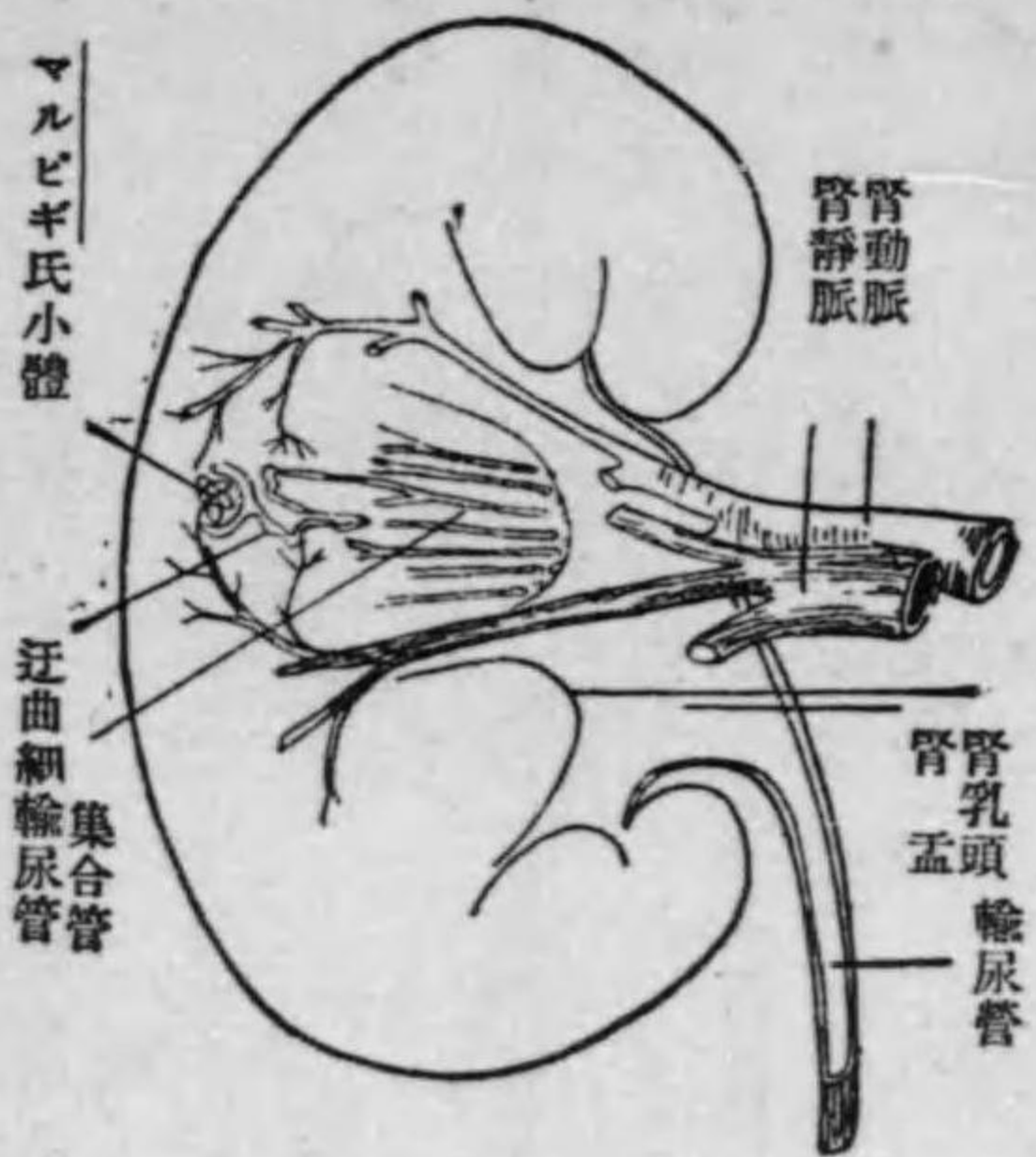
腎動脈は腎臓に入りて漸次に細き枝に分れ、遂に毛細管となる、この毛細管は糸球の如くに集る、これを

マルピギー氏小體(糸球)と稱す、之は主として腎臓の外層即ち



皮質の部分にあり。この小體より出づる血液は靜脈管に移行して漸次に相合して太くなり遂に腎靜脈として腎臟を去る。

第五十一圖 腎臟 (圖型模)



凡て集合管の並列する場所及其互間は内層なり之れを皮質に對して髓質と稱す。

### 尿の分泌

小體の周圍より始まる所の極めて細き長き管を細尿管と稱す、これは或は迂曲し或は直行して遂に眞直に相並行せる稍太き集合管となりて腎盂に開口す、この開口部は乳頭の如くに隆起せるを以てこれを腎乳頭と稱す。

腎臟内の毛細管又はマルピギ氏小體內を流るゝ血液中の老廢成分は其の毛細管壁より細尿管内に滲出し、細尿管内を通じ腎盂に集合し、尿管を経て膀胱に至る、これ即ち尿なり。

### 二 輸尿管

輸尿管は左右腎臟より各一本づゝ出て、下降して膀胱の後壁下部に注ぐ。

### 三 膀胱

(一) 位置 恥骨接合の後方、子宮の前方(男子なれば直腸の直前に位し、尿管によりて送られたる尿を潑溜する所なり。



(二)區別 膀胱の下方は漸次に狭小となる、これを膀胱頸と稱す、此所に括約筋ありて尿の滯溜するも濫に流出することなからしむ。

(三)構造 筋質の囊にして、外面は漿膜にて被はれ内面は粘膜にて被はる。

### 四 尿道

尿道は膀胱頸より出づる筆の軸の如き細き管にして、恥骨接合の後方を通ず。

女子にありては僅かに四—五仙米にして陰の前方を通じ陰門の前庭に開口す、開口部を尿道口(尿道外口)と稱す。

—帶黃透明、通常酸性反應

尿比重 一、〇一〇—一、〇二五

一晝夜の分泌量

女子	千立方仙米内外
男子	千立方仙米—千五百立方仙米

### 第四節 生殖器

#### 男性生殖器

#### (甲) 外生殖器

- 一 陰莖
- 二 睪丸及副睪丸

△精子(精絲、精蟲)は睪丸にて作らる。

其形圖の如く、頭部、中部、尾部よりなり、長さ〇、〇五密



米なり。適當の液中に於ては頗る活發に運動するものにして、

交接時には一種の液と共に射出せられ、婦人の体内に入りては三週間以上も長く生存し得。



### (乙) 内生生殖器

- 一 精系
  - 二 精囊
  - 三 攝護腺
- 女性生殖器

### (甲) 外生殖器

#### 一 乳房

- (一) 位置 胸壁前面にある左右一對の隆起なり、其の間を乳間溝といふ。
- (二) 形状 小兒期に於ては、この隆起極めて僅か(男子と同形)にして、破瓜期に至れば漸次に發育して腕を伏せたる如く半球状をなし分娩及び哺乳を營みたる後は囊狀に懸垂す。
- (三) 區別
  - (1) 乳體 乳房の主なる部分にして、内に乳腺を有す。
  - (2) 乳頭(乳嘴)



第 三 十 五 圖 房 乳 (八十歳女子)



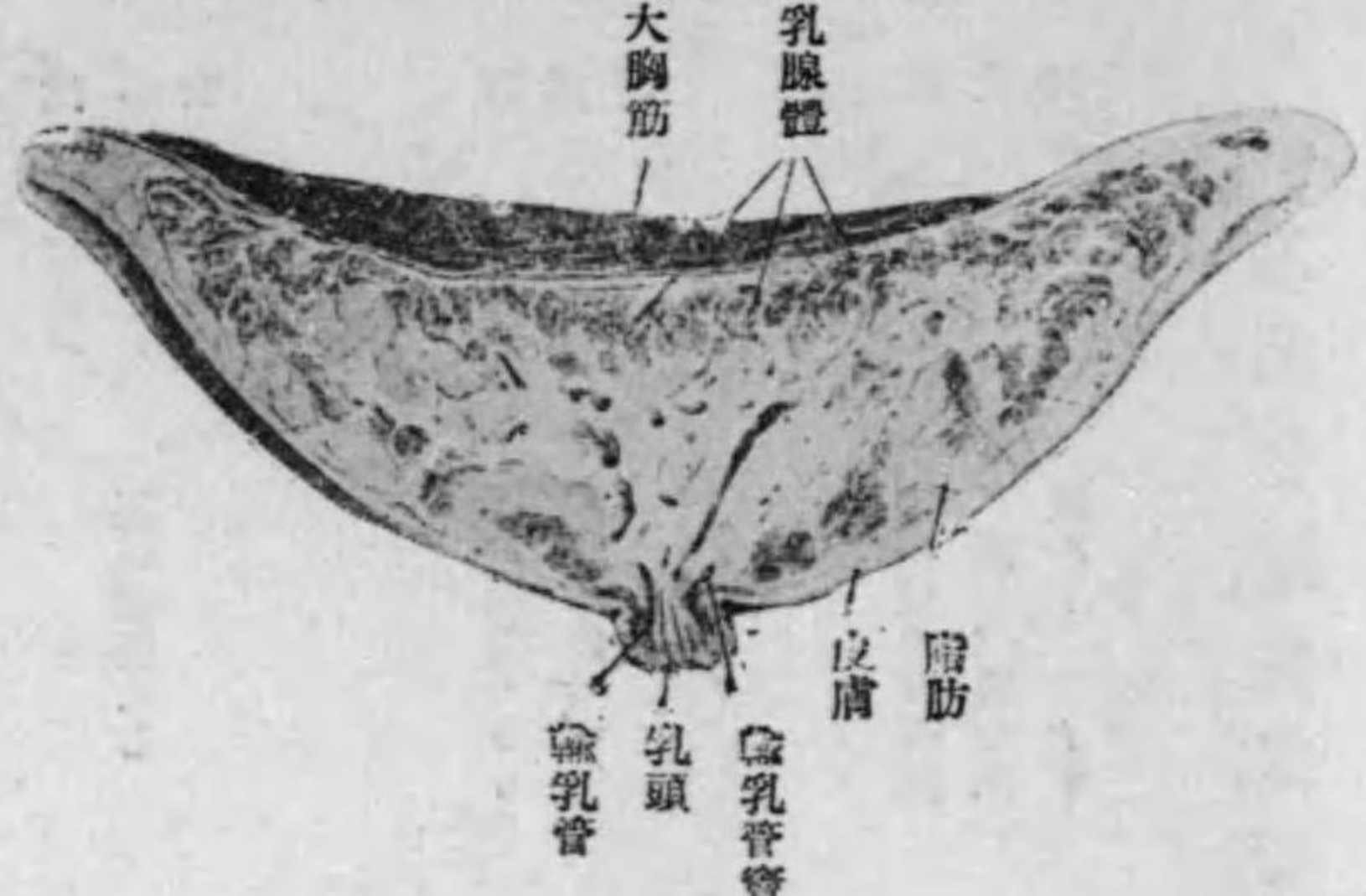
(3)

一〇六  
乳房の中央の  
突出せる部分  
乳量  
乳頭の周圍に  
ある淡褐色の  
部分にして、  
妊娠後は暗褐  
色となる。

第 三 十 五 圖 房 乳 (八十歳女子)

(四) 構造 乳腺は葡萄状の腺にして、乳汁を分泌する部分を腺體といふ。これを導く管を輸乳管と稱す、輸乳管は乳頭に近き場所にて膨大す。これを竇といひ乳汁を潑溜する部分なり。輸乳管は乳頭に於ける數多の小孔に開く。

第 四 十 五 圖 妊 娠 末 期 乳 腺 (面露)



(五) 乳汁 乳腺は妊娠中に發育し、既に其の經過中に初乳を分泌す。分娩後三四日にして俄に其の分泌を増し、普通の乳汁に變ず。而して小兒に授乳する間は其の分泌を持續し、乳兒の發育に伴ひ其の量を増加すれども八ヶ月以後は乳兒の發育に伴はずし却つて其の量に不足を來す。

二 外 陰 部

(一) 大陰脣(外陰脣)  
(1) 上端 左右相合す、これを前連合と云ふ。其の上方腹



# 欠

第 五 十 五 圖 處 女 膜

經 産 婦



膜の裂傷は基底に達し、膜の缺損あり

既 婚 婦



膜の裂傷あるも基底に達せず

處 女



膜の裂傷なし

第 貳 編 解 剖 學 及 生 理 學  
壁との境にて隆起せる所これを陰阜といふ。陰毛は最も多く此處に生ず。

(2) 下端も相合す、これを後連合といふ。

(二) 小陰脣(内陰脣)

(1) 上端 左右各々内外二葉に分れ外葉は相合して陰核を包む、これを陰核包皮といふ。

内葉は陰核の下面にて相合し、陰核繫帯を作る。

(2) 下端 左右小陰脣後方の相合す之と肛門との間を會陰と云ふ



# 欠

(一) 位置 前方は尿道及び膀胱、後方は直腸に接し、上方は子宮に連り、下方は腔口となりて前庭の下部に開く。

長さ凡そ八仙米。

(二) 形状 骨盤軸の方向に従ひて前方に彎曲し、腔口に近き處は狭く、上方に至るに従ひ廣し。

(三) 區別 最も上方にて最も廣き部分を腔穹窿といふ。其の穹窿の中央に子宮腔部突出す。これによりて前腔穹窿、後腔穹窿、側腔穹窿を區別す。

(四) 構造 腔壁は筋肉より成り、内面は粘膜を以つて被はる。

## 二 子宮

(一) 位置 小骨盤の中央に位し、前方は膀胱に、後方は直腸に



接し、上方は何もなく只腸を載せ、下方は腔に連り、側方は輸卵管及潤靱帯に連る。

(二) 形状 扁平茄子状をなし、其の太き端は前上方に向ひ、細き端は下方に向ふ。

長さ凡そ八仙米餘幅は上部に於て廣く凡五仙米なり。

(三) 區別 上方の主部を子宮體と稱し、下方の小部を子宮頸と稱す。其の間僅かに狹窄して兩部の境界を示す。

子宮體の後面は前面よりも膨隆著しく、體の最上方廣き膨隆(即ち輸卵管の開口部より上方)を子宮底と稱す、子宮頸

の下部は殆ど椎の實の如く腔穹窿内に突出す、この部分を子宮腔部といふ。これを下方より覗く時は前後に扁平の圓形をなし、其の中央に子宮外口(子宮口)開く。子宮外口よ

圖七十五第 子宮腔部



經産婦



り前方を子宮前唇といひ、後方を子宮後唇と稱す。子宮前唇は後唇よりも通常長くして且つ厚し。

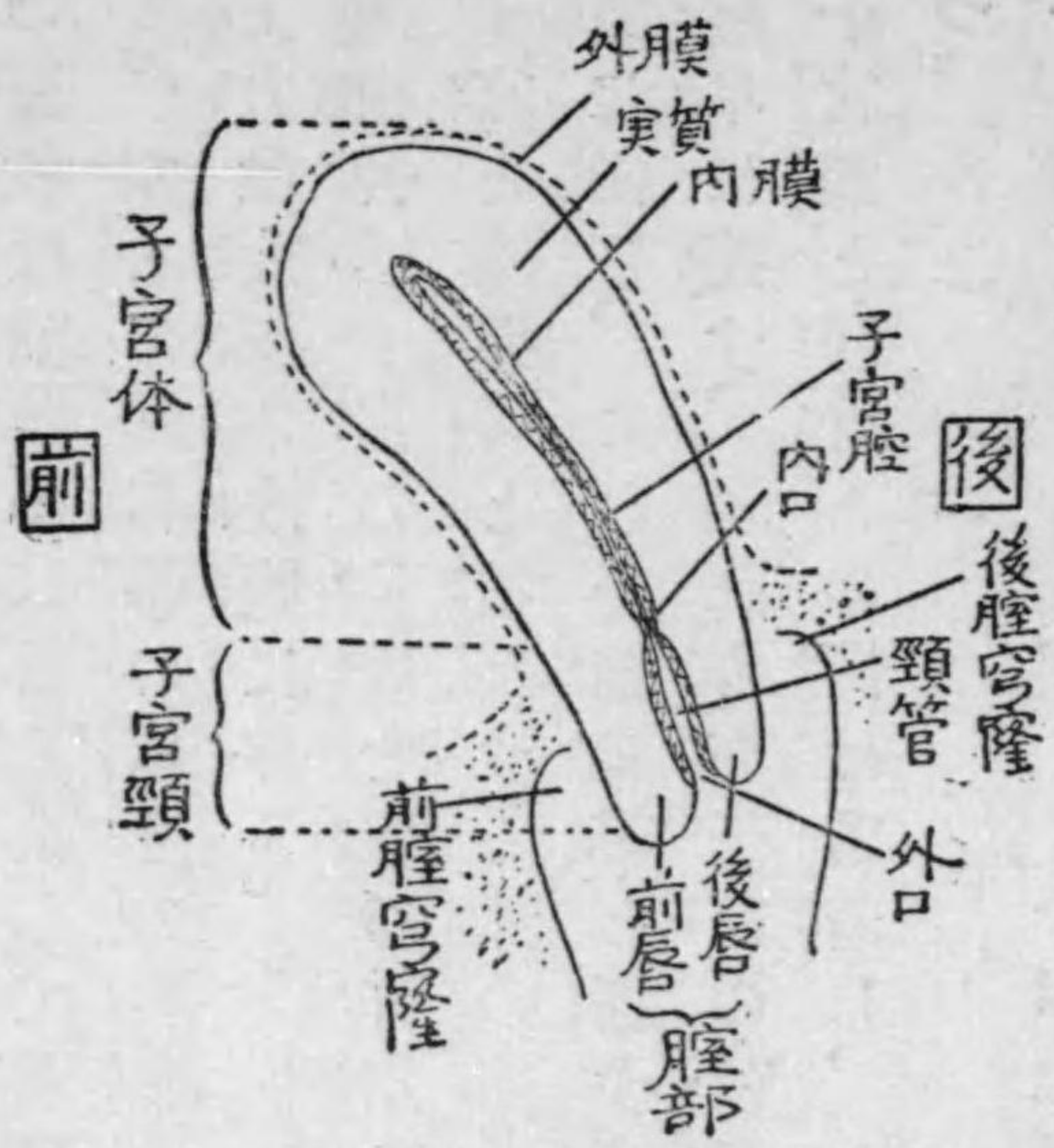
△子宮腔の區別 子宮體の腔を子宮體腔といひ、子宮頸の腔を子宮頸管といふ。

(1) 子宮體腔は前後に扁平にして左右に廣く、前額斷に於て三角形をなし三角の頂端は下方に向ひ頸管の上端に連る、此處を子宮内口と稱す。三角の底は上方に向ひ其の兩端の

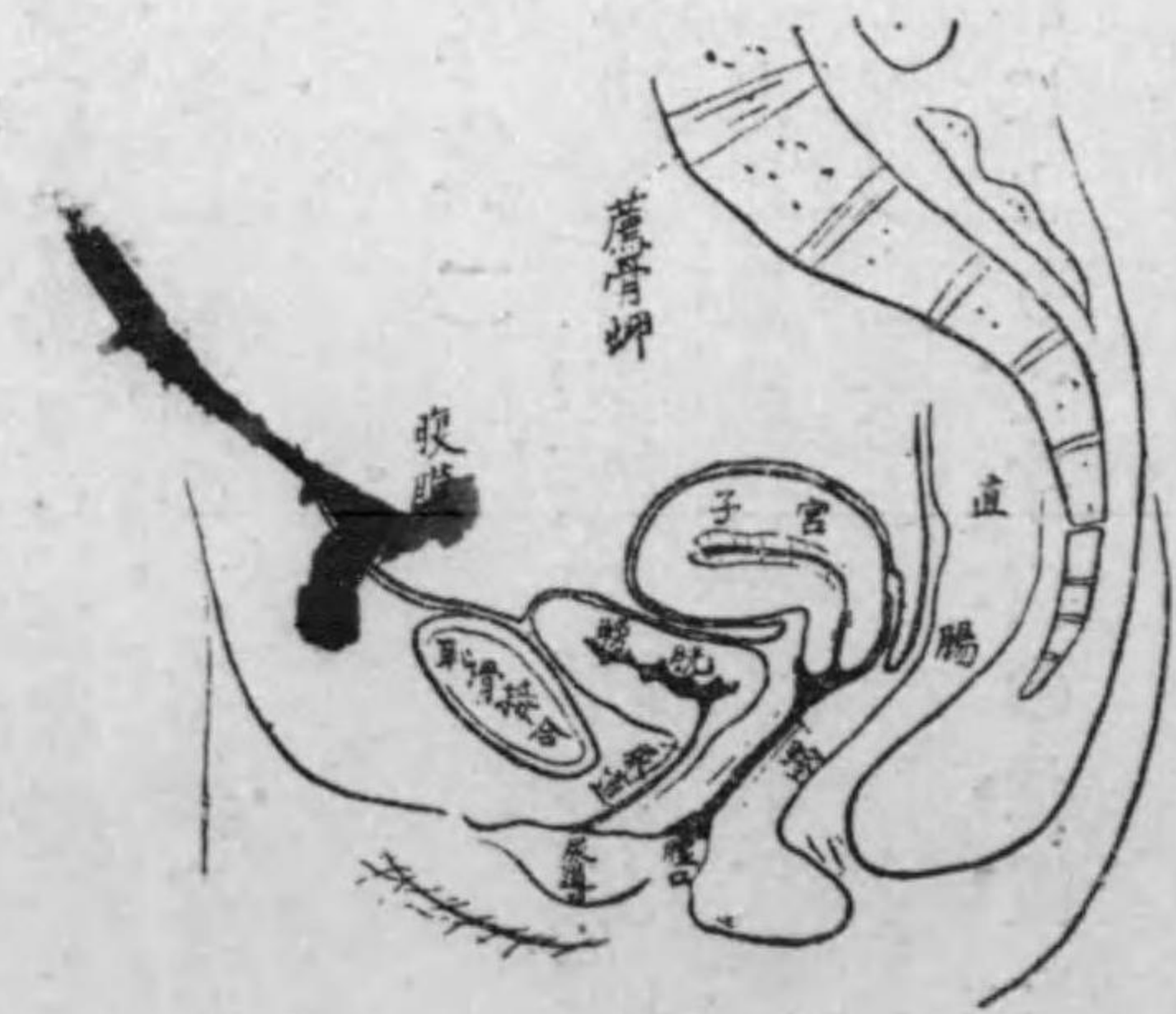








第六十一圖 子宮 (矢狀斷)



第六十二圖 骨盤部 (矢狀斷)

面に移る。子宮の後面を被ひたるものは、又上行して直腸の前面を被ふ。子宮を前後より被ひて左右に餘りたる两侧

欠



の腹膜は前後の二枚相接して潤靱帶(廣靱帶又は扁靱帶)となる。左右の潤靱帶の續きの腹膜は、更に骨盤の左右壁を被ひ、上方は腹壁の腹膜に移る。

潤靱帶は子宮の位置を保つ作用あり。(其二)

子宮と輸卵管と相接する部の前面より圓き索狀の靱帶が前外方に走る、これを圓靱帶と稱す。これは腹膜に包まれて遂に陰阜に達す、これも亦子宮の位置を保つ。(其三)

子宮頸と膀胱との間は密着し、これによりて子宮の位置を保つ。(其三)

子宮頸と薦骨との間には子宮薦骨靱帶ありこれも亦子宮の位置を保つ。(其四)

### 三 輸卵管(喇叭管)

(一)位置 子宮底の左右より出で、潤靱帶の上縁に於て其の膜の折目の間を通り、僅に迂曲して側方に走り其の先端は少しく後方に曲る。

(二)形状 細長き喇叭狀の管にして左右一對あり。長さ凡そ八仙米。

### (三)區別

- (1) 子宮部 子宮壁の間を通ずる部分にして、子宮腔に開ける口を輸卵管子宮口といふ。
- (2) 峽部 子宮に近き細き部分をいふ。
- (3) 鐘狀部(壺腹部) 外方の廣き部分をいふ。最も先端の漏斗の如く開ける部分をいふ。其の底には鐘狀部の端開く、これを輸卵管腹口といふ、漏斗の先には多數の總
- (4) 漏斗部

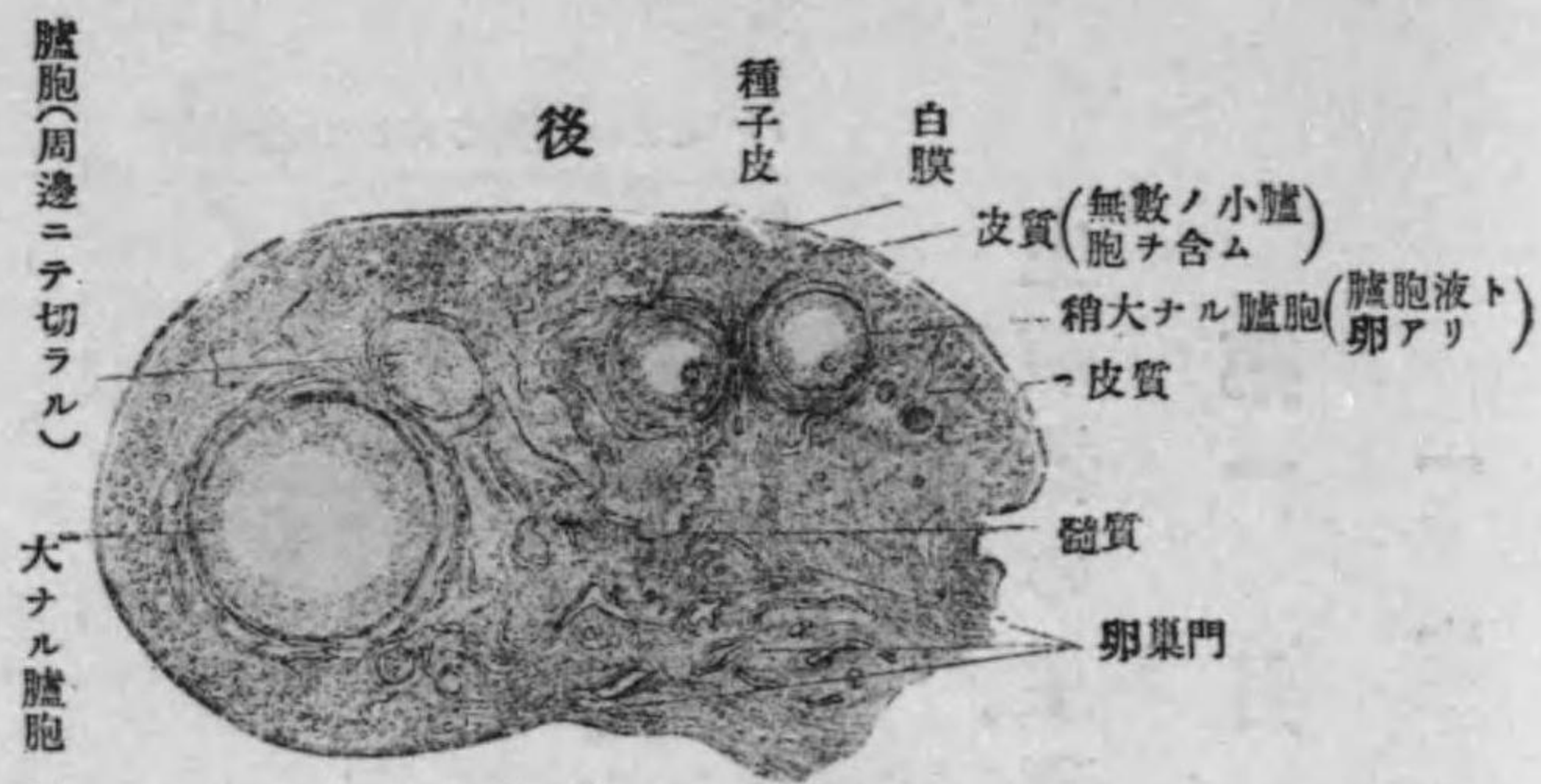


(四) 構造 (1) 外膜 (2) 筋質 (3) 粘膜 の如きものあり。これを剪綵といふ。  
 より成る。この粘膜の内面には極めて細き無數の「鬚毛」を生じ、常に子宮の方に向ひて動き、卵巢より輸卵管に入り來れる卵を子宮腔に向ひて送る作用をなす。

### 四 卵巢

- (一) 位置 子宮の兩側、輸卵管の後下方にあり。
- (二) 形狀及大小 扁平の長圓形をなし左右一對あり。大さ桃の種子の如し。
- (三) 構造 其前縁潤靱帶に對する部は血管神經の出入する處にして、こゝを卵巢門と云ふ、卵巢門より中央迄を髓質と云

片斷巢卵 圖三十六第  
 (大廓テ=鏡微顯)



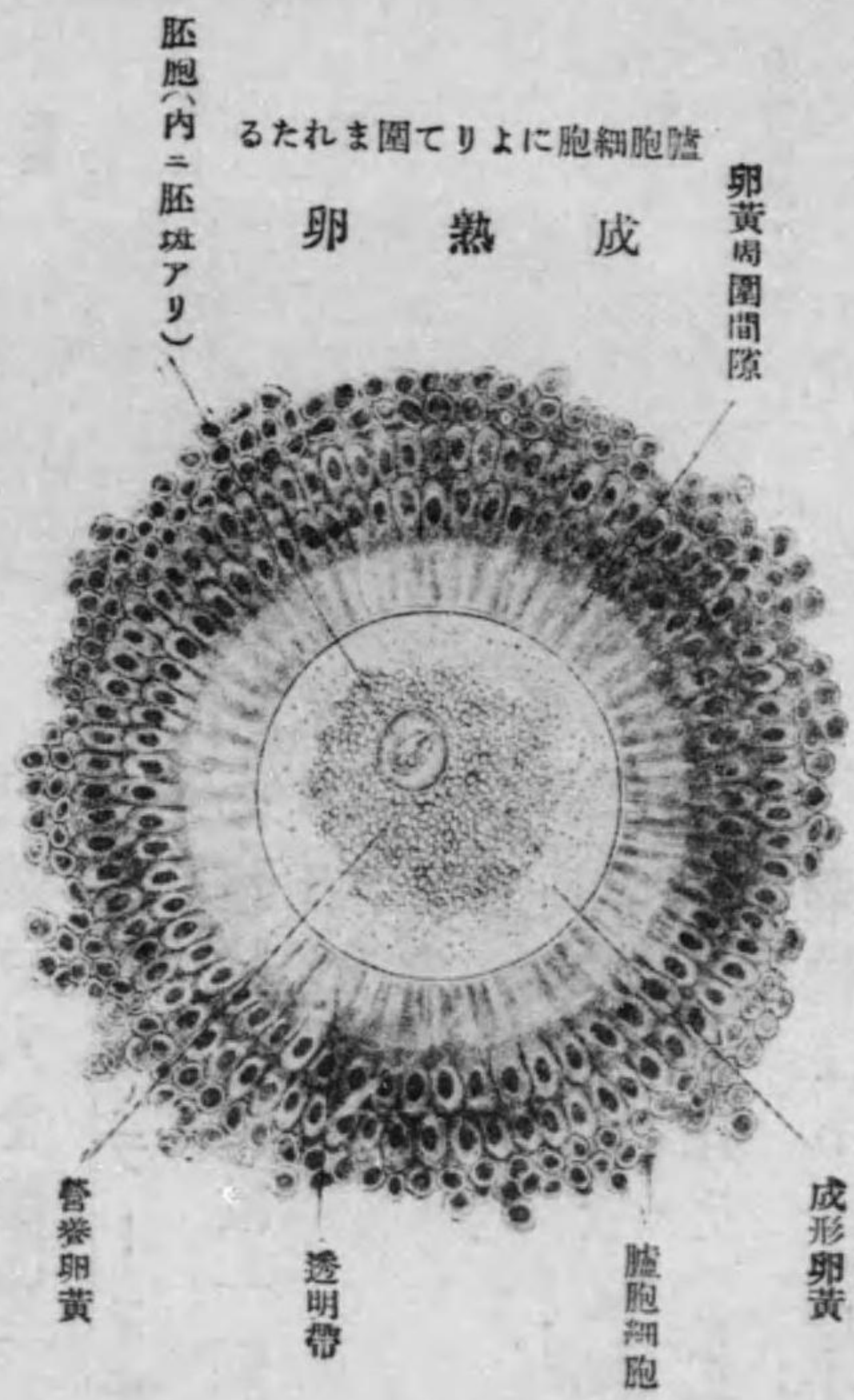
第四節 生殖器…卵巢

ひ其他を皮質と云ふ。  
 皮質の内には無數の小胞あり、これを臙胞と稱す。其の大さ一定せず、小なるは肉眼にて見得ざるも大なるは豌豆大を超ゆ。其成熟したるを成熟臙胞(グラーフ氏臙胞)と云ふ。この臙胞内には一個の卵を有し、又臙胞液を含む。

卵は、大なる細胞にして、成熟卵は直徑凡そ〇、二密米なり、即ち粟粒よりも尙小にして、肉眼にて



圖四十六第



殆ど視難き一小  
白粒なり。  
卵に、卵黄と胚  
胞(卵核あり、胚  
胞中には胚斑を  
認む。

### 生殖器の生理

#### 第一月經

##### 一定義

月經とは、凡そ四週間に反復來潮する子宮體粘膜炎より出血なり。

#### 二 破瓜期と更年期

##### 破瓜期

- (一) 月經初潮  
排卵開始……………(平均十四歳八ヶ月)
- (二) 肉體上の變化  
全身(腰部、諸關節に脂肪増加)  
生殖器(乳房、外陰部)  
内生殖器(陰、子宮、卵巢等)
- (三) 精神上的變化(性慾の感念)

##### 更年期

- (一) 月經閉止  
排卵停止……………(四十五—八歳)
- (二) 肉體上の變化(下腹痛、下痢、鼓脹、發汗、逆上、心悸亢進)
- (三) 精神上的變化(不眠、頭痛、眩暈、沈鬱、恐怖観念)



### 三 子宮内膜の周期的變化

月經を見る年齢の婦人の子宮内膜は、凡そ四週間に次の四期の變化を起す。

28	18	10	0
月經前腫脹期。	月經後期。	月經出血期。	月經再二期。
次の月經前約十日間。 内膜の厚さ六密米(二分)	出血第一日より數へて十日—十八日。	出血第一日より數へて凡そ十日目迄	休息期。 出血第一日より數へて十日—十八日。 内膜の厚さ三密米(二分)

第十表

以上を一周期として、次へ次へと、反復して變化す。

### 四 月經時身神の變化

- (一) 肉體的障礙。  
 (1) 血行器及消化器の變調、(2) 乳房の腫脹又は疼痛、  
 (3) 下腹痛、腰痛、薦骨痛等。
- (二) 精神的障礙。  
 神經過敏、沈鬱又は興奮、思慮及意志薄弱等。  
 右は人々により其強弱の度を異にす。

### 第二 排卵機能

卵巢内の臙胞は小兒期に於ては小なるものなるが、破瓜期以後は其の一個づゝが、代る々々漸次に發育増大し、其の内の卵も大となり、臙胞液は益々増加し。遂に成熟臙胞と成るに及びて卵巢表面に近き其臙胞液の内壓に堪えずして、臙胞は



破裂し、其裂孔より臚胞液と共に成熟卵が排出せらる、これを排卵機能といふ。

この排卵機能は破瓜期より始まり其の以後四週間に一回づゝ起り更年期以後には失はる。

即ち月經を見る年齢の婦人に於ては、普通月經の數日前に排卵するものにして、妊娠中及産褥中には通常この機能なし。

故にこの排卵機能と月經とは密接の關係を有するものなり。

然れども時として、月經なき婦人に於ても、排卵機能あり、従つて月經を見ずして妊娠することあり。

### 第三 受胎(受孕、妊孕)

#### 一 定義

精絲が卵子の内に進入して、或變化を營み、これにより胎兒形成の基原をなす作用をいふ。

#### 二 受胎卵の發育

交接によりて腔内に射出せられたる精子は、子宮頸管を経て子宮體に入り、更に輸卵管を通じて、其漏斗部附近の皺襞の間に潜みて卵の至るをまつ。

婦人月經前腫脹期の頃に排卵せられたる卵が、剪綫によりて捕へられて漏斗部に來る時は、精子と相會合して其の體内に一種特別の變化を營む、即ち、受胎作用を行ふ。

この受胎したる卵子は忽ちに二つに分れ、其の各が更に二つに分れ即ち四となりて、又其の各が更に二分する爲めに、漸



次に其の細胞の數を増加し、以て遂に胎兒を形成するに至る。受胎卵は其の内部に變化を營み、且つ分裂しつゝ、輸卵管内を通じて、子宮體腔内に進み、遂に其體腔の上部（前壁又は後壁に附着す。茲に於て始めて妊娠の成立するものにして、卵はこれより子宮腔内に於て其の發育を遂ぐ。

### 第五節 血管腺

#### 一 脾臟

左季肋下にあり。大さ手拳の半位。柔軟にして赤褐色を呈す。血液の製造に關係あり。

#### 二 淋巴腺

前に述べたり。機能は白血球の製造及有害物の抑留なり。

#### 三 胸腺

成人には失はる、小兒にては大動脈基部（出發部）と胸骨との間にあり。小兒の發育に關係あり。

#### 四 甲状腺

氣管の最上部前面にあり、馬蹄狀をなす。

#### 五 副腎

左右腎臟の先端に位す。



### 第三編 消毒法

#### 第一章 細菌

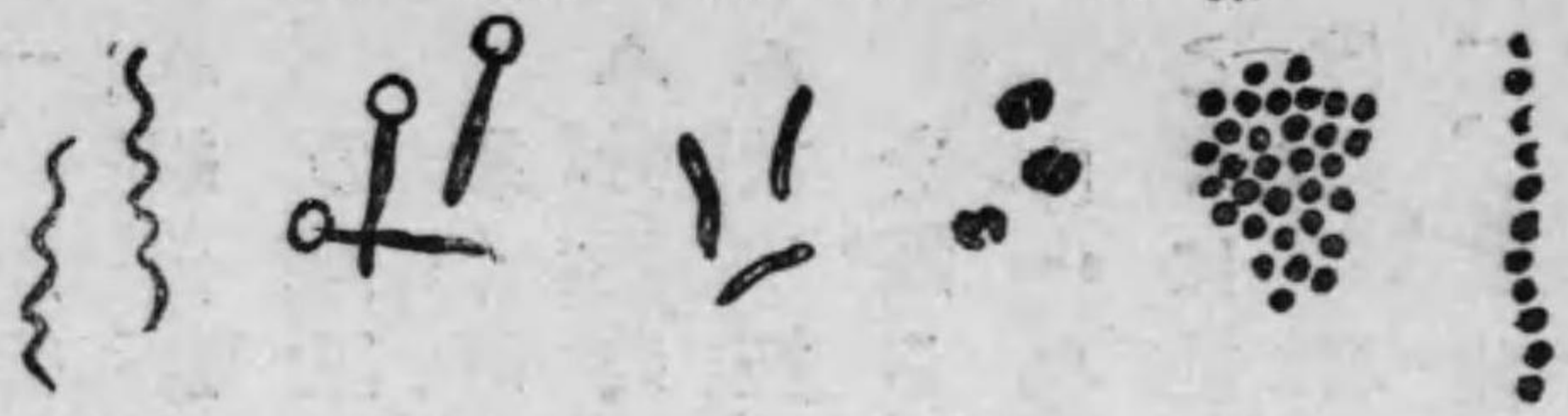
細菌は、極微の生物にして通常顯微鏡によりてはじめて見得るものなり。

この細菌の中には、人體に無害のものと有害のものとあり。有害にして疾病を起すもの、これを病原菌と稱す。病原菌の中主なるものは次の如し。

#### 第一 球 菌

一 連鎖狀球菌及葡萄狀球菌 以上二つ共に化膿菌にして到る

菌細の種諸 圖 五 十 六 第



處に多く存在し、この爲めに種々の化膿を起す。又これによりて、産褥熱をも起すものなり。

- 一 丹毒菌 連鎖狀球菌の一種なり。
- 二 淋病雙球菌。

#### 第二 桿 菌

- 一 結核桿菌。
- 二 破傷風桿菌。

#### 第三 螺旋菌

「スピロヘーテ、パリーダ」梅毒の病原菌。

#### 第二章 消毒の必要なる理由



第一、産褥熱豫防の爲に必要なり。

▲細菌殊に化膿菌の如きは殆ど到る處に存在し、而も吾人の肉眼に映じ得ざるを以て、肢體又は各種の物體は是れ悉く細菌を以て充され居ると見るを至當とす。

▲分娩時には生殖器に必ず多少の創傷を免れず。

▲故に妊産褥婦の生殖器に、消毒せざる手指又は各種物體を觸るゝ時は、之等に附着せる病菌は忽ち其創傷より體内に侵入し以て産褥熱を起すに至る可し。

こゝに於てか、妊産褥婦の取扱に際し、手指外陰部器械又は繃帶材料等の消毒を要する所以なり。

第二、其他の傳染病豫防の爲に必要なり。

消毒は常に産褥熱豫防上必要なるのみならず、尙次の如き

疾病の豫防にも必要なるを忘るべからず。

表 一 十 第

病疾る起爲るたり怠を毒消

他 其	の も き 多 係 關 接 直 に 婆 産			病 名	病 原 菌 侵 入 門
	兒 生 初	體 母	産 褥 熱		
諸 種 の 傳 染 病 (獨 習 書 に 示 せ り)	鷺 口 瘡	破 傷 風	膿 漏 眼	破 傷 風	生 殖 器
	口 腔 粘 膜	臍 ・ 皮 膚 の 創 面	眼		

第三章 制腐法と防腐法



消毒法とは、肢體又は各種の物體に附着せる細菌を殺滅し、以て無害たらしむる法にして、これに制腐法と防腐法との二あり。

### 第一節 制腐法

既に細菌の爲め病變の起りし場合に（通常藥品の力により）其細菌を殺滅し、以て其病勢を抑制する法なり。

例へば。生殖器に潰瘍ある時に、こゝを石炭酸其他の消毒液にて清洗するが如き。或は一般化膿創面に「ヨードフオルム」等を撒布するが如きは制腐法なり。

### 第二節 防腐法

肢體又は各種の物體を無菌の状態となし、且つ更に細菌の來らざる様になし、以て疾病を未然に豫防する法なり。

例へば。正規の妊娠分娩産褥に際し、其外陰部を消毒し或は産婆の手指器械繃帶材料等をも消毒し、以て産褥熱を未然に防ぐは防腐法なり。

或は手術部の皮膚及術者の手指の細菌を除き（皮膚の消毒）無菌の刀を以て切開し、無菌の器械にて手術し（器械の消毒）手術部を無菌の「ガーゼ」類を以て被ひ（繃帶材料の消毒）以て化膿を豫防するが如きは防腐法なり。

皮膚は眞に悉く細菌を除き得ざるも、器械及繃帶材料等は熱力等によりて、全然細菌を殺滅し得るを以つて、其消毒を亦



殺菌又は滅菌ともいふ。

### 第四章 消毒法の種類



### 第五章 消毒藥

#### 第一節 消毒藥の種類

産婆の使用する消毒藥の主なるものは次の如し。

- 一 石炭酸
- 二 昇汞
- 三 「リゾール」(クレゾール石鹼液)
- 四 「リゾフォルム」
- 五 酒精
- 六 「ヨードフォルム」。「アイロール」。「デルマトール」の類
- 七 硝酸銀。「プロタルゴール」
- 八 硼酸

第四章 消毒法の種類 第五章 消毒藥



### 第二節 消毒薬の用法

#### 一、石炭酸水

石炭酸は白色針状の結晶なり。これを温湯にて温め流動性となしたるものを、湯を以つて稀釋す。

(1) 5% 石炭酸水、器械の消毒に用ふ。

(2) 2% 石炭酸水、手其他皮膚の消毒に用ふ。

(腔洗滌等には更に倍に稀めたるものを用ふ)

#### 二、昇汞水

昇汞は白色の結晶にして毒薬なり。同量の食鹽を加へて水に溶解すべし。其の溶液は無色透明無味無臭なるが故に、通常酸「フクシン」、又は「スカレット」等を以て着色す。

(1) 〇、二% 昇汞水、金屬製ならざる器械類(ゴム製等の器械)の消毒に用ふ。

(2) 〇、一% 昇汞水、手其他皮膚の消毒に用ふ。

(3) 昇汞錠、携帯に便なり。

食鹽 〇、五  
昇汞 〇、五  
「フクシン」 少量  
を昇汞錠一個となす。

故に千倍の昇汞水を千瓦作るには昇汞錠二個を要す。

#### 注意

次の場合には昇汞水を用ふべからず。

1. 子宮内洗滌、又は大なる創傷の洗滌。

2. 食器玩具の消毒又は飲料水に混すべき處ある處の消毒。

3. 痰・吐物・糞便の消毒。

4. 金屬製器具の消毒。



三、リゾール水

リゾール(クレゾール石鹼液)は茶褐色透明の液體にして、  
随意の分量に水に溶解す。

- (1) 六%リゾール水、器具の消毒に用ふ。
- (2) 一%リゾール水、手其他皮膚の消毒に用ふ。  
(腔、或は子宮の洗滌には更に倍にうすめ用ふ。)

第六章 消毒の方法

第一節 手指及皮膚の消毒法

(一)(二)

先づ産婆着を着し、肘關節よりも上方までを露し。  
爪端を短かく剪り爪隙間にある不潔物を清潔なる小楊枝

又は爪鑑の先にて掘り出し、爪を鑑にて滑かにす可し。

第六十六圖 爪鑑



然る後次の三段の法に従ひて消毒す可し。

第一段の方法

攝氏五〇度位の温湯と 石鹼と 刷毛とを用ひて、前膊、手  
及指を丁寧に洗ふ可し。

温湯は絶えず流出するものをよしとす。若し、この装置の  
なき時には、二個の洗面器を用ふ可し。即ち一個は石鹼使  
用時に用ひ、他の一個は石鹼を洗ひ落すに用ふ。(或は土瓶  
類に温湯を入れ流出せしむるもよろし。)

石鹼は「加里石鹼」を最上とす。之のなき時は香氣よりも其の  
性質の佳良なるを選ぶ可し。



刷毛はあまり小なるはよろしからず、毛は成る可く耗きを宜しとす。使用後は一度煮沸して乾燥しおく可し。

以上は五分間以上(五十分間)平等に擦刷し、殊に指間、爪隙其他の凹處に注意すべし。

第二段の方法

「アルコール」を殺菌したる「ガーゼ」或は木綿布、或は「フランネル」に浸して、凡そ三分間平等に摩擦す可し。

第三段の方法

前述の消毒液即ち通常は〇、一%昇汞水(或は二%石炭酸水或は一、%「リゾール」水)と、殺菌したる刷毛とを以つて三分間平等に摩擦す可し。

▲以上の方法にては手指を全然無菌たらしめ得ず。故に前記

の法にて消毒したる手指の上に、完全に殺菌したる「莫大小手袋」を用ふれば更に安全なり。(護護手袋は最も理想的なれど經濟上の關係にて一般にこれを使用し難し。)

注意

一 産婆は常に不潔物に觸れざる様注意すべし。

(一) 種々の傳染病 例へば丹毒、破傷風、實扶埵、利亞、發疹、奎扶私。

右の患者又は其の汚染物。

(二) 膿汁を分泌する患者 或は膿汁の附着せる物品。

(三) 産褥熱患者 或は其の惡露等の附着せる物品。

(四) 屍體 又は屍體より取り出したる内臓等。

以上の如き不潔物に手を觸れたる後は、産婦、褥婦の陰部又は初生兒の臍部等に手を觸る可からず。就中丹毒又は産褥熱患



者を取扱ひたる後は三日間は他の産婦褥婦を取扱ふ可からず。其間は休業し、時々手指を消毒し全身浴をなし、其度毎に衣服をも更む可し。

二、産婆は手指に創傷を作らざる様注意す可し。

若し極めて小なる傷なりとも存する時は「ゴム」製指袋を用ふ可し。(稍大なる傷ありて膿を出す時は、産褥婦を取扱ふ可からず。)

三、一度消毒したる手(又は他の物品)も、次の場合には消毒の効力を失ふ。

- (1) 消毒せざる物品又は肢體に觸れたる時。
- (2) 消毒後手を乾燥せしめたる時。

(故に手は時々消毒液にて潤す可し)

### 第二節 外陰部の消毒

#### 第一段の方法

温湯、石鹼、綿紗(又は脱脂綿)を以て、皮膚及粘膜を丁寧に洗ひ、温湯にて石鹼を十分洗ひ流すべし。

温湯は浣水器に容れ、これを外陰部に注ぎ、臀部の下には受器を置くべし。

#### 第二段の方法

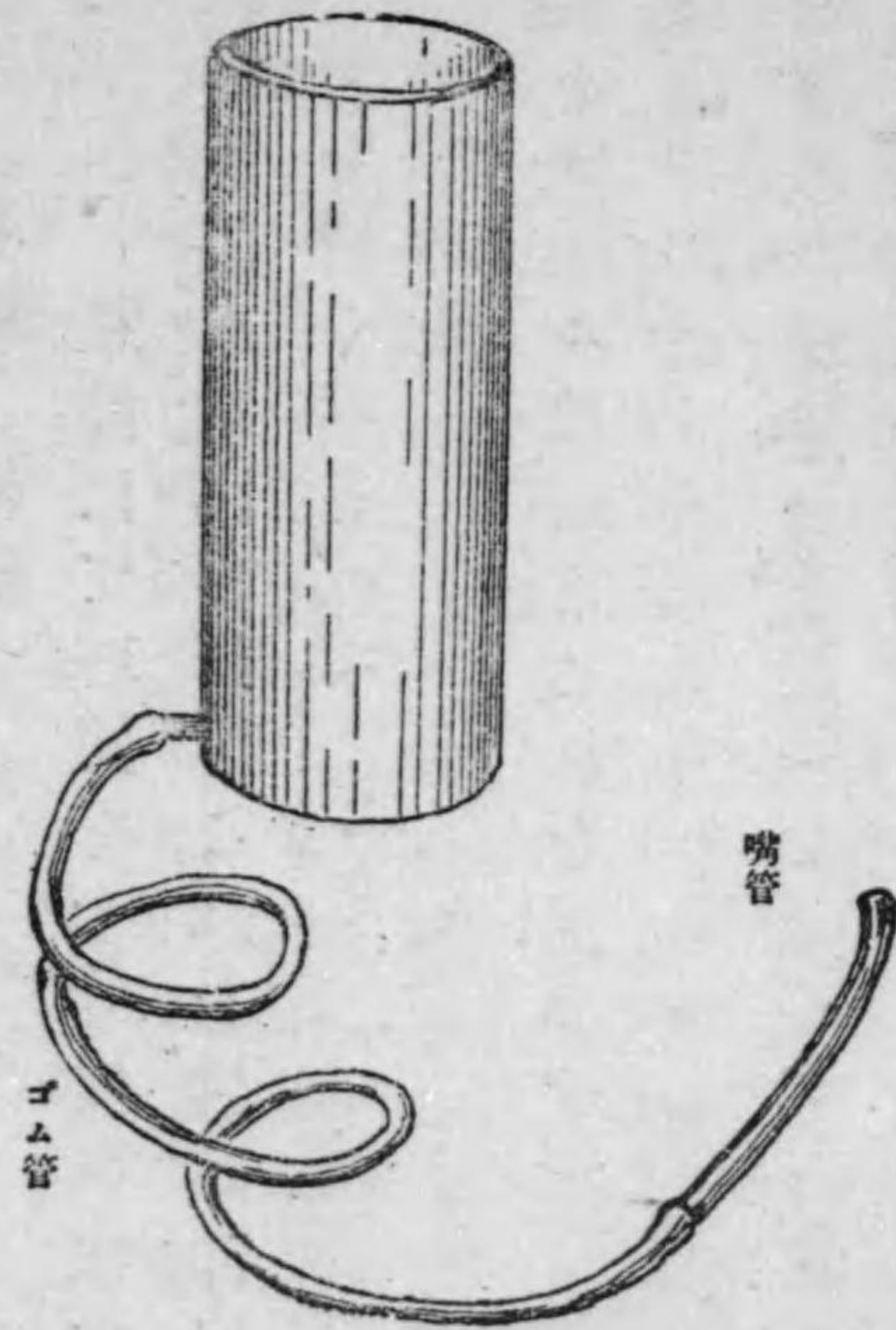
(アルコールは通常これを用ひず。)

#### 第三段の方法

消毒液と綿紗(脱脂綿)を以つて外陰部を洗ふ可し、この消



第六十七圖 澗水器



一四六  
毒液も澗水器に容れ  
たるものを用ふ。  
注意 すべて外陰部  
の内面又は皺  
襞の間を注意  
して清むべし。

第三節 器械の消毒法

一、煮沸消毒法

通常シンメルブツシユ氏煮沸消毒器を用ふ。其釜に湯を入

第六十八圖

シムプルメソ氏煮沸消毒器



れ、其の中に凡そ一%の  
割合に重炭酸曹達或は炭  
酸曹達を加へ熱す可し。  
これは鐵製の器械に錆を  
生ぜしめざる爲め及消毒  
の効力を強からしむる爲  
め加ふるなり。  
煮沸の時間は沸騰後五  
十分間、(双物類は凡そ五

分間)とす。  
注意

(1) 凡て器械は湯中に全部浸しあるを要す。  
(2) 硝子製器械は水より煮沸するか或は一度び微温湯に



て温めたる後に熱湯中に入る可し。又物類は「ガーゼ」にて刃を包みたる後静かに入らるべし。

(3) 煮沸消毒の後に直ちにこれを使用する時は、單に消毒したる器械皿中に列べ。若し消毒後使用までに時間を要する時は、薄き消毒液中に器械の全部を浸しおくべし。

(4) シンメルプツシユ氏煮沸消毒器のなき時は、通常の釜、鍋、鐵葉製の罐等を代用するを得。

## 二、消毒液による方法

五〇〇倍昇汞水(金屬製器械を除く)、五%石炭酸水等の中に器械の全部を浸し、少なくとも三十分間以上浸しおく可し。これは通常煮沸し得ざる器械 例へばゴム類、に用ふ。

この方法もはじめに、温湯と石鹼と刷毛とを以つてよく洗ひたる後になす可し。

**注意** 器械使用後は 一度よく洗ひ煮沸消毒を行ひ、其の熱の冷えざる中にこれを拭ひて乾燥し、鐵製のものは渡金の有無に拘らず「オリーフ」油又は「ワセリン」等を塗りおく可し。

## 第四節 繻帶材料の消毒法

(繻帶材料とは綿、脱脂綿、綿紗、布、結紮絲等なり。)

### 一 煮沸消毒法



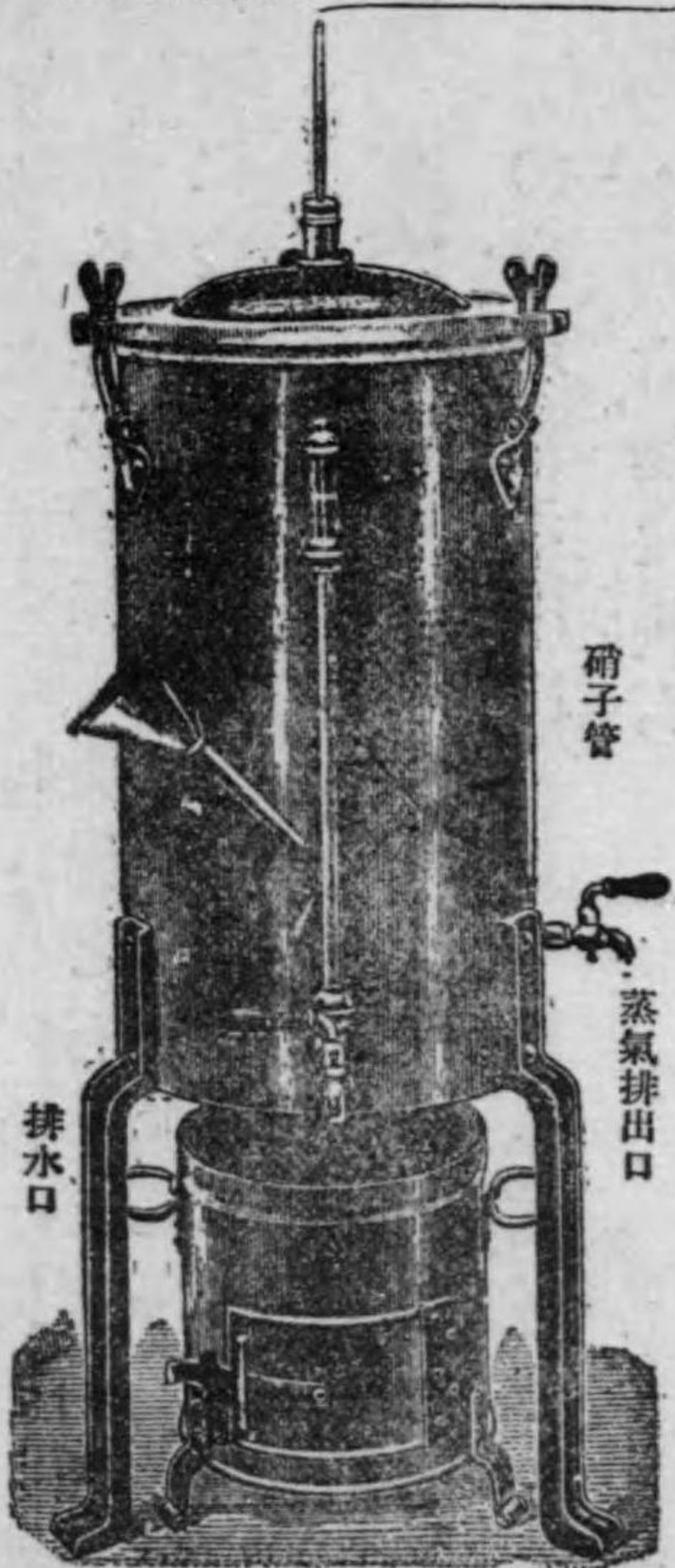
濕りたるまゝ用ふるものは煮沸するを便とす、時間は五分一

十分間。

これも亦消毒後使用までに時間ある時は、薄き消毒液中に浸しおく可し。煮沸後直ちに用ふる時は、殺菌水、或は消毒液にて冷すべし。

二、蒸氣消毒法

圖九十六第  
器毒消氣蒸氏ユシッブルメンシ



乾燥のまゝ用ふる可き品はこの方法に従ふ。先づ消毒罐一名、或は綑帶材料貯

槽の側面及底面の窓孔を開きて、罐の内部に稍大なる一枚の布を敷き、其内部に適當の大きさに切りたる綿、ガーゼの類を軽く詰め、先の布片を以つてこれを包み、更に罐の蓋を閉し、

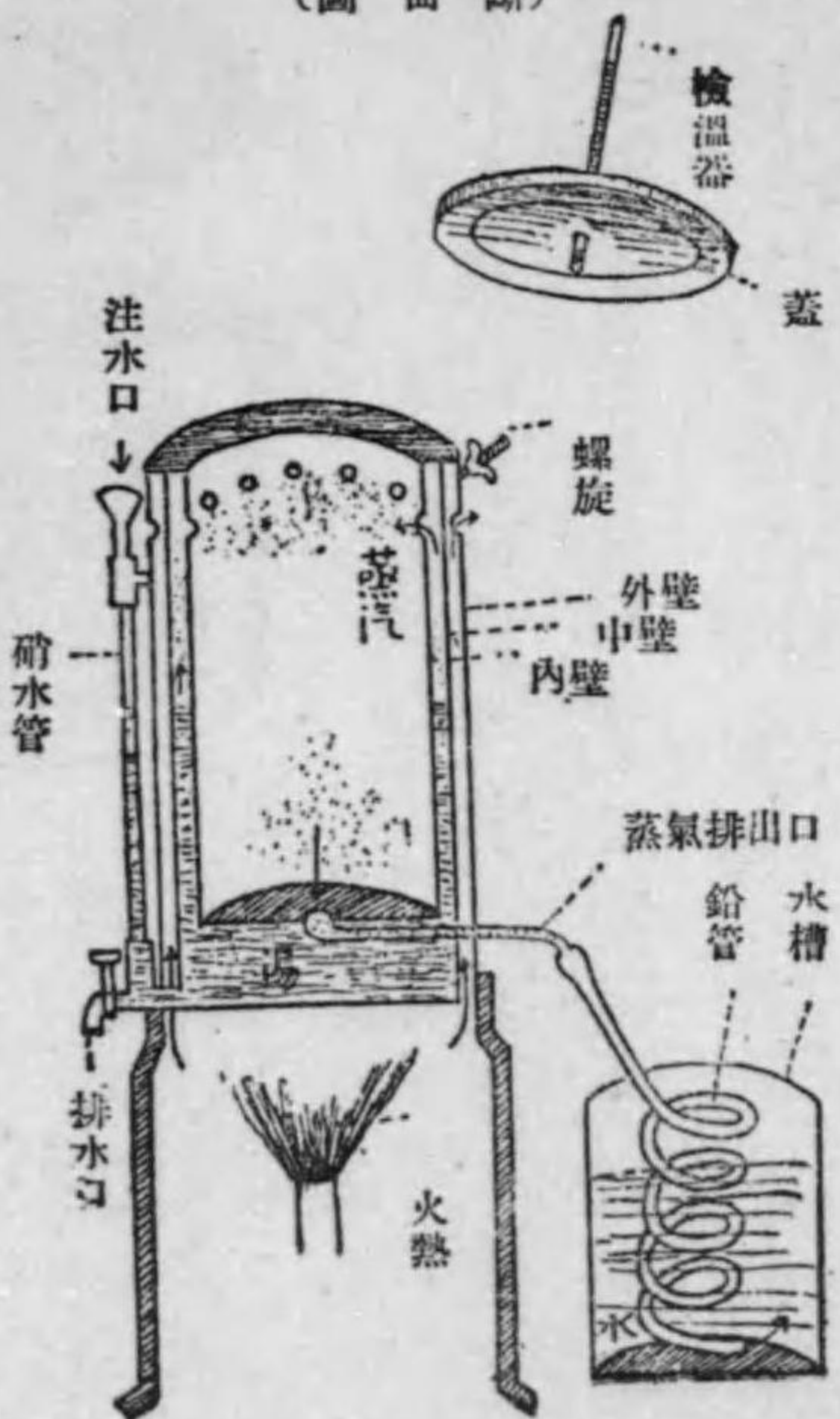
圖十七第  
器容料材帶綑



し、蓋の中央に寒暖計を押し込み、釜の下より瓦斯、木炭、火等を以つて熱を加ふ可し。この熱の爲めに内部の湯の沸騰する時は、湯より蒸氣を發生し、其の蒸氣は釜の内面上部の孔よ



圖一十七第  
器毒消氣蒸氏ユシッブルメンシ  
(圖面斷)



一五二  
り釜の中に出で、消毒罐の窓孔より入り、其内部の綑帶材料を通過し、再び消毒罐より出で釜の底の管を通じ釜の外に出で鉛

管により槽中の水に導かる。  
この時間は、蒸氣が攝氏百度に昇りて後三十分乃至四十五分間を要す。  
此終りたる時は、第一水槽に連る鉛管を去り、第二火熱を去り凡そ五分間冷却した後、第三釜の蓋を開き、消毒罐の窓孔

に觸れざる様に注意してこれを取り出し、すみやかに其窓孔を閉す可し。  
其の材料を使用するには其度毎に罐の蓋を開きて取り出すものなれども、一度開きたる時は其の材料は當座の使用に供し、殘餘は他日其の儘使用することなく、不足分を補足し更に再び消毒す可し。  
三、藥品消毒  
綑帶材料を石炭酸水、昇汞水、「リゾール」水等に浸して用ふる  
ことあり。  
又昇汞水、「サルチル」酸液、硼酸水等に浸して乾燥したるものを販賣するものあれども、完全に無菌と云ひ難し。



### 第五節 衣類の消毒法

産婆着、産婦の衣類、敷布、其他の布類は、蒸氣消毒を行へば完全なれども、通常實行し難きを以て、一度煮沸したる後日光にて乾燥し、尙火熨斗をかくれば比較的安んじたりとす。

或は、曹達水、石鹼汁、又は木灰汁中に二時間以上浸し、或は熱湯に漬けて後石鹼を用ひて洗ふ可し。

**注意** 以上の法にて消毒したる衣類は、假令蒸氣消毒をしたるものにてても、消毒せざる手にて取扱ひ又は普通の場所に貯へたる時は、只比較的清潔と云ふに過ぎざるを以て、之を消毒したる手指、外陰部、繃帶材料等に觸れざる様注意すべし。

大正七年六月三十日初版發行  
大正八年四月三日再版發行  
大正八年十一月二十三日三版發行  
大正八年十一月二十三日三版發行

正價金七十錢

送料金八錢

發行者兼

佐久間兼信

發行所

東京市神田區三崎町三丁目一番地  
私立東京助醫女學校  
電話番町二六八・接替東京三九九二一

印刷人

東京市神田區美土代町二丁目一番地  
島連太郎

印刷所

東京市神田區美土代町二丁目一番地  
三秀舍

特約賣捌

東京市本郷區龍岡町三十四番地

南山堂書店

電話下谷四一七八・接替東京六三三八



512

肆 書 捌 賣

本郷區湯島切通坂町	南江堂書店	名古屋市中區老松町	大竹書店
日本橋區通三丁目	丸善書店	名古屋市中區橫三藏町	三輪書店
本郷區春木町二丁目	半田屋書店	京都市三條寺町	南江堂京都支店
同區同町三丁目	南江堂支店	同寺町通	若林茂一郎
本郷區龍岡町	吐鳳堂書店	同三條通	丸善支店
同區湯島切通坂町	金原書店	仙臺市國分町	丸善支店
神田區鍛冶町	朝香屋書店	長崎市引地町	集榮堂書店
本郷區元富士町	明文館書店	熊本市新二丁目	長崎次郎
本郷區元富士町	文光堂書店	同洗馬町	芹川書店
本郷區龍岡町	朝陽堂書店	鹿兒島市仲町	谷村書店
本郷區龍岡町	根津書店	岡山市内山下	渡邊書店
本郷區龍岡町	文榮堂書店	同東中山下	文江堂書店
湯島切通坂町	宮澤書店	福岡市博多	丸善支店
同	富倉書店	金澤市片町	宇津宮書店
神田區表神保町	東京堂書店	金澤市廣坂通	い乃や書店
芝區愛宕町	明文館支店	新潟市古町通	萬松堂支店
大坂市心齋橋筋一丁目	松村九兵衛書店	千葉縣千葉町	明文館支店
同博勞町	丸善書店	同	松田屋書店
名古屋市中區榮町	丸善書店	同	豐文堂書店



終